
レイモンドール綺譚（転成の章）

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイモンドール綺譚（転成の章）

【Zコード】

Z0252E

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

三年前、魔術によつて守られていた結界が無くなり、混乱状態に陥つたレイモンドール国。魔道師の手から取り戻したかに見えた権力もいつの間にか、魔道師の元に戻ろうとしていた。州侯の娘、アリストローザ、騎士、元レジスタンスのリーダー、小さい廟の魔道師ら4人が立ち上がる。果たしてレイモンドールはどうなるのか・・・。

1・変革のヒテ（前書き）

これは、「レイモン・デール綺譚」の続編となつております。
感想をお気軽に書いてくださると力になります。ただいまレイア
ウトを変更中のため、
読みにくいかと思いますがよろしくお願ひします。

1・変革のとき

朝の淡い水彩の光がやつと石造りの小さな廟の屋根に届く頃。

その廟の戸をしつこく叩く音に仕方なく中年の魔道師が戸を開ける。

「誰ですか、こんなに朝早く……あ、あなたは」

絶句する魔道師の肩に手を置いて廟に勝手に入つて来た小柄で細い男に魔道師はおろおろと周りを伺つて戸を閉めた。その顔にうかんでいる表情は歓迎とは正反対に歪められている。

「何なんですか。何だつてこゝへいらしたんですか、アリストローザ様」

「せつかく久しぶりに会つたというのにあんまりね、ダニアン」
はああとわざと聞こえるようにため息をついて、側にある椅子に座るダニアンと呼ばれた頭がやや薄くなつた中年の魔道師。

「あれからあたしは州宰代理の任を解かれて、この小さな廟主として慎ましく暮らしております。だいたい、あたしは三年前の謀反の事なんてちつとも知らなかつたんですよ。本当にいい迷惑ですよ、あやうくあたしまで牢屋行きになりそつたんですからね」

魔道師はふくれつづらで言いながらもアリストローザにお茶を出す。

「悪かったと思っているわよ、もちろん。だけど、わたしの話を聞いて。ボルチモアでわたしの昔のことを知つていて助けてくれそうなのはあなただけなのよ」

「めつそうもない！ これ以上あたしを窮地に追い込むようなことに巻き込まないでください。あたしはただの魔道師ですよ」

顔の前で手を振る魔道師の腕を男装したアリストローザが掴んで引き降ろす。一瞬三年前に戻つたのかと錯覚するくらい、彼女の顔は毅然としていた。

「ハーネート公の命を助けるのよ。そして今の王をひっぱたいて目

を覚ませてやるわ」

「で、あたしに何をしろと」

「とりあえず、寝かせて。丸一晩歩きづめでくたくなのよ」

アリストーザはそう言つと勝手に奥に入つてしまい、魔道師の男はまた一つため息をついた。

事の始まりは一通の手紙。

レイモンドール國の北部ボルチモア州、州都ケスラーにある州城の一角。

水分を含んだ少し冷たい風が城の壁を下から吹き上げて若い女の頬をなぶるように通り過ぎていく。

ああ、あの時もこの季節だつたと彼女はつぶやく。

ただ、そう思うだけで自分の意識はあの頃に帰つていく。彼に会いたい。

そう、願つているのに。

「アリストーザ様、文が届いております」

自室の出窓に腰をかけて外を眺めている女性に、黒い女官のお仕着せを着た少女が声をかける。

「ありがとう、イライザ。そのテーブルに置いておいて」窓から視線を移さずに言葉をかけるアリストーザに女官はペコリとお辞儀を返す。

彼女は大事そうに手にしていた書簡をテーブルに置くと室を出る。

それにもわたくしに文を送る人間がいようとは。

出て行つた女官の足音が消えてから、彼女は首を傾げながらも足早にテーブルに向かうと書簡を開く。

大罪を犯したことで親も知り合いも失くし、あえて自分に関わるうとする者もいるはずが無かつた。

訝しく思いながら書簡を読んでいたアリスローザの顔が次第に綻ぶ理由。

それは三年前の謀反を起しそうと画策していた時に自分と動いた男の一人からだつた。

三年前今はこの国にいな魔道師、クロードという少年によつて自分の父親ここ、レイモンドール國の北部のボルチモア州、州公の謀反は暴かれたのだ。

父親は斬首され、自分も同じ運命だらうかと思つていたのだが……。

結局、王弟でもあるクロードという少年魔道師に命を助けられて。今はボルチモア州の新たな主であるスノーフォーク候爵に養子にいつた義兄の所にお預けの身になつている。半分は血の繫がつてゐる兄のこと、不自由無く暮らしてはいる。だが、監視がついているため昔のように男のなりをして出歩くわけにはいかなかつた。地下のアジトから州兵の追跡を免れて逃げのびることが出来た、レジスタンスのリーダーがいたことにアリスローザは心底ほつとする。

あの頃、自分は玉座を狙う父親の上辺の甘言に惑わされて謀反の片棒を担がれていた。それは自分でなく大勢の仲間を巻き込んで結果、たくさんの命を奪うことになつてしまつた。

それなのに自分はこうしてのうと生きている。

「わたしは生きる価値があるのかしら。クロード、教えてほしい」懐かしい名前を口にしながらアリスローザは華奢なドレスに付けるのには少し不似合いな燻し銀の丸くてじつにペンダントにそつと触れた。

別れるときにクロードが持つていてくれと彼女に託していつたもの。

そして……触れるだけのくちづけ。

ふふ、とアリスローザは微笑む。自分もクロードもまだまだ子どもだったのだ。一年前自分は十七、クロードは十五だったのだ。

今ならじりのだれづ、もとと自分の気持ちに正直になれたのだ
らうか。

王の資格を持ちながらそれをあつさつ捨てて旅立つていった少年
のことを、アリストローザは今も忘れることができないでいる。

月の光を溶かし込んだような髪、深い湖の底のような美しい瞳の
少年を。

揺らがないそのままのすぐな横顔を。

「彼は変わったかしら」

アリストローザは壁に掛けてある鏡に映った自分の姿にはっとする。三年前の少女の面影はすっかり影を潜めたように感じる。黄みの強い明るいブロンドでスカイブルーの瞳。しかし、無邪氣に正義を振りかざしていたあの頃とは違う。

大人の分別を備えた貴族の娘。あと暫くすれば、豪商か、近隣の貴族との婚姻が決められてしまつ。十九歳では遅いくらいだが、いわくつきの娘を嫁にもらうのは持参金の額だけでは覚悟がいるのだろ、

しかし、クロードは十四歳のまま歳を取つていなければ。

彼は身の内に魔教の書を封印され外見の変化を止めてしまった。そして、旅立つていつたのだ。手の届かない遠くへ。自分も行きたかった。

連れて行つて欲しかつたのに。

彼女はいつの間にか自分の手からすり抜けて落ちていた書簡に気付いて我に返る。

書簡には他愛も無い日常の話がつらつらとそれこそしつこいくらいに書いてあるが。

アリストローザはその書簡を拾い、テーブルに置く。

羽ペンをインク壺から引き抜いて、ある法則に従つて線を引き、言葉を入れ換える。一通りやり終えると満足そうにくすりと笑つた。その書簡に書いてあつたのはレイモンドール国の首都サイトスの国府の内情。三年前、魔道の結界が無くなり政治の主導権は魔道師の手から王の元へ帰つたはずだった。

ところが王弟のクロードが国を出奔した後、たつたの半年ほどで王のたつての希望により祭祀長だった魔道師コーラルが宰相の任に就く。

そして暫定的だつたとはいえ、混乱の一一番大変な時期に勞を煩くした前国王の兄、ハー・コート公は補佐という立場に落とされる。

その不名誉にもハーラー・コート公は國のためにサイトスに留まりつづけてはいたが、コーラルの力はますます強くなつてきていた。

せつかくたくさんの血で魔道師から勝ち取つた権力。それを新しい王、クロードの双子の兄であるクライブは簡単に手放そうとしているのだ。

「まったく、何てこと。クロードには悪いけどクライブが王になつたのは絶対間違いだわ。一体何を考えているんだか」

書簡にはこの度、ハーラー・コート公の所領モンド州で父に代わり州公代理を務めている嫡男、ダリウスが深刻な病にかかつたことが書いてあつた。

そのため、一時ハーラー・コート公がモンド州に帰ることになつた事を知らせる内容。しかし、この話には裏がありそつだ、と文は続いている。

この国を魔道師の国に戻したいコーラルにとつてハーラー・コート公は目の上のたんこぶでしかない。血の繋がりでいえばこの一人は兄弟なのだが、情ということで言えば一人の間には全く通じる物が無かつた。

双子で生まれた前王とコーラルだが、魔道師として生まれて直ぐに魔道師の本山であるゴートの廟に連れて行かれた瞬間からコーラルはこちらとの縁が切れたのだ。

躊躇だつたのはその内面。

彼にはハーラー・コートや前王に対する思慕の情も親愛の情もまったく無い。あるのは盲目的に帰依している魔道教への思いと自分が王になるという野望だけ。

「ハーラー・コート公の嫡男の急病の知らせはガセかもしれない、か」

と、なるとサイトスからの道程のどこかでハーラー・コート公は命を奪われる可能性がある。今、ハーラー・コート公に亡くなられたらこの国は大変なことになる。

アリストーザは思わず唇を噛んだ。『…………』と窓のことを懐かしんでいる場合では無くなつた。

兄には悪いがわたしは行動を起こす。

アリストーザは手にした書簡をびりびりと破り広く開けられた窓から投げ捨てた。

投げ捨てたのは手紙だけでは無い

今までの自分。自分の身を

嘆いている不甲斐ない心そのもの。

「アリストーザ様、ワインをお持ちしました」

言いつけていたワインを夕食後に持つて来たのを知らせるイライザの声。

「入つて」

女官のイライザが盆の上に背の高い杯に入れたワインを載せてそろそろと部屋に入つて来る。

「ああ、イライザありがとう。ねえ、ちょっと頼みがあるのよ、こつちへ来て」

衣裳部屋のほうから声が聞こえてイライザはただいま、と感じて盆をテーブルに置くと声のした方へ向かう。

「アリストーザ様？」

「ねえ、この夜着なんだけど、どのガウンがいいかしらねえ」

いつもあまり着飾ることなどしないアリストーザが夜着のことなんかで迷つてているのを不思議に思いながらも、イライザは首を傾げながら何枚かを引き出しから出して広げる。

「この薄い桃色のガウンはいかがです？」

「そうねえ、この水色のはどう？」

そう、言つてからアリストーザがぽんと手を打つた。

「あなた、ちょうど私と同じくらいの背格好だもの。ちょっとこの夜着を着てみてくれない？ 桃色にするか、水色にするか、見てみ

たいわ

「そ、そんな。わたしなんかがアリストローザ様のお衣装を着るなんてとんでもない」

驚くイライザにアリストローザはまあまあと笑いながら手招く。

「衣装って言つたつて夜着だし、ここはわたしとあなただけじゃない。あなたが黙つていたら誰にも知られる事なんかないでしょう？」

「ちょっと合わせるだけよ」

そこまで言われたら女官の立場で何も言つことはないが。それに美しい服なら夜着だと言えど年頃の少女にとつて嬉しくないわけはない。

イライザが夜着に着替えるとアリストローザはうん、うんと笑いながら桃色のガウンを渡した。

「あら、あなたの言う通りね。その色がいいわ」

トロンとした絹の手触りにうつとりしながらイライザはあつさり決まつたことに内心がつかりしながら夜着を脱いだと手をかけたが、アリストローザが当身をしたためにそのまま床に崩れ落ちた。

「ごめんね、イライザ。明日の朝までわたしの代わりを頼むわ」

少女の体を寝台に運び込み、掛け布を頭まで引き上げた後、自分は女官の脱いだ服を着込む。そして寝台の奥に手を突っ込んで一抱えの荷物を抱える。

その日の変わらぬうちに元ボルチモア州、州姫アリストローザの姿は州城から消えた。

3・沈む心

レイモンドール国の首都、サイトスの主城。

やつと一人になつて寝所に帰つたこの国の王、クライブはため息をついて寝台に腰をおろした。

王に即位してから毎日、まるで空気を求めて水面近くに口をぱくぱくと開けている魚のような息苦しい気持ち。

長い長い悪夢の中といふようだ。それでも初めの頃は、違つていた。

弟が、クロードがいたからだ。双子で同じ歳のはずなのにいつも決然と前を向いていた彼。王になれど、君ならやれると力強く言つてくれた彼。

即位式の時に笑いかけてきた、あの笑顔がずっとクライブと共にあるとと思っていたのに。

「クロード、わたしを裏切つて。国を裏切つていたのか」

何度も繰り返す問いかけに答える相手はもうこの国にはいない。頼りになるのは亡き、父王の双子の片割れである魔道師のコーラルだけ。

この国は五百年もの長い間、双子の一人が王になる運命だった。そして双子のもう一方は魔道師になる。

この国は国境を魔術で封じて王は魔道により加護を受ける代わりに、王は自分の半身を差し出してきたのだ。

お任せくださいと、その彼は優しく言つのだ。まだお若いのですから政務がお解かりにならないのも仕方ありませんよと慰めてくれる。

「そのために私がいるのですよ、陛下。どうぞ、私に全ておまかせを。陛下はゆつくりお勉強なさつてくださいませ。政務ばかりに煩わされるお暮りでは陛下の御身に障ります」

「一ラルはそう言ってクライブのために度々豪華な宴を開き、狩猟をすすめ、旅行をすすめてくれるが。」

クライブはそれにも心底疲れていた。

まだ、國の基板がしつかりとしていないといつた王である自分が遊んでいいはずがない。ハーコート公をモンドに帰す命を出したのは早計だったかもしない。

彼は「一ラルのように耳障りの良いことばかりを言う人間でもない。厳格で自分にも妥協しない。

頼りになるが一緒にいると自分がいかに矮小かと思い知らされるようで辛いのもまた事実だった。

「ラドビアスを置いていってくれたらよかつたのに」

クライブは自分の弟の従者の名をつぶやく。

三年前の混乱の時、サイトスであつていう間に国府内を掌握し、次々と片付けていく彼の辣腕ぶりに驚いたものだった。

しかし、奢ることも無く控えめな態度で宰相の座をハーコート一公に決めてからはあっさりと元の一介の従者に戻った男。

「ずるい、ずるい」とクライブは思う。

クロードは自分の持っていない物を何でも持っているのだ。確固たる自分の意思、頼りになる従者。

そして　自由だ。

「不公平だ」

口に出すと自分があまりにも可哀想になつてクライブはきつく目を閉じた。この世は何て不公平なんだ。玉座なんて今すぐ欲しい奴にくれてやる。

クロードを悪者にしなくては今の自分がうかばれない。

自分を哀れむ悲しい穴を自らがせつせと掘り続けているのに気付かないほど、クライブは自分を見失っていた。

アリストローザが起きたのはそれから一刻半ほど経った頃。先ほどから彼女は、ダニアンの用意したパンケーキをおいしそうに食べている。

「このパンケーキおいしいわね、黒すぐりのジャムがあればもっといいんだけれど」

「何、ぜいたくを言つているんですかね、まったく。ところでいつまでここにおられるんです?」

食べたらさつさと出て行つて欲しい事を前面に出しながらダニアンはぶつぶつと言しながらもお茶を入れる。なんと言つても気の良い男なのだ。

「ごめんね、ここで人と落ち合つことにしたのよ。それまでよろしくね、ダニアン」

「なつ……」

またも絶句するダニアンをよそに指差される空いた皿。

「もう少し、パンケーキが欲しいんだけど、ダニアン」

廟の前庭を掃いていた歳若い魔道師の目前に、道でも聞くよつて声をかけてきた小汚いマント姿の大男。

「ここにダニアンという魔道師はいるか」

「はい、ここに廟主様ですけど何か」

魔道師の返事にそうか、と笑つた男はそのまま廟の中にすかずかと入つて行く。

驚いて止めようとする魔道師を従えながら入つて来た男に気付き、アリストローザが声を上げた。

「ウイリアム」

「アリストローザ、久しづりだな」

男の顔を見てアリストローザの顔が曇る。

「助かったのは二人だけだつたと聞いたわ。わたし、本当ならあなたに顔向けなんてできないのに」

アリストローザの言葉にウイリアムは微かに顔を歪めたが、伸ばされた手はしっかりと彼女の手を握つた。

その握られた手の力強さにアリストローザは、ほっと息をついて力を込める。

「おまえも俺も国のためにやつたことだ。人のせいなんかにおれはしないさ。そしてまた、おれはやるし、おまえもやるんだろう?」「ぼさぼさのレンガ色の髪をがしがしこきながら、無精ひげの垢じみた顔をにやりとさせてウイリアムと呼ばれた男はどつかりとそこの主のように椅子に座る。

「腹へつたなあ、何か食わしてくれ」

「あんた達と来たらここを宿屋か何かと勘違いしてるんじゃないかな、まったく」

ダニアンの文句に男は豪快に笑う。

「思つてねえつて。宿なら金が要るだろ?」

「な、何だつてえ」

うーんと薄い頭を抱える魔道師に少し悪いと思いながらもアリストローザは厨房に何かないかと探しに行つた。

結局、ここをアジトに提供することにダニアン自ら言い出したことになつてしまつ。

この廟にサイトスの様子を知らせてくれたステファンが揃うといよいよ動き出す。彼らの仲間を足しても微々たるものだらうがこのままこの国をコーラルの思い通りにさせるわけにはいかない。

クロードにこの国の行く末を見て欲しいと自分は頼まれているのだ。彼が帰つてくる頃にまた、元の魔道の国になつてたりしたら彼はがつかりするだろ?」

そこまで考えてアリストローザは自分の中のクロードの存在の大きさに苦笑いする。

まったく自分は勝手にクロードを美化し、神格化して崇めているのだろうか。実際の彼はあんなに子どもっぽい少年だったではないか。

「いえ、違うわ。わたしなんかよりずっと大人だった」

そう、口にしてクロードにまんまと騙されていたことまで思い出

してしまった。無邪気に装つていた二つ下の少年に自分たちの浅はかな企みを暴かれたのではなかつたか。

その時のクロードの纏つていた霸氣は正に王の物だったと今ならわかる。彼ならコーラルに干渉されることも無くこの国を正しく導いていけたはずだったのに。

それなのにはつさりと王の立場を兄に譲り、魔道師としての道を選んでこの国から出ていってしまったのだ。

「無責任すぎるわ、クロード。今度会つたら思いつきり文句を言つてやる」

アリストローザは拳を握つて宣言した。

4・一人目の男

廟にある食材といえば、野菜などしかない。

魔道師は戒律で動物性のものは鳥の卵や、牛の乳、それで作られる油類くらいしか食べられない。

その上、アリストローザは料理なんてしたことなど無い。 そういう事で結局ダニアンがさっきから厨房に籠っている。

「マッシュュポテトのパイと豆のスープくらいしか用意できませんよ」「それにしてもコーラルが宰相に返り咲いたとこに不景気な感じね」

マッシュュポテトをかき回しているダニアンの背後から器の中に指を突っ込みながらアリストローザが言うのにダニアンが怒ったように答える。

「サイトスにいる魔道師たちと他の廟にいる魔道師たちの縁は切れていますよ、今は州庫のほうからの補助金しか収入はないのですから」

「そうなの？」

「モンド州、ゴートの廟長だつたルーク様がいらした頃は、魔道師庁も何も統制がとれておりましたがね。今はゴート山脈の廟はうち捨てられているようですよ。竜道が使えなくては不便極まりますからね、あの場所は」

言いながらも手は滑らかに動いていく。

「かまどにパイ生地を入れますからそこをぞいてください。それよりこれからどうするんです？ どれほど人間が集まつたとしてもコーラル様に敵うわけはございませんよ」

「これを鍋に入れればいいの？ ダニアン」

危ない手つきで、鍋に戻し汁」と豆を入れようとするアリストローザからダニアンが奪うように鍋を取り上げる。

「ふやかした豆だけを入れてくださいよ。いや、もうあたしがやり

ますから本当に」

「それなら最初に言つてくれればそつするわよ。だけどねえ、廟が互いに連絡が無いのなら何とかなりそつじやない。それに、あなたたちだつて今の状況には納得していんじやないの。なら力を貸さなくちや」

アリストローザが勢い良くスープをかき混ぜたため、中身が冽ねてしまつ。ダニアンはため息をつきながらこぼれたスープを拭く。

ああ、このままあたしはまた、巻き込まれてしまうのかと。

やつと出来た料理を運び込んだ途端にくだんの男は物も言わずに食べ続けて、あつという間に鍋一杯に作ったスープも大皿に盛つたパイも平らげてしまつた。

ダニアンはこれは早く約束の男と合流させないと廟の存続に関わると冷や汗をかく。

「サイトスからのどこの仕掛けでくる思つ？」

満足そうにゲッップとともにウイリアムと呼ばれた男が緑色の皿を細めてアリストローザを見る。

それに応えて彼女は腕を組んでウイリアムを見返す。

「わたしはここ、ボルチモアだと思うのよね

「おまえもそう思つか」

ウイリアムが我が意を得たりとこつと笑つた。

「もう争はりとはじりですよ、魔道師は荒事とは無縁の者ですからね」

ダニアンの言葉にウイリアムが噛み付くように言つ。

「よく言つぜ。おまえら魔道師ときたら自分の手を汚さないくせに頭ん中物騒な」とばかり企んでやがるじやないか

「その魔道師を頼つて来て、面倒かけているのはどこの誰ですか。どつしてボルチモアでハーロート公様のお命がねらわれると思つんですか」

空いた皿を片付けながらダニアンが心配げに顔を向ける。

どの魔道師が腹黒くともこの男だけはそれとは無縁に見えるが。しかし、魔道師相手に戦うためには魔道師の内情を知っているものがどうしても必要なのだ。

それにこの情けない顔をこちらに向けている男は、元ボルチモア州の州宰代理だった男だ。

本来ならこんな小さな廟主で収まっているはずの魔道師ではない。どうしても仲間に引き入れなければ。

アリストローザはどうやってこの哀れな魔道師を丸め込もうかと思いつながらウイリアムの横に座る。

5・魔道師の心（前書き）

今回ばかりはとまることです。

「ボルチモアは前州候のおかげで悪名高いじゃない。」たごたの最中だったから係累の一掃には手を付けられなかつた。そのせいで前国王を悪く思う者たちが残つてゐる。と、いつ話をでつち上げ易いつてことだわ。ここでレジスタンスの残党あたりが前王弟である、ハーリー公様を逆恨みでもしてお命を狙つたことにすればみんな納得だわ」

「そ、そんな」

ダニアンはアリストローザが澄まして言ひ話に顔色を変えた。

しかしそこで、彼女の胸にあるペンダントに気付いて大慌てで思わず手に取ろうとしたが、アリストローザにその手を払われる。

「アリストローザ様、それは竜印のペンダントでは？」

「そうだけど、何？」

「なぜ、あなたが持つていらつしやるんです？　わたしが預いておりました物は主がご逝去された時に崩れてしまつたのですよ。残つている物があるなんて」

物欲とは無縁のはずの魔道師の瞳に、せつないくらいの光を見つけてしまつてアリストローザは思わず身を引いた。

「これはわたしがクロードから預かつた物だわ。そんなに大事な物なの？」

「勿論でござりますよ。ペンダントには主自らが呪を封印なさつておられたのですよ。我ら魔道師にとつてイーヴァルアイ様は神にも等しいお方だつたのです。あたしはそれなのに……」

絶望の表情を浮かべてダニアンはがつくりとつな垂れた。あの

モンド州の公子の一人が我らが主だつたとは。

ゴートの廟にいる魔道師やサイトスの魔道師庁の魔道師、それも上位の者にしか姿を見せないはずの主にあたしは会つていたのに。

「あたしはお助けすることもできなかつた」

みすみすこのボルチモア州城内で誘拐されることにならうとは。女性と見紛うほどの美しいお方だつた。お声をかけて頂いたのに。そしてあと一人は『鍵』と契約されたクロード様だつたとは。今でもダニアンの中では王とは『鍵』と契約を交わされた者、だつた。自分はそれと知らず、貴い一人の方に出会つておきながら、知らなかつたとはいえ、その一人を亡き者にしようと企む側についていたのだ。

その思いは結界が消えた今も絶えず体の中を焼いているのだ。後悔という名の業火が休むことなく今もこの身を焼いている。

「あたしは最低の魔道師ですよ」

つぶやくダニアンの肩をアリストローザが優しく叩く。

「大丈夫、わたしに協力すればあなたの後悔も消えるわ」

「え？」

「わたしがやるうとしていることはきっとクロードも望むこと、だからよ」

強引に話を持つていくアリストローザにはつきりと不信を滲ました表情をダニアンは見せる。

「わけが分かりませんが？」

「このペンドント、欲しいでしょ？」

「い、頂けるんですか」

再びペンドントに手を伸ばしたダニアンの手をそのままアリストローザががしりと掴む。

「クロードに聞かないとね。でも口添えはしてあげるわよ。一緒に来てくれたね」

「い、一緒ですって？」

ダニアンの青い顔を見てアリストローザはにこりと笑つた。

ああ、この娘に関わると口クな事にならなかつたんだつた。ダニアンは大きく息を吐いて顔を逸らせる。

「話はついたのか」

ウイリアムの問いかけにいいえと言つ声と言えと言つ声が重なつ

た。はるかに是と言つ声に勢いがあつてウイリアムは堪えきれず
に大声で笑つた。

「……仕方ありません、主の名前を出されちゃあ断るいわれがない
のですから」

ダニーアンはため息まじりに言つと修行中の魔道師たちを集めると
さらさると書簡に何かを書き付けた。

「おまえたち、悪いがこの書簡を持つて隣のリュール村の廟に行つ
ておくれ」

「廟主様、お一人になりますよ」

「それはいいんだ。だが、お前達を巻き込むことは出来ない。この
書簡にはお前達をしばらく預かってもらえるように書いておいたか
らね。少しの辛抱だ、事が済んだらすぐに迎えに行くよ」

歳若い魔道師たちを送り出してダニーアンは胸元から呪符を取り出
すと廟の敷地の堀へと歩いていく。

堀の東西南北へその呪符を貼ると印を組んで呪を唱えた。呪符
は姿を消して何事も無かつたようにダニーアンは廟内へ戻つて来た。
「何をしたの？」

アリストローザの問いにダニーアンは素つ気無く答える。

「軽い結界を張りました。不信な者が来たらあたしに知らせるよう
にしています。あなたが来る前に講じておれば良かつたですがね。
もう一人のお仲間がいらしたら早速計画を立てられるようにサイト
スの知り合いに文を飛ばします」

引き出しから丁寧に折りたたんだ羊皮紙を広げると印を組んで古
代レーン文字の呪を唱える。

『アンズス、アンスル、オス』

ぶつぶつ呴きながら印を組んで指で羊皮紙の上をなぞつていくと
尖つた物で引っかいたような文字が浮かんだ。

それを畳むとダニーアンは印を組んでさつきとは違つ文字を空に描
いた。羊皮紙は途端に姿を変えて大型の猛禽類の型をとると、机
の上から力強くはばたいて空へ飛び出していった。

「こりやあたまげた」

ウイリアムが感嘆の声を上げるのに、ダーニアンは構つことも無く机の引き出しをばたりと閉める。

「何を呆けた顔をしてるんですか。あたしだって魔道師のはしぐれなんですからね、術くらい使えます」

人の良い男に見えるこの魔道師もやはり裏がある 魔道師の一見おとなしそうな外見に騙されると痛い目にあうのだ。

高位の魔道師になればなるほど内面は外からは窺いしれない。州宰代理だったこの男も間違いなく魔道師、なのだ。

アリストローザはしかし、ダーニアンが仲間になつてくれたことに大きく安堵のため息をつく。

レイモンドール国の魔道師の祖であるイーヴァルアイが三年前に死んだ事により、国を覆つっていた結界は消えた。

そして彼の僕である竜印を授けられていた上位の魔道師たち一百人あまりが一瞬で消えたのだ。

この国を動かしていた上位の魔道師たちが居なくなつた事でこの国は今、混乱の極みにある。その上位の魔道師たちに仕えていたのがダーニアンら次位の魔道師だった。竜印が無い為、主と同じように戦いを繰り広げたが、主の命を失つた魔道師たちは、主と一緒に長い寿命となつていていたわけでは無いがそれなりの術を使う上級の魔道師である。

「さつきのは便利だな。おれにも貸してくれないか」

「おいそれと貸すものではありませんし、あなたの汚い手で触つてほしくもありません。さつやと湯でも使ってきれいにしないと牛に変えますよ」

ダーニアンの言葉に慌ててウイリアムは浴室に姿を消す。

「ダーニアン、あなたそんな事ができるの？」

「出来るわけないでしょ」

アリストローザに不機嫌そうに応える魔道師はそのまま立ち上がり歩いて歩いていく。

「どこに行くの？」

「晩はとうもろこしひのパンにかぼちゃのシチュー」こしますんで納屋にとうもろこしひの粉を取りにまいます」

「パンね、わたしも手伝つわ」

「いいえ、結構です」

アリストローザの申し出をばほりと断つてダニアンはそそくせと屋を出て行く。

もう、自分のペースを乱されるなんて我慢がならない。 まつたくこれだから、身分の高い者と付き合つのは嫌なのだ。

何のかんのと言つて、最後は自分の思うとおりに人が動くと思い込んでいるのだから。

酷い目にあつたと言つている本音は今いる、小さな廟主として落ち着いてほつとしていたのだ。

ボルチモア州候や、気の強い州宰に仕えていたときは、本当に神経をすり減らす毎日だつたのだから。

早く事が収まつてあたしを放つておいて欲しいもんだ。

ダニアンは今日何度もひの粉を取りにまつて、とうもろこしひの入つてこる麻袋の中から器にすくおつとした手を止める。

「これ」と運んだほうがいいかもしない。どれだけ食べるの? やら……」

ぶつぶつ言いながら麻袋を引きずつてこるダニアンは、すっかり自分で気付かぬうちに頗る婦気分になつていた。

6・一人目の男

もう一人の男、ステファンがサイトスからやつて来たのはそれからたつぶり十日経った夜更け。

インクで塗りつぶしたような何も見えないほどの闇の中に響く、金属をカンカンと叩くような音が聞こえて。

「誰か来たようですよ、結界を破つた者がこちらへ向かっています」ダニアンの声に緊張の面持ちで戸の両側にアリスローザとウイリアムが剣を構えながら潜む。

手燭を持ったダニアンが戸の向こう側に向けて声をかける。

「誰かいるんですか」

「モンドの蝶は、蜘蛛に捕わる。だつたよな」

その声を聞いてウイリアムが相好を崩して戸を勢い良く開けた。

「ここでよかつたんだよな、ウイリアム」

戸の外に立っていたのは一見魔道師かと思つほど細面の神経質そ

うな少年と言つていいくらいの童顔の男。

その男の首にがしりと太い腕を回して引っ張り込んだウイリアムが反対の手でばんばんとその男の背中を叩く。

「ステファン、相変わらずがりがりだなあ。おまえ飯食つてんのか」「あんたも相変わらず、おっさん臭い上に言つ事は食べ物のことばかり、だな」

笑いあつたステファンの目がウイリアムの後ろにいたアリスローザへと移る。

笑い顔が固まり暫く無言のままだが、思いきつたようにアリスローザに声をかける。

「久しぶり あんたに会つのは不本意だつたけどぼくも……加わることにした」

「ありがとう、ステファン」

ぼく、と言つた男はやはり歳もアリスローザと同じくらいか、わ

ずかに上なのか。大人の分別を見せるウイリアムと違つてまだこだわりを持っているらしい。

が、しかしそれを押さえて挨拶するステファンにアリストローザはそれでもありがたいと思つた。

「おまえも疲れたろう、飯にするか」

回した手をそのままにウイリアムが顔を魔道師に向ける。

「まさか、寝るよ」

断るステファンの声に魔道師もすかさず応じる。

「あたりまえですよ、いい加減にしてください。何時だと思つているんですか」

ダニアンの不平めいた言葉にもウイリアムは気にする風も無い。

「そうか？ おれは何か小腹が減つたんだけどな。ステファンにかこつけて飯が食えると思ったが仕方がない。朝まで待つとするか

「おっさん、いいからとつとと寝る」

ステファンの遠慮の無い言葉にダニアンは大きくうなづいた。まつたくいい加減にして欲しい。

そして　ステファンと叫う男。　これはまた、やっかいなことが増えた。

魔道師は顔を曇らせてつぶやく。

「あたしは呪われているみたいだ」

朝の日差しが窓から差し込むのをアリストローザは寝台に腰掛けながら眺めていた。

朝の光は何と美しいのだろう。

それは闇を越えて、生まれたばかりの光だからだろうか。

あれから日が冴えて一睡もできなかつた。

ステファンの態度に少なからずショックを受けていいるのを認めないわけにはいかない。三年前の出来事の責任はわたしにある。

自分も父親に踊らされていたなどと逃げることは出来ない。

上に立つと決めた瞬間に大きな責任をも背負うのは定めだつたのに

自分は気付いていなかつた。

自分のしている事の後ろにある抱えなければならない諸々の事などわかつていなかつた。しかし、わかつていたならあまりの大きさに自分は潰されて動けなかつたろう。

今は、こうしてステファンの言葉、態度、そのわずかに咎める気配一つでこんなにも動搖している自分。

そこへ戸を無遠慮にどんどんと叩く音がして、驚いて開けるとそこにはいるのは大柄な男。

「あ、ウイリアムお早う。すぐ降りるわ」

「なあ、氣にするな。と言つたつて氣にするんだろうが。おれたち関わつた者は皆一様に被害者でもあると同時に加害者でもある。ただな、今度は失敗なんてごめんだ。物事を見誤るのもな。前を向いて行こうぜ、アリストローザ」

首の後ろを搔きながら一気にしゃべると返事も待たず、ウイリアムはすたすたと階段を降りて行く。

「ウイリアム、ありがとう」

降りて行く男に後ろから声をかけると男は振り向かなかつたが。

「おれつて良い事言つだろ？ 惣れたか」「へへつと笑う声が帰つてきた。

食堂に降りるとステファンがダニアンを手伝つて朝食の用意を整えていた。

「お早う、ステファン」

アリスローザの声にぎこちなく一拍おいて、ステファンは皿をテーブルに置きながら顔を向けた。

「お早う、すぐに朝飯の用意ができるよ」

「わたしも手伝うわ」

「いいですよ、止めてください」

ダニアンがすかさず間に入つてばさりと断る。

「手伝うのはステファンだけでいいですよ。あなたがやると手間が余計にかかります。さつさと座つてください」

朝食を済ますと、ウイリアムが食器を片つひと立ち上がる魔道師を制してステファンを見る。

「サイトスの様子を教えてくれ」

「そうだな」

ステファンは椅子に深く座りなおしてウイリアムの方へ向く。

「祭祀庁はまた魔道師庁と名前を変えたよ

「で？ どういう事なの」

名前が戻つたことがどういう事なのかアリスローザはわからず、ステファンに問いかける。

「前にレイモンドールの政務を担つていた頃の名前に戻したつて事はその意思があるって事だと思つ」

「前に戻るですって？」

あまりの事に声が裏返つてしまつがそんな事を気にする暇も無い。あれ程大変な思いをして政治から魔道師を排除することにしたといつのに。

王の初心表明、初勅の内容を王自らがいつも早々と破るつもりな

のか。

「それでハーロート公はもうサイトスを出たのか」

「ああ、ぼくがサイトスから出た五日後に出るはずだつたからあと、十日ほどでこちらにさしかかると思つ。仲間の何人かを護衛の兵士に紛れ込ませているが」

「どうか おれはちょっとこれから出でぐるよ」

ウイリアムは言つが早いか立ち上がつた。

「どこへ？」

「おれもつては持つてゐるんだ。州境から街道沿いに見張らせる手配をしてくる」

そこへ大型の鳥の羽ばたきが聞こえる。皆の注目が窓に集まる中、ダニアンが窓を開けるとふわりと彼の腕に飛び込む。

その姿は瞬時に一枚の羊皮紙に戻つた。その羊皮紙を丁寧に広げて目を通していたダニアンが顔を上げる。

「ハーロート様の馬車は三台、真ん中の馬車にハーロート様が乗られておられるようですね。荷馬車が十台。随従している兵士が三十名ほどです。見た限りでは魔道師はいなにようです。なにぶんお急ぎの事で人数を絞つてゐるようですね。宿泊の予定地と宿の名前が書いてありますよ」

「ダニアン、おまえの知り合いつて誰だ？」

詳しい内容に驚いてウイリアムが尋ねる。

「そんな事言うわけないでしょ。魔道師の口は堅いですからね」人気が良いのか、悪いのか。仲間になつたからといってこの男はすべてを仲間と分かち合おうとはさらさら思つてないようだつた。
「じゃあ、ぼくはアリストローザとダニアンの二人でモンド州に行つて来るよ」

「モンド州に？ わたしが……」

自分の名前が出てきたのに驚いてアリストローザがステファンを見る。

「ダリウス様に会つて州兵を差し向けていただこうと思つてさ。事

の真相がわかつたら手を貸してくださるだろ？。そのためには顔を知っているアリストローザがいたほうが話しが早い。それに上手くいつたらモンド州を拠点にできるかもしれないだろ？」

モンド州が味方になつたらそれは大変な事だ。三年前にぼろぼろになつてしまつた州が多い中でそれまで州府に魔道師を置いていなかつたモンド州はほとんど影響を受けなかつた。

今ではレイモンドール国の中で一番栄えているといつていい。

首都サイトスを凌ぐとさえ言われる州になつてているのだ。

隣の州の誼でアリストローザも以前は何度となくモンド州を訪れていた。それが少しでも役に立つなら勿論行かなくては。

「それにして大胆なことを考へるわね」

アリストローザの言葉にステファンはちらりと冷たい視線を走らせた。

「ぼくはやると決めたら中途半端なことはしたくない。できるか、できないかわからなけど精一杯やる、なんて気持ちで関わるんだつたら止めて欲しい」

「ステファン！」

ウイリアムの大声にステファンは黙つて横を向く。

「やるわ。いえ、やらせてステファン。あなたの期待に応えてみせる」

「ステファン」

ウイリアムに促されてステファンは顔を背けたままアリストローザに答える。

「言い過ぎた。あんたがいないとモンド州に行つてもぼくだけじゃ話なんか聞いてもらえないだろ？。その点ではあんたはやつぱり必要だ」

「おいつ！」

ウイリアムはため息をついて横を向いたままの若者を見たが、これでも相当譲歩したつもりなのだろう。ぶすっとしている若い仲間をやれやれと眺めた。

「で、何であたしまで行かなきやならないんですか」

「あんたはさつきの鳥を飛ばしてハーロート様にダリウス様あての手紙を書いてもらつてくれ。メッセージを届けるくらいの術はできるんだろう？ それとモンド州には魔道の本拠地があつたんだ。あんたが行つたら何かわかることがあるかもしない」

「そりやあ、できますけどね。本当に人使いの荒い」

「じゃあ、それぞれ十日後までにはここに戻つてくる事。行つてくる」

ウイリアムはそう言つと大きく戸を開け放つて出て行つた。

「わたしたちも出発しなきやね」

「その前にこれを片付けなくては」

食器を手にダニアンは立ち上がつた。

それから出発までたつぱり一刻半もかかってしまった。とい

うのも旅に出るのだからとダニアンが廟の掃除をしだしたせいだ。

そのあと、飼つている鶏の世話を近所の農家に頼みに行つて、そこから何とか馬を二頭貸してもらう手筈を整える。

それから弁当を作つて……といふことでダニアンの支度の遅さに辟易したステファンが引きずるように廟を出たのであつた。

「馬に一人で乗れる？」

「自慢じゃありませんが馬には触つたことすらありません」

一人がかりで馬の上に中年の魔道師を乗せると、アリストローザがその後ろにひらりと跨つた。もう一頭の馬にステファンが乗つて先に進める。

「急いで行こう。走らせるぞ」

「ええ？ 落ちちゃいますよ」

「大丈夫、しつかり捕まえてあげるから」

ダニアンの悲鳴と共に一頭の馬は土煙をあげて街道を駆けて行つ

た。

それから一日後。

昼食時にハーネー・コート公は休憩用に入つた宿の部屋で寢いでいた。そこへノックの音がして声がかかる。

「宿の者があ茶を差し上げたいと参つておりますが」外に控えている兵士の声にハーネー・コートが応えた。

「よい、入れ」

入つて来たのは若い女。慣れた手付きでお茶を入れて軽食を皿にいくつか持つてテーブルに並べながらハーネー・コートの顔をまっすぐに見つめる。

「ハーネー・コート様、お話があります」

「ところが、うら若い女の口から出てきた声は低い男の声だった。おまえ 何なのだ?」

「お静かに。モンド州におられる、」¹子息はは、健勝であらせられますよ

女の言葉にハーネー・コートは声を落とした。

「詳しく話を聞こうか」

その後、ダニアンのメッセージを伝えた女は口を閉じる。ハーネー・コートの書いた手紙を受け取ると女はお辞儀をして下がつて行く。そのまま兵士たちの間を通り抜けて階段の脇に降りると、女の姿は溶けたようにドレスがくたりと山になる。

その服の中から大型の鳥が顔を出す。鳥は器用に窓を足で開けると飛び立つていった。

アリストローザら一行は三日かかる行程を一日ほどで駆け抜けて、モンド州の州都エリアルに入った。州境の関所もダニアンのおかげで難なく通り過ぎることができたのだ。

この中年の魔道師を仲間に引き入れることが出来たのは本当に幸運といつていいだろう。州城内に入るのには何かと面倒らしいと、するならば。

「ダニアン、お願ひするわ」

「これだけこき使つてゐるんですからペンドントの件はよろしくお願ひしますよ」

魔道師は印を次々組んでレーン文字を唱える。

州城の門番が田の前にいる魔道師に型どおりの質問をしていく。

「何の用でここに来た？」

「州公代理のダリウス様にお会いしに」

「何者だ？」

「さて、何でしちゃうか」

「入れ」

聞いている事に適当に応えていたのも関わりず、門番は二人をそのまま通す。

ダニアンが澄まして入つて行くのでアリストローザとステファンも慌てて遅れまいと小走りして後を追つた。

「やっぱり魔道師に権力なんて持たしたら大事になるわね。おそらくしいわ」

「利用するだけ、利用してそんな事を言つあなたの方のほうがよっぽど怖いですよ」

アリストローザの言葉に鼻息荒く、ダニアンが返したところでは、三人は主城を見上げた。そして彼女は顔をこんもりとした小さな森に目を向ける。

「この森の奥にイーヴァルアイの住んでいた城があるのよね」

「先に行つてみよう」

「さ、さようでござりますね」

期待に目を輝かせるダニアンがわれ先にと足を進める。 思いのほか歩いた先に灰色の武骨な外觀を見せる館が姿を現した。ダニアンが扉に手をかけると耳障りな音を辺りに響かせながら扉はあっさりと開く。

暗い室内に足を踏み入れると、放つておされた家が大概そうであるように埃と蜘蛛の巣が室内を覆つている。

「财沢な品ばかりだな。だが魔術に関する物なんかどこにもないけど。本当にここが魔道師の祖、イーヴァルアイの住まいだったのかい？」

「ゴリウスというのがイーヴァルアイだつたんだからそのはずだわ」ステファンの問いにアリストローザが答えた後、手分けして三人がてんでに屋敷内を捜し始めて半刻ほど経つた頃。

「ありましたよ、痕跡が」

何といふこともない壁に手をあててダニアンが一人を呼ぶ。

「どこに？」

「ここですよ。ここに呪がかけられております。しかしあたしにはここを開けることなど出来はしません」

「出来ないの？」

「何でもかんでも出来ると思つてらつしやるんなら大間違いですよ、

アリストローザ様」

憮然とするダニアンの横から同じように壁に手を触れようと身を乗り出したアリストローザの首からかけたペンダントが淡い光を出すと壁にうつすらと模様が浮かび上がった。

「こ、これは」

アリストローザが模様だと思った物にダニアンは手を触れながら口に出していく。 それは範字とよばれている大陸の東で使われている文字だ。

特に古代バラナシで使われていたという古代文字はその字、一つに力がある。レイモンドールの上級魔道師はそれを学ぶことは必須であるのだ。

それを読みながらその示唆する印を慎重に組んでいく。最後の印が組まれた後、壁はいきなり抜けたように大きな穴が開いた。

「あたしが降りて見てまいります」

ダニアンの言葉にアリストローザが続ける。

「わたしも行くわ。ペンドントの力で開いたようなものでしちゃう。何かあつたらこれがいるわ」

「じゃあ、ペンドントをあたしに貸してくださいでしょ。自分の身もどうなるかわからないのに」一緒になんて嫌ですよ」

手を出した魔道師の手をアリストローザはぱんっと払う。

「だめよ、ペンドントが欲しいならわたしを連れて行きなさい」

「わかりましたよ、むやみにそこら辺触らないでくださいよ。まつたく」

壁際にあつた燭台に呪で火を点けるとダニアンは足を慎重に進める。

燭台の明かりが照らす足元以外はまるで見えず、アリストローザは彼の肩にしがみつくように階段を降りて行った。

下についてそこにある燭台全部に明かりを点けると、その部屋の様子にダニアンは声を上げて書棚に走った。

「おお、ここにある書物はどれも大変に貴重な物ばかりです。これは、物質移転の……これは多重結界ですよ。ここはまつたくお宝の山です」

興奮して次から次へ本を取り出しては喜びの声を上げるダニアンの横で、アリストローザは部屋の雰囲気にのまれて暫く立ち尽くす。この地下室は上と違つて塵一つ落ちてはいない。天井にはびっしりと円が何重にも描いてあり、その円の中には彼女にはわからない言葉や記号がびっしりと描かれている。

四方の内、三方までが天井まで届く書棚になつてゐる。その中

には丸められた巻物や立派な装丁の書物がぎっしりと詰められていた。

書棚の前には長椅子が置かれていてその上にある、薄い絹のシャツ。

「これは クロードのかしら」

広げて見て大きさを見るとちょうど覚えているクロードの体に合うくらいだった。アリストローザはそれを持ったまま離せなくなってしまう。

ここでクロードは魔術の勉強をしていたのか。

急にこの見覚えの無い部屋に愛着を覚えてアリストローザはぐるりと部屋を見回した。

書棚の無い一方の壁には広い机がぴったりと付けるように配置され、その上には外国语で書かれた本が開かれたまま置いてあった。そこに挟んだようにある一枚の便箋に流麗な筆跡で走り書きがあるのを見つけてアリストローザはその本を引き寄せる。

『もし、おまえを置いてわたしが居なくなることがあつても悲しないでほしい。クロード、わたしの弟。いつまでもおまえと共にいたかった。

死ぬことを望むのと同じくらい、わたしはおまえと一緒にいたかったんだ。送ったペンダントはおまえの支えになるように大事に呪を込めたからね。 いつまでも君を思う。

愛をこめて、コリウス・ヴァン・ハーロート』

読んでアリストローザは胸が詰まって立ち竦む。あのいつも冷静静な顔を見せていたコリウスと名乗っていたイーヴアルアイ。

その彼のこんなにも感情の吐露された文を見て、自分の過去の言動に青くなる。

クロードに対して無遠慮にわたしはイーヴアルアイの死について嬉々としてしゃべっていたのではなかつたか。

その時のクロードの心中を察するとアリスローザは、心臓が硬く握られたかのように感じられた。

一人の人間としてのイーヴィアルアイの事なんてまったく頭に無かつた。忌むべき対象としてしか見ていなかつた。

だが、クロードにとっては大事な兄だったはず。こんなにも愛されていたなんて。そしておそらくクロードも愛していたのだ。

三年前の自分は全てにおいて何もわからてはいなかつた。レーヴィンドール国を支配していた魔道師の祖である、イーヴアルアイ。だが、彼はクロードの前では偽りの身分であるモンド州州公の次

だからこそユリウスとしてクロードの兄としての手紙を書いていた
しかし、それも渡せず死んでしまった。

アリストーザに上から声がかかる。

「来い」

ステーブンの声は立ち止かずアリストローサは懸念を残しながらも本を三冊ほど抱えた魔道師とともに階段を上った。
やうやくで上に出るとこいつでダーマンの足がピタリと止ま
る。

「どうしたの？ ダークアンドトライアングル早く上がつてよ」「足が動かないんですよ」

脂汗を流すダーランは、しばらく自分の足と格闘していたが、はつと気付いたように自分の抱えている本を見た。

「本に呪がかかるっているんですよ」

印を組んで『解』と言いながら本に軽く触るとダニアンは足を恐る恐る踏み出した。 今度は何の抵抗も無く足が前に進んで、彼は大きく息を吐いた。

「まったく、何の音もしないし、生きたじいちゃんがしなかつた。その

ままで二人仲良く暮らすなんて言つんじゃないんだろうな」

ステファンは頭を出した二人の顔を見ると嫌味たっぷりに言った。

「冗談じゃございませんよ」

「それはこっちの台詞だわ」

二人が相次いで否定の言葉を口にするがステファンはあっさりとそれを受け流すとダニアンの持つ本に目をやる。

「それは？ 役に立つんだろうな」

「そのときになつてみないとわかりませんがね」

そう言いながら穴に向かつて先程唱えた範字の呪文を逆に唱えて印を組む。穴は瞬時に塞がつて壁に戻る。

それを満足そうに見てからダニアンは持ってきた本の一冊を開いた。次いで、暖炉から埃まみれの炭状になつた薪を拾つて来て床に円を描いて行く。

本を見ながらその中に丁寧にレーン文字を書き入れる。半時もかかるつてそれをやりとげると腰をとんとんと叩きながらこちらを向いた。

「二人ともこの中におりでください。でも線を踏まないでくださいよ。それとその二冊の本も持つて来てください、ステファン」物聞いたげな一人が魔方陣の中に入つたのを確認して魔道師は印を組み始める。

「目を閉じていた方がよろしいですよ」

慌てて二人が目を閉じると、同時にダニアンの呪を唱える声も止む。

その途端、思わず体が倒れると思つほど外に引っ張られるような感覚にアリストローザは必死で耐えていた。もの凄く長く感じたがやつとダニアンの声がする。

「終わりましたよ」

目を開けた三人の前に、驚きの表情を浮かべた若い男が口を開けたまま、黒檀で出来た立派な机を前に座つていた。

長い真っ直ぐな黒髪を後ろに流した実直そうな、それでいて威厳を漂わせている美丈夫。

「お久しぶりです、ダリウス様」

アリストローザの挨拶に男は目を細めて記憶を辿る。そしてその目は大きく見開かれた。

「ボルチモア州のアリストローザ姫ですか」

男の成りをしているために思いだすのが遅れたようだ。だが、何でここに？ ダリウスは不思議に思いながらもアリストローザに手を差し出す。

「ダリウス様、警備の者を呼びましょ」

側付いていた官吏がやつと驚きから自分を取り戻して扉に向かう。それをダリウスが落ち着いた声で止めた。

「エヴァンス、静かに。この者はわたしの知り合いだ。最も少し席を外してくれ」

「何を仰います。こんなわけのわからない者どもとダリウス様を置いて出て行くなんてとても出来かねます」

「いいから、大丈夫だ。何かあつたらすぐ呼ぶから」

重ねてダリウスに言われたのとさつと見回した限り、彼のほうが剣も腕も強そうだと思つた官吏がやつと立ち上がる。

「廊下に兵士を配しますからね。その者ども、ダリウス様に指一本でも触れることは許さんからな」

官吏は見下すように三人に言った後、ダリウスに礼をとつて部屋を出て行つた。

「気を悪くしないでくれ。このモンド州の者は魔道師をあまり見たことがないのだ。ところでアリストローザ姫、君は他出できる立場ではなかつたはずだが」

ダリウスは言いながら部屋の椅子を指差して三人に座るように勧めると自分も椅子に座りなおす。

この三年、父親に代わりモンド州、州公代理として仕切つてきた

自信が彼を二十二歳という歳よりも大きく大人に見せていた。

「はい、仰る通りです。しかし、国の大事が起ころうとしているのです。ダリウス様」

「国の大事？」

ダリウスは疑わしそうに目の前にいる女性を見つめる。

10・ダリウスへの話

カナリヤのような黄みの強いブロンドの髪を無造作に後ろに括つて、粗末な男の成りをしている娘。化粧氣の無い顔は少年のよう見えるが。

しかし、彼女は前国王の時代、謀反を起こしたボルチモア州の州候の娘だ。

今も何を企んでのことか、慎重に対処する必要がある。ダリウスはそう思いながら彼女の連れに視線を移す。

一人はまだ未成年ふうの瘦せた少年だ。赤味の強い茶色の髪。前髪は長いが全体は無造作に短く切つてある。

こちらを真っ直ぐ見る青い瞳にある、皮肉っぽい光。これまたアリストローザと似たような格好。どこかで見たような気がするが。

そして中年の魔道師。

ここ、モンド州には魔道師が驚くほど少ない。この地がかつて魔道教の本山を抱えていたと言つ経緯を考えると不思議なほどだ。以前この国が魔道師に支配されていた頃、他州で権威をふるつていた州宰たちはすべて魔道師だった。

しかし、ダリウスの父親が統治していたこのモンド州は、例外的に州府に魔道師を置いていなかつたのだ。

そして三年前の魔道師の祖、イーヴアルアイの死後、モンド州のゴート山脈にあつた数々の廟から魔道師が消えてしまつてから、この州は魔道師の気配が薄い。

そのせいか目の前にいるしょぼくれた感じの中年の男に何の感慨も抱けず、ダリウスはもう一度アリストローザに目を戻す。

「話だけは聞くとするが聞くだけに終わるかもしれないぞ」頬杖をついてダリウスは先を促す。

「あなたのお父上のハーコート様が宰相の座を魔道師のコーラルに譲られた事はもうお聞き及びですよね」

額ぐダリウスを認めてアリストローザは話を続ける。

「魔道師の「一ラルは魔道師が権力を持つことを復活させて国をのつとるつもりです」

「ばかな、何を言つてゐる。国王陛下はそんなことをお許しなるはずがない」

「いいえ」

ダリウスの言葉は即座にアリストローザによつて遮られる。

「祭祀庁として権を手放したはずが、この度魔道師庁と名前を変えたことを知つておられますか。それを国王陛下はお許しになつておられるんです。いえ、その前に魔道師を宰相とされるのに是と答えておられる時点で国王陛下は「一ラルの言つがままです」

「……それで？」

「」のモンド州へハーネート様が向かつておられるのを存知ですか、ダリウス様」

「父上が？」

思つていなかつた事にダリウスは大きく身を乗り出す。

「サイトスにダリウス様急病のため御身が重篤な状態であるとの知らせが入つたからです」

「まさか、誰がそのような」

「ハーネート様を快く思つていらない者の仕業です」

以前なら国内どこにいようとも竜道によつてサイトスはおろか、どこの地の情報もわずかな時間で届いていたはずだ。が、今は伏せられている事など間諜を使って調べる以外知りようがない。

「と、ということは父上の命が危ないと言いたいのだな」

「はい」

思わず、全面的に信じそくなつてダリウスはあやうく踏みとどまる。

「その話、裏づけがあるのだろうな。あなたの話だけでわたしが動くなどという事は出来ない」

やはり、そうなるかとアリストローザは唇を噛んだ。自分の信用

の無さと州事を預かる者としての当然の反応なのだろう。

突然、黙つて座っていた魔道師が立ち上ると窓辺に寄つて窓を大きく開ける。

「ダニアン、一体何?」

驚く皆の視線を集めながら魔道師は大きく手を広げた。そこへ飛び込んできたのは大型の鳥。

「ダリウス様、これを『ご覧になつてから、あたしどもの話をお考えください』

魔道師は鳥の足から一通の書簡を抜き取つてダリウスの机に置くと印を組んだ。

『解』声とともに鳥は一枚の羊皮紙に戻つてダニアンの手の上にふわりと落ちる。

あつという間の手妻のような出来事にダリウスは用心深く机に置かれた書簡を手に取つた。

「この筆跡は父上の」

書簡に書かれていた力強い角ばつた特徴のある字は確かにダリウスの父親の物。

何度も確かめるように彼はその書簡に目を通してから顔を上げてアリストローザと目をあわせた。

「これは確かに父上の書いた物だ。わたしは今から州兵を率いて父上をお迎えに行く」

「それはダメですよ。まるつきりダメです」

ダリウスの思い詰めた声に今まで黙つていた若い男が否定の言葉で応じる。

「なぜだ、父上のお命が狙われているのだぞ」

「ダリウス様、考えてもみてください。モンド州が兵を立てて州境を越えて行くのを他州候が黙つて見てていると思いますか。それもサイツスの方向へ向かってですよ。ぱつと見て父親を迎えて行く孝行息子になんか見えるわけがない。すわ、三年前の悪夢の再来かと大

騒ぎでしうね

「ステファン！」

ステファンのあまりの遠慮の無い言い方にアリストローザは叱責の声を上げる。しかしステファンは彼女のことなどいないかのように話を続けた。

「表立つて兵を挙げるのは自殺行為だ。それに今はコーラルには自分の愚策が上手くいったと思い込ませるのが……良策というもんでしょう？」

「と、いうことは？」

「ハーロート公には闇討ちに遭つて憤死してもらいます」

「ぶ、無礼者！ そこに直れ！ 許さぬ」

怒りで我を失つたダリウスが立ち上がり机を回つてステファンの胸倉を掴んで引きあげる。

「あ、言い忘れてました。ふり、ですよ。死んだ振り

「死んだ 振り？」

「そうです。ボルチモアで密かに公をお救いした後、モンド州に隠れてもらいます。そのために信のおける兵士を一旦除隊させてからぼくらにお貸し願いたい」

ステファンが胸倉を掴んだままのダリウスに向かつてにこりと笑んだ。

その様子を息を飲んでアリストローザは見つめていた。

二年前のレジスタンス活動のときも策を練るのはステファンだった。腕っぷし、というより頭の良さでリーダー格の一人として動いていた。

みんなの信頼厚いヘンリーの弟として活動に加わっていたが、実際彼があの時アリストローザたちと心を一つにしていたかどうかは今でも疑問だった。

彼は兄を助けたい一心で動いていたにすぎない。

今は どうなのか？

「おまえは父上のお命を確約できるのだな」「出来ます。但し、ぼくが揃えるように言ひ物は例外なくすべて揃えてください」

「わかった」

そこでダリウスは自分が若い男の胸倉を掴んで持ち上げていたまま喋っていた事に気付き手を離す。

「出来ると言つた言葉、忘れるでないぞ」

「ぼくはどちらか分からないことを口にしませんよ、ダリウス様」ステファンは豪胆に言い放つと横の魔道師に向く。「こっちには良い手駒があるんですよ。ちょっと見田は相当悪いんですけど」

「そ、それはあたしのことですか」

「他に誰がいるんだよ、はげ魔道師」

「だ、誰がはつ、は……」

「言えてないぜ、禿げだろ、禿げ」

「いい加減にしなさい。わたしの前でふざけるのはやめるのだ」

凛としたダリウスの声に一人も口を閉じるが、声を上げたダリウスが今度は怪訝な顔をして一人を見る。

「どうしたんですか、ダリウス様」

「いや、こんな事が前にもあつたような気がしただけだ」

「州城内にもお知り合いの禿げがいたんですか」

「いや、そうじやない。はげ、じゃなくて……」

考えに浸るダリウスを見ながら魔道師は一番働かされている自分に向けられた酷い言葉に大きくため息をついた。

早く事を収めてこんな薄情者たちとさっさと別れるのだ。そこへ外から従者の声がする。

「ダリウス様」

「今は誰もここに入れるな。何だ?」

困ったような声の後に大きく扉が開く。

「あなた、官吏を全員下がらせて何の」相談かしら」現れたのは、はつとするほど美しい女性だった。明るい金髪を高々と結い上げて宝石を散りばめたその姿は豪華だがそれ以上に見る者を威圧している。

サファイア色の目が厳しくアリストローザたちを威圧していた。

「何なんですか、このみずぼらしい者どもは?」

一瞥しただけで何の価値もないと踏んだのか、女性は吐き捨てるよう言うとダリウスの方へ顔を向けた。

「マーガレット、悪いが今は大事な話をしているのだ。席を外してくれ」

「あら、わたくしょりもこんな食まがいの者のほうが大事なんですか?」

「マーガレット」

苦い顔を見せるダリウスを見てアリストローザが席を立つ。

「わたしもは少し下がらせていただきます。お部屋を貸していただいても?」

「うん、ああ、すぐに部屋を用意させる」

出て行く三人を見送りながらマーガレットは苛々と胸元から取り出した香水の小瓶の中身をそこら辺に撒き散らした。

「臭くてたまらないわ。あなた、あんな卑しい者たちをお城に入れるなんて我慢できませんわ。すぐに追い出してくださいませね」

「おまえの目に触れるようにはしないよ。話がそれだけならわたしは失礼する」

ダリウスは早口で言うと何か言いかけた妻を残して部屋を出て行つた。

廊下を歩くダリウスはさつきのマーガレットの様子を思い出してますます顔を曇らせる。

貴族の結婚に愛なんていらないと思っていたが毎日あれでは気が

滅入つて仕方がない。

一年前に王の姉であるマー・ガレットと結婚したダリウスだったが、あまりの彼女の高飛車ぶりに怒りさえ感じてとても夫婦らしくなどできぬでいた。

（上から降される姫なんてそりゃあ大変……）

頭に浮かんだ言葉にはて？ とダリウスは考える。 誰が言っていたのだつて？ 思いだせないまま今は使われていない部屋に足を踏み入れる。

そこは彼が疲れたときに心を癒そうとこの所よく通つている場所だつた。 何の変哲もない部屋だがそこには一枚の絵が忘れられたようにかけてあつた。

若い女の絵だ。 亜麻色の髪を軽く結つて紫のドレスを纏い、 出窓に軽くもたれている姿。

ある日、 いつものようにマー・ガレットとの気詰まりな会話に疲れ何気なく入つたこの部屋で、 これを見た時からダリウスはこの絵の中の女性に心を奪われてしまった。

細い卵型の輪郭。 淡い水色の瞳。 小鼻のすつきりした高い鼻。 そして薄情そうな薄い唇。

一見冷たい感じを与える美貌だといつになぜか彼には好ましく親しく感じられた。

おかしいと、 絵の中の女に恋着するなんて、 自分は今の結婚をどれだけ疎ましく思つてゐるのかとそのせいにしてみるが。

知つてゐるような、 そうだ。 生身の彼女をわたしは知つている気がする。 絵の中の女の頬に触れてダリウスはそつとつぶやく。

「おまえは一体何者なんだ」

一方、従者に案内されて城内を行く三人の前に飛び出すよつて出てきた女性がぶつかる少し手前で危うく止まる。

「あら、ごめんなさい つて、貴方たち誰？」

あまりにも城内に似つかわしくない三人に目を丸くしてその女性は手前の官吏に尋ねる。よく見てみると、女性といつてもまだごく歳若いのだとわかる。大きな黒目がちの瞳に興味深々と書いてある。そして……。

「アリスローザ姫じゃなくつて？ そうだわ、何で男の格好をしていらっしゃるの？」

「あ、エスペラント様。お久しぶりですわ。でもここでわたしの名前を大声で仰るのは御止めください」

「どうして？」

「わたしがお尋ね者だから、です」

「お尋ね者つてどういう事かしら？ ダリウス兄様に会いにいらっしゃたの？」

「ええ、でも奥様が……奥様ですよね。いらっしゃったのでお邪魔かと思い退室したのですけど」

「お邪魔と言えばあの女こそ、最大のお邪魔なのよ」

声高らかにエスペラントは言い放つてからアリスローザに顔を寄せてひそひそと続ける。

「サイトスから来たと思つて偉そうつたらないのよ。夫であるダリウス兄様や、お母様、にまで上から物を言うみたいな態度なの。わたし、大つ嫌い。あの女がそこら中に撒き散らす香水」とこの城から捨ててやりたいわ。ここは田舎の匂いでたまらないんだそうよ、あのお姫様には」

最後の方は自分が声を落としていた事なんてすっかり忘れてエスペラントは声を張り上げていたのだが。

「では、あの方はクロードのお姉さまのマーガレット様なの？」
アリストローザの方へエスペラントが自分の口に人差し指をつきつけてシーザー、と言つて眉をひそめる。

「クロードの名を口にするなんて。王陛下の姉君でしょ、それを言うなら。彼は重罪人なのよ。それを友達みたいに口にするなんて」
エスペラントは慌てて厄除けのおまじないをして咎めるような顔を見せる。

「やっぱり覚えてないのね」

落胆したように自分を見るアリストローザにエスペラントは意味がわからず、目の前の男装の女性を見返す。

その様子を見たアリストローザは、クロードが自分を覚えている人が必要だと言つた事はこういう事だつたのだと実感する。
このモンド州の州城内から次男のユリウスことイーヴアルアイヤ三男クロードの存在は消えているのだ。

「いえ、なんでもないのよ。変な事を言つてすみません」

「いいえ、こちらこそ久しぶりにアリストローザ姫に会えて良かつたわ。もう少ししたら会おうと思つたつてどうにもならなくなるもの」
エスペラントの言葉に首を傾げたアリストローザへ悪戯っぽい目を向けて彼女は笑つた。

「わたし、結婚するのよ。まあ有り体にいえばあの女に追い出されるつてわけなんだけど」

そう、とアリストローザは幼さの残る少女を眺めた。十五歳か十六歳、そんな頃だったはず。

早すぎるわけではないが、かわいそうになつてエスペラントの手を両手で握つた。

「おめでとうと言つていいのかしら。どちらにお輿入れになるの？」
「ローデシア州よ。南国のザーリア州のすぐお隣。ねえ、アリストローザ様。わたしに同情していただかなくていいのよ。そりやあ、まだわたしは若いし相手の顔なんかわからないけど。ここを出て行けるのならそれでいいわ。暖かい所に行けるなんて楽しみだもの。

そう言い聞かせていいわたしは偉いでしょ」

「じろじろと笑うエスペラントを見て世間知らずだと思いながらもそれを羨ましいとアリストローザは思った。『こんな顔はもうわたしには出来ない。』

エスペラントと別れてやつと二人は案内された部屋に入つた。

「まったくいつまで続くかと思ったよ。女つてのは身分の如何に関わらず井戸端会議が好きときてる」

ぶつくさ言うステファンに控えめに魔道師の男もうなづく。

「だからあたしは女人が苦手なんですよ」

「だから男の人人が好き、なんて言つんじゃないでしょうね、ダンニア

ン」

「そういうところが嫌なんですよ」

揚げ足を取るアリストローザに嫌な顔全開で魔道師は応じた。

誰もいなかと思つていたのに案内されたその部屋の壁の前に、執務室で別れたはずのダリウスが立つていた。

しかし三人が騒いでいたのにも関わらず氣付く様子も無く、彼は壁に掛けられていた一枚の絵を眺めている。

「その絵はヨリウス様　あ、女性のお召し物だから違うのかしら」

つい口にした言葉にダリウスが反応して振り向く。

「知つているのか、この者の名前を」

あまりの熱い視線に驚いてアリストローザはしまつたと後悔する。

「わたしの知つている方にとってもよく似ておられますか違つと思うんです。申し訳ありません」

「なぜ、違うとわかるんだ？　教えてくれ、誰に似ているというのだ」

「それは……」

「イーヴァルアイ様！」

口を閉ざしたアリストローザの横を走り寄つて来た魔道師が嬉しそうに名前を言った。

「イーヴァルアイ様ですよね。しかし、何で主の絵がモンド州城に

? しかも女物をお召しになつておられるのは?」

アリストローザは夜着とはいえ、以前イーグアルアイの女装姿を見ているのでこれが本人に限りなく似ているとわかつている。

でもここでそれを言つてもどうなるのか。ダリウスに説明など出来ないこともわかつていた。

「それより先程の件だけど」

ステファンが話しを強引に変えるのを今は助かつたと思いながらアリストローザは息をつく。

「そうだな、州軍の内、諜報を得意とする組織があるがそれに任を与えではと思つ」「う

ダリウスも切迫している状況を思い出して事務的な顔に戻つた。「いきなり、州軍で表立つて何人も辞めてはおかしいし。それでいいですよ」

「しかし、三十人ほどしかいないぞ」

「密かに行動するから充分ですよ。第一、そこで交戦はしないんだから」

ステファンの言葉に尚も心配そうにダリウスはいらこらと右手に作った拳を左手に打ちつける。

「一体、どんな策だというのだ?」

「今言つちゃうんですか。ぼくとしてはもつと出し惜しみしたかったんですけど」

ステファンはにまりと笑うと横の魔道師の男の腕をつかんで引き寄せた。

「この魔道師先生にちょっと手妻を披露してもらおうと思つているんですよ」

「手妻?」

「本気になさつちゃなりませんよ、ダリウス様。あたしが使つのは呪術ですからね。手妻なんかと一緒にされたくなんかありません」
掴まれた腕をおおげさに振り回してぼづくとダニアンは尊大な態度を取る若者の手の届かない所まで下がつて嫌そうに首を振つた。

「おまえたち、仲が悪いのか？ まあ、そんな事より話を続けてくれ」

「そうですねと、顔をダーランに向けたままステファンは口を開く。

「ボルチモア州に入るのを確認したら公をすりかえて」

「すりかえて？」

「それで終わりです」

「お……終わり？」

妙に居心地の悪い沈黙が流れでその場にいる一人以外、声をつかの間失っていた。

「で、その後どうするつもりなのだ？」

いち早く気を取り直したダリウスにステファンはうつそりと笑う。

「はい、ぼくらもモンド州でやっかいになりたいと思つてます」

「それで？」

「正式にダリウス様が州公になる任命式を受けにいく際にサイトスへわたしどもと一緒に行つてもらいます」

一端口を閉じてステファンはダリウスを強く見つめる。

「それまでに内々に各州候に渡りをつけておいて。その後、サイトス城内に入つて任命式の時、コーラルの首を取りたいと思つてます」

「首を……取る」

ごくりと唾を飲み込む音がする。 青い顔をしているダーランという男。 それは、コーラルと同じ魔道師ゆえのことか。

ダリウスは自分が足を踏み入れようとしている事のあまりの深さに、暫く息を飲んで目の前の若い男を眺めた。

13・ダリウスの決意

父親を助けたいと思う気持ちの先に待つものはボルチモア前州公と同じ扱いを受ける自分だ。

謀反を企てた事による斬首。

いや、斬首を恐れているわけではない。その不名誉な罪名ではない。彼が恐れているのは、州公がいなくなつた為による州府が働くなくなるということ。

すなわち、州に住む者の生活に多大な混乱を引き起こすといふことに彼の心は痛むのだ。

「わたしには民の生活を守る義務がある」

「短慮はダメですよ、ダリウス様。今だけをいうならこのまま知らん顔を決め込むつていうのもあります。コーラルが実権を握つたらこの州だつて今の状態を保つてなんかいられないと思うけど」

「少し考えたい。一人してくれ」

ダリウスの言葉にステファンは頷くと、立ち上がりて他の二人を伴つて外で待つていた官吏の案内する部屋に入つた。

「ダリウス様はわたしたちの計画にのるかしら」

「のらざるを得ないとと思うけど。父親の命がかかっているんだからな」

アリストローザの問いにあっさりとステファンは答えるが自分でも少し心配しているのか、浮かない顔を見せる。

レイモンドール国は今、中央の権威より各州候のほうが力があるのだ。

結界をこの国に張つていた魔道師の祖イーグアルアイが死んで、國中に通つていた竜道というパイプを失つたサイトスは有力な州のやり方に異を唱えることも今は出来ない。

レイモンドールは、遙か昔の魔道師が支配していなかつた頃。

五百年前の小国の集まりに戻ったかのようだつた。

各州の州境の警備は強化され、人の往来にも厳しくなる。

であるからこそ、ダリウスにはここで父親の命と引き換えに、この争いから身を引いて傍観するという道もないでは無いのだ。

執政者として真面目であるほど彼は悩む事だらう。

「すごくお父さんつ子だつたらいいんだけどな」

「大見得切つたんですから、最後までちゃんとやつてくださいよ。でないと、あなたたちがただで飲み食いした分、きつちり払つてもらいますからね」

「ちえつ、そんなケチ臭い事言つてるから禿げるんだよ、おっさん」「なつ！」

「ちょっとあなた達、静かにしてよね」

二人の男たちはアリストローザの言葉にあつさりと黙り込んだ。

ふざけていたのは内心の緊張を紛らわすためだつたのかもしない。たつぱり一刻ほども待つてから官吏の一人が部屋の戸を叩いた。

「ダリウス様がお三方にお会いになるそうです」

ダリウスの私室のほうへ案内された三人はぎこちなく部屋の入り口にかたまつていたが。

「こちらへ来てくれないか。話がある」

ダリウスにうながされて部屋のテーブル近くにある椅子に座つた途端。

「わたしは父上をお助けして、おまえたちと共にコーラルを討つことを決意した」

いきなり核心の言葉を口にしてダリウスは向かい合つ三人を見つめた。

「では、使い魔を残していくまで連絡はこの物にお願いします。あたしたちからの伝言もこれを通しておこないます」

右端のしょぼくれた感じをみせる魔道師が立ち上がりて懷から羊皮紙を取り出す。次いで放たれる言葉。

『アンズス、アンスル、オス』

印が素早く結ばれた直後に羊皮紙は姿を変えた。

つら若い女官の姿の女に変わったのを驚いて見つめるダリウスを

残し、三人は部屋を出て行く。

「さつきの魔方陣でさつきとボルチモア州に帰つたほうがいいんじゃないの？」

「あれはそんなに遠距離には対応していませんよ。何せ、前は竜道がありましたからね。長距離を繋ぐ魔方陣なんてこの国にはありません。とにかく……」

アリストローザにそう返してダニアンは一人に向く。

「魔道師は血統だとかでなるんじゃないんですよ。魔術は学問と同じです。基本的にのつとつて勉強し、練習を重ねて会得していく物です。あなた方だってやるつと思えばできる物です。まあ、魔道師になるにはそれ相等の覚悟が要りますが。魔道師だからって何でもできるなんて事はありません。身につけていない術なんてできませんよ」

「そりなんだ。ぼくはてっきり魔道師なんて生まれつき何かの印でも付けて生まれてくるのかと思つてた」

苦々しく言う、ステファンの言葉にアリストローザも内心こつそりとうなづいていた。

魔道師は一般の人間と初めから違つてゐるのかと……気がつかないうちに彼らを差別していたのだろうか。

「生まれつきだなんて。あなた方が頭に思い浮かべてるのは魔法使いじゃないんですか？ そんなものはおとぎ話ですよ。言つておきますけど、わたしは金物屋のせがれでしたよ」

うんざりした顔を一人に見せて中年の魔道師は体を返すとすたすたと歩き出す。

「おい、偉そうにしているんなら馬にも一人で乗れよ。はげ魔道師」
背中にかけられたステファンの言葉にぎくりと肩を振るわせて急にすがるようにダニアンはアリストローザを見た。

さつきまでの威勢はどこへやら。ダニアンはいつものじょぼく

れた中年の男に戻る。

「仕方ないわね。一緒に乗つてあげるわ。ただし、とばすわよ」
がつくりとうなだれる魔道師を馬の上に押し上げてモンド州城内の馬丁の男に一頭返すと一頭の馬は走り出した。

14・ウイリアム

一日後、ボルチモア州の小さな廟。

三人を出迎えたウイリアムは意味あり気によつくり見回す。
「で、成果は？」

「うん、モンド州はこちら側に付く」

ステファンがどうだ、と言う顔を見せてウイリアムの横を通り過ぎて中に入つて行つた。

「で、あなたのほうはどうなの？」

「おれ？」

アリストローザの方へ体ごと向けてウイリアムがその手を彼女の肩にぽんっと置いた。

「ハーネート様の一行が通る予定の街道沿いに仲間を配置したぜ。どこで本人とすりかえることにしたんだ？」ステファン

ウイリアムにそうだなあと、ステファンは地図を眺めていたが。

「何をするんだ？」

ステファンの取つた行動にまわりも驚く。彼は懐から出した短剣をウイリアムの喉元に突きつけていたのだ。

「何のまねだ？」

「ステファン、あなた何しているのよ。離しなさい」

「ステファン、ここを血で汚すなんて絶対嫌ですよ」

最後の言葉だけ、何を心配しているかわからないものだったが、ステファンはふざけた風でもない。

「ぼくは一人助かったつて聞いて、実はあんたを疑つていたんだ」短剣を握つてないほうの手がアリストローザに向けられる。

「それを見極めるためもあつて、あんたをモンド州に連れて行つたんだけどさ。違うみたいだつたな」

そんなことをステファンが考えていたとはアリストローザはちうり

とも思つていなかつた。

「で？ 何で俺なわけ？」

すつとぼけたような声音で言つウイリアムにステファンの短剣がすいつと赤い筋をつける。

その赤の線が滲んでいく。

「すりかえる、なんてぼくは「」にいる時、一言だつて言つてないぜ、おっさん」

ステファンの言葉に廟内の気温がすうつと下がつた。

「言つてなかつたつけ？ おかしいなあ」

ふざけた口調はそのままに突きつけられた剣をあつさり弾くとウイリアムは背後に飛び退いて腰からスラリと剣を抜いた。

「はは……おれとした事がうつかりしていたな。二人つていうのもアリストローザは別だと思うはずと思つてたんだが」

「コーラル側に寝返つていいのか？ おっさん」

「どうなの？ ウイリアム」

頼りになると 思つていたのに。アリストローザはいきなり頭を強打されたようにふらりとよろめいた。

また、わたしは三年前のように見誤つたの？

戸惑つように見ると不敵に笑う細められた目とぶつかつた。

「悪いな、だがおれはコーラル側つてわけでもない。まあ黙つてたこともあるが」

「まあ、座つて話を伺いましょうよ、皆さん。お茶が入りましたよ」
ひやりとした空氣をぱつさり切つて和やかな声が聞こえ、淹れたてのお茶の香りが広がる。

「そうだな、そうさせてもらおつ」

にやりと笑つたウイリアムが剣を腰に納めてどかりと座る。

「おっさん！」

「ステファン、落ち着いて。ウイリアム話を聞かせてもらつわよ」
嫌がるステファンの右手を強引に引いてアリストローザは自分の横

に座らせた。

その横で素早く田配せするのをステファンが見逃すはずも無く。「「」、「はげ魔道師とおっさん。おまえらどうからつるんでいやがるー。」

鋭い声が飛ぶ。

「止めてくださいよ。あたしだってモンド州に行く直前までこの人が（その人）だなんて思いもしなかつたんですからね」

「その人？」

「おれはあの三年前とつ捕まつて殺されそうになつたのは本當だ。おれは死んだことになつている」

問い合わせようと口を開けたアリストローザをまあまあといさめて。「おれの命を助けてくれたのはあんたの想い人だぜ、アリストローザ」思わず我をわすれて立ち上がりかけたのを今度はステファンが止める。

「クロードが？ 一体いつの間に」

「三年前、サイトスの地下宮に繋がれたんだ。そのとき彼がひょっこりやつて来たんだよ、一人でさ」

「じゃあ、あの時あなたも地下宮に居たの？ 知らなかつた そんなん事クロードは一言も言わなかつたわ」

またしてもクロードにしてやられていたとアリストローザはため息をついた。わたしにだけ会いにきたと自惚れていたのに。

「ちょっと、おっさん」

ステファンが食卓を叩く。

「何だ？」

「今、サイトスの地下宮に居たとか言つたよな？」

「ああ」

「あんた一体何もんだ？ 貴族じやないとあそこには行かないはずだぜ」

あつと思いながらアリストローザはステファンに顔を向けた。

「おまえって要らん事ばかりに鼻がきくよな。俺はボルチモアの將軍、トレンスの弟だ。これで納得したか」

「そうだったのかとアリストローザは改めて目の前の陽に焼けた人好きのする逞しい男を見上げる。合つた途端に細められる目。

「彼は俺におまえの事を頼むつてさ。おまえがもしました、お転婆な事をしたら助けてやつて欲しい。そう言つて獄から出してくれたつてわけだ。だから、もらつた軍資金と何十人かの手勢でこの一年間ボルチモアとサイトスを見張つてたわけだ。アリストローザ、やけにあつさり州城から出られたと思わなかつたか？ 俺の身の上話は以上 納得したか」

「クロード様はこつなることを半ば予想されていたのかもしれないですね。わたしには竜の封印がある書簡を持った者が来たら手を貸すようにとの御命が術によつて一度あつたきりですが」

そこでダニアンの口調が変わる。

「だつたら早く封書を見せて頂いてたらこんな」たゞした事にならなかつたんぢやないですか、まったく

「わりい、忘れてた」

アリストローザは一人のやりとりをぼんやり聞きながら思い出の中にいた。募るクロードへの郷愁。

先の先を読んで手をうつしている彼。こうなると分かつていたのになぜこの国を出て行つてしまつたのか。

アリストローザには彼の事情など分からぬ。クロードは自分の事になると途端に寡黙になるのだ。

そして 頑固だ。

作つていた弱さでは無く、少しほんの惱みや考えを打ち明けて欲しかつたのに。

「アリストローザ様、お茶が冷めますよ

ダニアンの声にやつと我に返つた彼女の耳にステファンの声が聞こえる。

「まあそれぞれ色々な事があるさ。で、逐一この魔道師先生があんたに連絡を取つていたといふことか」

「そういう事だな。おまえには何も無いのか？ ぼつづ」

「隠すことがあるほどまだぼくはそんなに歳くつて無いからな」

「へええ、いいねえ若いってさ」

ウイリアムの軽口に応えず、ステファンはボルチモア州の地図を広げた。州境近くの街道沿いの道に付けられている印。

それはハーコート公爵が宿泊する予定地。

その一つを指差す。

「じゃあさ、ここですり替えよつぜ。魔道師先生が作った木偶と本人を入れ換える。そしてこここの森林地帯を抜けてゴート山脈側からモンド州に入る。州境まで行つたら、魔方陣で空間を飛んで州境越えをすませるつてことで」

そこで大人しく聞いているダニアンに向く。

「また、しつかり働いてもらつぜ、先生」

「分かつてますよ、クロード様に頼まれてるんですから仕方ありますせん」

「で、あんたが持つている手勢とダリウス様からもらつた手勢でお守りしながら速やかにモンド州の州都アリエルにお連れする。と、ここまではいいか？」

「ああ、おまえはどうする？」

ウイリアムに聞かれてステファンは少し考えていたが。

「今回あんた達で行つてくれ、森林地帯で待つてるよ。疲れたなあ、先に休むよ」

そう言つて立ち上がるとなつたと二階へ上がつて行く。

「一緒に行かないつて、どういう事かしら」

「あいつにも色々あるつて事じやないの？ さて腹減つたな。ダニアン何か作つてくれよ」

思案顔のアリストローザにウイリアムは簡単に返すとダニアンにさかんに腹減つたを繰り返す。

「いい加減にしてくださいよ、あたしだつてたつた今帰つて来たばかりでくたくたなんですよ。だいたいあたしは、あなたのお母さんじゃないんですからね」

「気持ちの悪くなるような事をいわんでくれよ。想像しちまつたよ「悪つ」じこしましたね。スコーンくらいなら出来ますけど」

ぶつぶつ言いながらも腕まくりをしてダニアンは厨房へと消えた。「人数の割り振りと事前準備にかかるうぜ。俺とおまえはダニアンがハーコート公に付けている使い魔がハーコート公に摩り替つたら、速やかに宿から公を逃がす。宿の使用人をそつくり入れ換えるんだ」「ウイリアム、ありがと。あなたが味方で本当に良かつたわ」アリストローザの差し出した手を掴むとウイリアムがぐいっと引き寄せて彼女を抱きしめた。

「クロード様によろしくつて頼まれたからな。と、いう事は全部頂いていいってことか」

「冗談！ それはダメよ」

「そうなの？ 残念」

びっくりする腕の中のアリストローザに悪戯っぽい笑みを見せてウイリアムは手を離す。

「何をやってるんですか？」

その大声に振り向いた先にいた、スコーンを山盛りにした皿を持つ顔が真っ赤な魔道師。

「廟の中で破廉恥なマネは止めて下さい」

「ダニアン、これはそんなんじゃあ無いわよ」

二人の騒がしい文句、または反論に構わず、ウイリアムはダニアンの手の上にある皿から出来たてのスコーンを掴んで口に放り込む。「んー美味しいな。おまえ女なら、おばさんでもいいから嫁にするのに」

「滅相もない。誰でも良いんですか、あなたは」

「女限定だがな」

「最低だわ」

抱き締められたことより、誰でも良い発言に気分を害したアリス
ローザだったが。

さつきのは冗談だったのかとほつとしたのか、残念だったのか。
複雑な気分で食卓に向かう。

「お茶を淹れるわね」

「ああ、止めてください。あたしがやりますから。手を触れないで
ください」

自分を大事にしてくれて言っているわけではない。この魔道師
は、こと家事の才能が無いアリストローザを信用してないだけなのだ。
「お茶くらい淹れられるわよ。でもまあいいわよ、やりたいんなら
譲つてやると言わんばかりの態度に隣の男が大声で笑った。

それから一日後。ボルチモア州に入ったハーコート一行は予定通りの宿場町に着き、予定通りの宿に入る。

本当に何かあるのか。そう、懸念するほど何も起きない。

「ここで公には姿を消していただきます」

突然、耳元で囁かれた声に振り返ると。

「お久しぶりです。ハーコート公様」

目の前にいる、宿のお仕着せを着ている女を確かにハーコートは知っていた。

「ボルチモアのアリストローザどのか」

「はい、ハーコート公様。宿の使用人はすべて我らの仲間になつております。こちらにおいてください」

「うむ」

立ち上がったハーコートは背後の気配に振り返る。そこには頭の薄い中年の魔道師が何やら呪文を唱えていた。

「ウルズ、ライゾ、マンナズ、ラグズ、カノ」

素早く結ばれる印。

直後、手にした羊皮紙に変化が起る。

一瞬、それは燃え上がり即座に消えた。

後に残る、床に煤状になつたそれが大きく揺らいで膨らむ。うねうねと伸びていく二つの黒い物の先が五本に分かれて、その間に現れる大きな丸い物。それは人の頭か。腕のようなそれ。

それを支えにしてその黒い物は床からおのれの体を引っ張り上げる。

軽く首を捻るようにして魔道師の前に、それは いた。

「これは? 何なのだ」

「これは貴方様の代わりでござりますよ、ハーコート公様」

気味が悪そうに尋ねるハーコートにやりとした笑いを見せた魔道師。その間にも目の前で変化は続く。

セミの羽化のような ぶよぶよとした人型に色が付いていく。

「これは……」

「コレハ」

まねて続く声も確かに自分のものか。

ハーコートはあまりの精巧さに言葉も無く出て行くことも忘れていた。目の前にいるのはもはや、わけの分からぬ物体などではない。

「さあ、ハーコート様こちらに」

アリストーザの声にせかされてハーコートは部屋を出た。

「しかし、良く出来ているな。本物に見えるぞ」

足の先でつづくようにしながらウイリアムが言いつ。

「止めてもらえませんか、術で使い魔を操っているんですから」

「て、ことはこいつの術が解けたらどうなるんだ？」

「さて、ここを出ましょ。間諜の呪もかけておきましたからね」

「おい、さつきの返事がまだだぜ」

重ねて尋ねるウイリアムにダニアンが露骨に嫌そうな顔を見せる。「言うんですか？ 解けてしまったら、まず近場の人間は助からないでしょ？」

「何？ ジャあ、代わりに斬られるなんてことになつたら術が解けて大変な事になるんじゃないのか」

「斬られたつて解けやしませんし、この使い魔は実体は無いんですけどから大丈夫ですよ」

「絶対に？」

「この世の中に絶対はありますんがね」

縁起でも無いことをあつさりと言わせてウイリアムは鼻白んだが、ここはこの魔道師に任すほかはない。

しかし、事魔術が絡むとこの魔道師はどうしてこんなに性格が悪くなるのか。普段の彼にはあり得ない事を平然と言つたり、行つたりする。

これが魔道師の胡散臭いところだ。

裏口から出入りの商人の格好に着替えたハーモートを連れ出す。人通りは少ないが顔を見られる危険は侵せない。

商人の格好をさせてもどうにも威厳のある立派な印象は隠せないのだ。

急いで辻馬車に偽装した中にハーモートを案内してアリストローザは御者の男に合図を出す。

「では、出発！」

御者役のウイリアムが調子よく言つてムチを振り上げた。

首都サイトス、王の寝室にクライブは寝かされている。このところ気分がすぐれず、寝込むことが多い。

気鬱のせいなのか、どうか。

頭が重く、体がだるい。

「陛下、お起きになられたのですか？ 今日の分のお薬ですわ」

この半月ほど前から看病のためについている女官がすかさず、薬が入っている小さな杯を手渡す。

「サリア、薬は後にしてくれないか。どうもそれを飲むと吐き気がするんだ」

「だめですわ、ちゃんとお飲みくださらないとわたしが怒られます。どうか、少しづつでもお飲みくださいませ」

心配そうに気遣いながらも女官は杯を飲むようにじつじつとすすめる。

「わかった」

クライブはこれも彼女の仕事なのだと仕方なく杯を傾ける。

そして口に広がる耐え難い味に吐き気をやつと堪えた。

「陛下、大丈夫ですか？」

サリアがクライブの口元を綿布で拭いながら背中をさす。その手のあまりの心地よさにクライブは痺れ始めた体をゆっくり倒した。

何も考えたくない。この気持ち良さの海の中にずっと漂つていいたい。

田を閉じるのを確認してサリアは薬の入っていた杯を手に立ち上がりと寝室を出て行く。

「陛下は薬湯をお飲みになられたか」

廊下に出たところでサリアは男に声をかけられた。

「マルト様、お飲みになりましたがあれでよろしいのですか。酷くご様子が変でしたわ」

「あれでいいのだ。おまえは黙つて言つ事を聞いていればいい」

冷たく言われて女官は肩を震わせて男に空の杯を渡すと下がつていつた。それを見送ると男は王の執務室に入る。

「コーラル様、今日もクライブ様はお飲みになりましたよ」

「あんなに口に苦い物を欠かさずに飲むとは生真面目なものだな。自分の体調がどんどん悪くなっているのに疑いもせずに。素直なのも度が過ぎるところいけなほどだ」

辛辣なことを言つてこの国の宰相コーラルは笑う。

主のいない執務室を我が物顔で使つてゐる彼は空の杯を受け取つてにこやかに手前の官服姿の男を見る。

「明日からはもう少し量を増やそうか、マルト」

「こゝが本当の意味で自分の物になる田も近い。」

州境近くの森林地帯。麓の町でステファンと落ち合ひ事になつていた。

晴れていたと思っていたのにアリストローザが空を見上げると灰色の重たい雲がわずかな光をも隠そうとしていた。

「遠雷が聞こえるわ」

「んあ？ ああ、雷か。早くぼづ、来ないかなあ」
ウイリアムが同じよつに空を見上げる。

雷より一足早く降り出した雨が馬車の屋根を激しく叩く。その矢のような雨の中、マントをすっぽりと被つた男の姿が見えた。

「遅れてしまない」

言いながら男は馬車の御者台に上がる。

「中に入らないのか」

「もう、濡れてるし。こゝでいいわ」

何かを決意したような横顔を見せて黙り込むステファンに、ふーんと言いながらウイリアムは馬車を出す。

馬車はどんどんと山奥へと入っていく。その馬車の前にあがる轟音とすさまじい光。

馬が怯えて立ち止まる。大きく地面がゆらぐほどの轟音。

「どうした？」

「雷が目の前の樹に落ちただけです」

心配気に窓から顔を出す、ハーネースにマントを深く被つた御者台に座つた男が返す。

「雨に濡れます。窓を閉めて下さい」

そう言つたところでおこる一度目の落雷に馬が驚いて大きく前足を上げて後ろ立ちになつて暴れ出した。

ウイリアムは大声を出して馬をなだめていたが雨の音にかき消される。

「危険だな、馬を放そう

「ああ」

横のステファンがうなづいて立ち上がった途端、馬車が大きく傾いでステファンは地面に投げ出された。

「おい、大丈夫か」

そこへ流れる声。

「縛せよ…」

印を組んだ魔道師が馬車から降りて、馬に呪を飛ばす。血走った目を見せながらも馬は地面に縫いとめられたように動かなくなつた。

「ステファン、おい、田を開けろ」

「馬車に運んで、ウイリアム」

アリストローザの言葉によし、と細いといえど氣を失つた大の男を軽々と担いでウイリアムが馬車の中へ倒れた男を運び入れた。

「ハーコート公様、申し訳ありません」

「いや、そんなことよりマントを脱がそつ」

びしょびしょに濡れたマントをアリストローザとハーコートが苦労して脱がせる。

「こ、この者は」

マントを脱いで顔があらわになつたステファンを見たハーコートがその言葉の後に絶句した。

「わたしの仲間のステファンですが。何かありましたか」

「い、いやそ、うか。あまりに似て、いるから驚いて」

「誰です？」

アリストローザにはつとする顔を見せてハーコートは小さく応えた。

「わたしの弟たち……にだよ」

「弟？ 前国王と宰相コーラルということ。」

「クライブ国王陛下もクロード様も、マーガレット様にしても。どの方も父親には少しも似ていなかつたといつのこと。この者の素性はどういうものなのか」

「ううん、とこつ声をあげて気がついた様子の男が目を開ける。

「ハハハ？」

男は、やう言つたあとに自分を見下ろすよつに見てくる壯年の男に気が付いてびっくりと眉を上げて顔を逸らす。

「おまえ、ゴーラル前国王に縁のある者なのか」

他人の空似だと否定しないといふことは、そうであるのか。

「おまえ、何とか言えよ。おい、ステファン」

ウイリアムの強い声に顔を逸らしたまま、ステファンはため息をつく。

「ぼくはゴーラル前国王に縁はあります、彼の子孫もとかじやありませんよ」

そこにいる皆のじやあ何だ？ とこつ顔を見ながらステファンは苦笑いを浮かべる。

「どうちかとこつとぼくは今の宰相の方、ゴーラルに縁があるんですよ」

「何？」

生まれてからすぐ魔道師に引き渡された双子の半身に関わりのある者とは一体どうこつことなのか。

「ゴーラルは王が即位するまでモンド州のゴートの廟にいたのではなかつたか」

「いいえ」

ハーコートに即座に返される否定の言葉。

「彼が二十四歳の頃、隣の州の州宰について政務を習つていたことがありました」

「そういえば」

ハーコートが記憶を辿るよつて視線を遠くに移す。

そう言えば、自分が直轄地になつて、モンド州を所領地として住まいを移してしばらくしてゴートの廟長ルークが挨拶に来たのだった。

それは彼が三十歳を少し過ぎた頃の初春。

執務室に突然開いた竜門。

魔道師庁のあるサイトスの王城にいたハーコートにしても、竜門が開くのを見ることはこれが初めてだった。

それは、魔道師が使う竜道といつもの妖しさを魔道師長のガリオールが充分承知しているためだ。

時間と距離に縛られず、どこにも行ける道など魔道師以外には気持ちが悪いだけだ。しかも、魔道師と王以外は通れないのだから。サイトスの王城内では、竜門は魔道師庁内でしか開かない眞の戒律がある。

その竜門が、なぜここに？

「バルザクト様、ああ、失礼しました。いつまでもサイトスにいました頃のようにお名前でお呼びしてはいけませんね。ハーコート公爵様、突然に申し訳ありません。少しお邪魔しても？」

「ああ、ルーク殿か。何だ？」

姿を見せた者は、自分がまだ首都サイトスにいた頃から何度となく顔を見ている魔道師。途端に緊張が緩み、ハーコートは安心して笑顔を向ける。

「あと数年でラジム陛下がご逝去なさいます。今、陛下に側づいておりますクロードはお隣のボルチモア州の州宰に付く事になつております。で、引継ぎのために今はボルチモアに来ております

「それで？」

「王のお側に付く為の心構えとか政務の勉強のためにうしぐで預かっております、雛をしばらくボルチモアに預けようと思つております」

ルークは指を折りながら柔らかく笑つた。

「半身としては彼が一番歳が近いですし、話が合うかなあって。わたしも若いつもりですが実際はちょっと歳上ですかね。緊張させてばかりじゃあ、可哀想だし」

「そうは言つたが言つてゐる言葉や態度に緊張感は全く無い。」この男はいつもやうだが。

「離？」

「あ、これは失礼しました。王の御名を頂くまでクロードは一人ありますので、養育中のクロードの方は廟では離と言つてゐるんですよ。可愛いでしょ？」

ハーコートは四百歳を越えていいる男の軽口に眩暈を覚えた。

「それではわたしの弟が来ているのか？」

「はい、近くまで来たので」挨拶にと。離ちゃん、兄君にご挨拶を」ルークの後ろにいた、フードを深く被つていた魔道師がフードを後ろにはねのけてこちらに顔を上げた。

「ハーコート公様、お初にお目にかかります」

たつたそれだけ言うと頭を軽く下げて硬く口を閉じた魔道師の顔はこの数年前にサイトスで別れた自分の弟と瓜二つだった。違うのはかもし出す雰囲気か。

「バルザクト兄様、お別れとは辛いです。すぐに会つに来てください」

もう、二十歳になるといつにひどくしょんぼりしながら手を差し伸べる弟。

ここ、モンド州に来る前に言葉を交わした弟、コーラルの事を思い出し、知らずにハーコートに浮かぶ暖かな笑み。

穏やかな、少し怖がりで大人しい七つ下の弟をハーコートはとても愛していた。

こんなに優しい気性で王の重責が務まるのだろうか。体を壊してしまうのではないか。

心配で心配で。

「のまま、サイトスに留まつて弟を守つて暮らしていくのも悪くないと思っていたのだが。

「の国の中になるのは、生まれた順番でも、正統性でも無い。

王の血を受け継いでいるなら庶子だらうが関係ない。

しかし、必ず王になる者は印があるのだ。

それは 双子である、といふこと。一方が王になり、片方が魔道師になる。

それも竜印という刻印を体に刻み付けられて永遠に近い不老の者となる。

ハーロートが王になる確率は生まれた時にすでに無かつたと言ふ。しかし、ハーロートはそれを既に受け入れていた。自分が弟の臣下になること。支えていく、そう思つていた。その愛する弟にそつくりなのだが。

同じような赤っぽい茶色の髪に明るい青の瞳。何から何まで良く似ているといふのに。

あまりにもクロードが放つ、冷たく拒絶する氣配に親愛の情も湧かない。

「これら、雛ちゃん。何ですか、あつさつしさですよ、まつたく困つたものだ」

灰色の瞳を困つたなあとこつまづく細めて廟長のルークはやんわり咎める。

「では、場も暗くなつたことですし、我々はさうかとおことましますね」

ルークは、レイモンドール国の中でも上位三人の中に入るほどの魔道師、であるはずの男だが見た目は二十代そこそこ。そして口調もはるかに軽く、とても重鎮とは思えない。

しかし、彼を含めてこの国の上位の魔道師は何百年も生きている人外の者だ。

見た目に騙されではない。その仲間に自分の弟も数年以内になる、といふのか。

暗澹たる気持ちのハーロートの目の前で開いた時と同じように竜門は消えた。

そんなことがあった。

それから一年ほどゴーラルはボルチモア州にいたのではないか。
「その時の……？」

「魔道師の戒律をあいつは破ったというわけ。竜印が完成する前に魔道師は女犯するのを最大の禁忌としている。

そして、主、魔道師イーヴアルアイの僕たる証、竜印を刻印される上位の魔道師は竜印が完成すれば繁殖能力は失われる。

「そんなことが」

側にいたアリストローザも一言言つて黙り込んだ。

「僕はいつも魔道師たちに追われていたんだ。僕は生きてちゃならない者だからな」

ステファンは自嘲気味に笑つた。

「俺と兄貴はそれこそ、溝ねずみのように逃げ隠れしながら生きていたんだ」

「お腹に僕が宿つたことを知つた、僕の母親は誰にも告げずにボルチモア州城から逃げたために、無事に城からは出ることができたんだが」

ステファンの平坦な調子の声がつづく。

ボルチモア州、州姫リディアは疲れ果てて樹の影に座り込んだ。こんな所で休むなんて危険だと思ったが、もうどうにも足は一步も動いてはくれなかつた。

余興の旅役者や、吟遊詩人。正妃の催した宴に呼ばれた者たちに紛れて城を抜け出したのだ。

案外、入るのには厳しいが出て行く者に緩いのはどこでも同じか。外門の門番など庶子であるリディアの顔など知つてはいない。まあ、下官の立場では州候の顔だつて知らないだらうが。自分の足でこんなに歩いた事さえ今までに無かつたのだ。しかも今は妊娠初期で毎日吐き気と戦つていたのだ。

食事もまともにしていなかつた体は悲鳴を上げている。

「ごめんね、赤ちゃん。少し、少し休んだらまた、動けるから。ちよつと休ませて」

まだ、目立たないお腹をさすりながらリディアは目を閉じた。それからどれほど経つたのか。

「お姉ちゃん、ねえ、」

体を揺すられてやつと薄く開けた目に映るのは心配そうに見つめる小さな男の子の顔。

「え？」

「こんなところで寝ちゃつたらダメだよ、風邪ひいちやうよ」

「こんなところ？そこでやつとはつきりと起きたリディアは体を起こすと周りを慌てて見渡す。

大きな街道を一本外れた脇道の脇に植えられた樹。それにもたれるように腰を降ろしていたのだ。

なんて、無防備な事をしていたのかと今更ながらどきりとする。

その起き上がつた彼女を軽く見下ろすくらいの年頃の少年が気遣うように手を差し伸べた。

「ねえ、立てないの？ 寝たいんだつたらおこらの家におりでよ。
すぐだから」

「触らないで。いいから放つておいて」

リディアに手を振り払われて困惑したような顔の少年。

そこで鳴るお腹の音。

「お姉ちゃん、お腹すいているの？ だから怒つてるの？」

「つるさいわね、向こうへ行きなさい。放つておいてと言つていて
でしょう。あなたばかなの？」

声をかけた相手のあまりな言い草に少年は口を真一文字に結ぶと
くるりとリディアに背を向けて走り去つて行った。

少年の去つて行く背中を見ながら、誰も信用できないとリディア
は苦く思つた。

一番信用出来ないのは、見返りを期待しないで親切をするように
見せてくる人間だ。

ここへ来るまでの数日、リディアは散々な目に会つていたのだ。
まずは、優しい中年の夫婦者に荷馬車にのせてもうつたこと。

そう、一見優しい親切で働き者の夫婦。

「何か、大変そうだね。疲れた顔をして。いいよ、ここで会つたの
も何かの縁だ。乗つておいきよ」

そう、言つてくれた。

が、半刻後には二人は追いはぎに変身していた。逃げるときこそ
着替えなかつた自分がばかなの今は今では分かつてゐるが。

豪奢なドレスも付けていた装身具もまるごと奪われて物のようにな
道に投げられた。

「下着じや、可愛しうだね。これをやるよ

女は自分の着ていた継ぎのあたつた服を投げてよこすとリディア

のドレスを着こんで笑つた。

「あら、あたしのほうが似合つじやないか」

あまりの屈辱に言葉も無かつたが下着でいるわけもいかず、起き

上がつてそのぼろぼろの服を着たリディアはふらふらと歩き出した。後から考えると物を取られたくらいですんで本当に良かったのだが。

その時は裸足に当たる小石に顔をしかめながら歩く彼女にそんな余裕は無かった。

「お腹すいてないかい？」

そう、聞いてきた十四、五の少年に貰つた腐りかけた乾し肉のために下着の下に用心のために持つていたお金を持つていかれた。そうしないと少年の仲間たちに棒切れで叩き殺されそうになつたのだ。

のこのじについていく自分がばかだつた。自分以外、気をゆるしてはいけない。

わたしは死ぬわけにはいかないのに。この子を守らないといけないのに。

リディアの決意は固い思いとなつて殻のように纏つっていく。そしてただ、一つの教訓が身に染みていくのを感じていた。

親切を押し売りにするよつな者はろくな者ではないと。

「お姉ちゃん、はい」

その声に驚いて顔を上げるとさつきの少年が息をきらせながら手を差し出していた。

手にのっているのは黒ずんだ丸いパン。

「おなかすいてるんだよね。だから怒りたくなつちゃうんだ。父さんが人は腹へつてるとろくな事、考えないつて言つてたよ」

そう言つて笑顔を向ける少年になんてしつこいのかとリディアはため息をつく。そしてまわりを注意深く見回した。

少年の連れがいかどうか。

誰もいないことを確認した後、素早く少年の手からパンを奪い取つた。

これくらい小さい子なら振り切つて逃げることがわたしにも

であるべきなら。

一方その頃、ボルチモア州、州城州宰の執務室。

「こ、これはガリオール様、ルーク様」

州宰のダークスが青い顔をして竜門から出てきた「魔道師」一人連れを迎える。

「何の用で来たのか、分かつていいんだろう? ダークス」

「さ、さて……」

「あれれ、さては呆けたのかい? まだ、おまえは二百年ほどしか生きてないはずなんだけど」

ルークが笑いながら言つたが、その灰色の目は少しも笑つてはいな
い。
「うちの離ちゃんの事だよ。ちゃんと見てつて言つてたよね、ダー
クス?」

「クロード様の事……ですか」

ダークスは呆けてみせるが一人には通用するはずも無く。

「女犯するべからず これを忘れていたのか、ダークス」

ガリオールの冷たい声に呆けていたダークスもがっくりとうな垂
れた。まさか、預かっていた竜印の完成前の半身が女性と関係を
持つなどとは。

竜印が完成すれば主以外に魅かれることなどめったに無い。 い
つも主、イーヴァルアイ様と自分たち僕は繋がつてはいるのだ。

そのため、うかつにも彼が女性にうつつを抜かすことなど考えて
いなかつた。

あと、自分は数年で魔道師庁の高官の座が約束されていたと
いうのに。

「クロードはすぐにゴートに戻す。で、その相手はどうした?」

厳しいガリオールの問いかけて彼の目の前に投げ出されたよう
にひれ伏す男。

「申しわけありません、取り逃がしましたが直ぐに、直ぐに捕られます。なにとぞご容赦を」

「えーっ、逃がしちやつたの？ ねえ、うちの離ちゃんの面倒も見れない奴に州宰は無理なんじゃ ない？ ガリオール」

「そうだな」

ルークの言葉に相づちを打つて、ガリオールの手が印を結ぶ。
『エワズ、ラグズ、ハガラズ、ケン』

呪文の後にためらうことなく目の前の魔道師の胸元に突き入れられる右手。

その手は立体化した竜印を掴み取ると床に投げ捨てる。

『滅せよ』

その呪文に跡形も無く竜印は消えた。

「ガリオール…… も……」

竜印を取られたダークスは目の前で砂のよう崩れしていく。術が解けて本来の姿に戻ったのだ。人は本来、一二百年も生きられない。

ルークは砂の山にわずかな憐憫の表情を見せるが、それもすぐいつもの飄々とした顔の下にしまいこまれる。

「どうする？ ガリオール」

「そうだな、そこのおまえ。名前は何とこうのだ？」

魔道師長のガリオールに指を指され、出て行く間合いを失つて部屋の隅に突つ立つていた、まだ頬の赤い魔道師がおずおずと答える。「あ、あたしでござりますか？ あたしはダークス様の雑用をさせていただいてた者で、ダニアンと申しますです」

「申しますです、だつて。この子面白いねえ、ガリオール」

ガリオールがルークに厳しい目を向ける。

「面白がってる場合じゃないだろう、ルーク。ダニアン、おまえを州宰代理に任命するからすぐに仕事にかれ

「あ、あたしですか？ あたしはダークス様の……」

ただの雑用係だと呪う言葉は最後まで言えない。

「ダーカスはいないんだし、すぐゴートから上位の魔道師を送るよ。それまでの辛抱だよ」

「これは決定だ。拒否などできな」

やんわり言うルークの言葉に、被せられるようにかかるガリオールのきつい言葉にまだ若い中級魔道師の男はただ、うなづくしかなかつた。

「では、ダーラン。ドリーク候を呼んできなさい。彼の息女のおじした事だからな。彼にはきつちつ始末をつけてもらわなくては」

「しょ、承知しました」

どもりながらダーランが退室した後。

「めんどくさいよね、きみがあんな戒律作っちゃうかい。もう、削除しちゃつたら？」

「政治の中核に関わることが多い魔道師がそこいら中で干渉をつくつたらどうこう事になるかわかっているのか。秩序も乱れ、監理も煩雑になる。妻帯など考えられない」

ルークの投げやりな言い方にガリオールは憮然として諭すように言つ。

「ふうん、そうか。じゃあ、野犯はいいわけ？」

「ルーク！」

真面目に応えるのに返された、ルークのいい加減な返事にガリオ

ールの顔の眉間の皺が深くなる。

「冗談だよ、ここはところの君の皺、ゴートにあるハングエル山より険しいんじゃない？」

自分の眉間を指差して向ける笑顔。

「誰のせいだ、誰の。だいたい半身の監督責任の長はおまえだらう、

ルーク

「あら、やうてきたか。まあ、半身は生まれた時から連れられない運命を背負つて、いるわけだから屈折度も高いものを。わたしたちみたいに選べるわけじゃないからね」

「選んだわけじゃない」

ルークに素早く返される言葉。

私は親に口減らしのために廟に連れていかれたのだ。道端に捨てられるのと同じだ。

違うのは連れていく親の良心が痛まないことくらいだ。思つてもいなかつた、自分でも忘れていたはずの小さなとげに触れてガリオールは黙りこむ。

「だけど、龍印をもらう前なら還俗する手もあるし。普通の生活に戻つて貧乏でも人並みに死んでいく生活を送ることを選ぶことができたよ。半身じゃないわたしたちには」

「ルーク？」

おのれの生き方を疑問に思つことなど無かつた。自分と共に四百年以上を生きてきた魔道師から漏れた言葉にガリオールは心底驚いて相手を見つめる。

「それは……後悔しているということか？」

「いや、わたしは主を敬愛しているよ。でも、別の人生もあつたと、そう思つただけさ。普通に生きる道。結婚して子どもを育てて死んでいく道がさ」

「ルーク」

「何で顔をしているんだよ、ガリオール。わたしは君と違つて信念とかないままに生きてきたからな。迷いも多い。だが何もかも、もう遅いよ。人としての寿命の年齢をとつぐに超えて、もはやわたしたちにはこの道しか残されていないからな」

「私は後悔なんてしていない。おまえもそうだと思つていたが」「なぜか、傷ついたような顔を見せてガリオールが呟くように言つ。

「ねえ、自分の親の事思い出さないかい？」

いきなり自分のとげに触れるようなルークの言葉に即座に返される応え。

「私を捨てた親の事なんか、思い出す訳が無い」

「わたしは 思い出すよ、時々」

対してルークは、遙か昔を懐かしむように手を細める。

「廟に連れて行かれる前日の晩。母さんがこっそり家の裏に呼んでくれた。二人で食べようつてふかした芋を二つに割つて。びっくりしたよ。ばちが当たるんじゃないかってびくびくしながら食べたな。その味が今でも忘れられないんだ」

「で、美味しかったのか」

「ん すごい不味かつた」

「はあ？」

「ほんと徽てなんだよね。どうから拾つてきたんじゃないかなあ、母さん」

ガリオールはルークの話にどう言つたらいいかと複雑な顔をする。その顔を見たルークはふつと吹き出す。

「だからさ、人はそれだつて。魔道一筋のガリオールは好きだよ、男犯したくなるくらいに」

「ルーク！」

「あはははは……あんまり戒律作りすぎんなつてことだ」してやつたりと笑う同期の魔道師にガリオールは苦い顔をした。

ボルチモア州、州都近隣の町。

奪い取るように少年の手からパンを掴むとリディアは貪るように口に入る。何日ぶりかの食事。

のどが詰まつたのはパンのせいでは無い。

何て自分は落ちぶれてしまつたのか。お腹が落ち着くとやつと他の事を考えることが出来た。これは前の少年の言葉だつたか。

「ねえ、もし良かつたらまだ、パンがあるから持つて来るよ。どうする? お姉ちゃん、おいらの家来るの嫌なんでしょう?」

「そうね、じゃあ持つて来てよ」

尊大に応えるリディアに、それでもにっこりと笑顔を向けて少年は家のある方へ向かって一目散に走つていぐ。

「ばかねえ」

ここで待つつもりなどリディアには無かつた。あの少年は今頃、リディアがえさに食いついたのを確認してほくそえんでいるのかもしれない。

今度は父親か、母親。あるいは仲間を連れてやつて来る気に違いない。急いで逃げなくては。

もう、渡す物なんて無い。この身を売られるくらいだらう。そんな事は絶対にだめだ。

わたしにはこの子がいるんだから。リディアは立ち上がり歩きだそうとしたが、そのまま倒れこむと氣を失つた。体はとっくに限界を超えていたのだ。

ぱりぱりとした麻の布の感覚に驚いて目を覚ました彼女は自分が

狭い部屋の寝台に寝かせられているのに気がつく。

「お姉ちゃん、気が付いた？」

田の前に鳶色の田を細めて満面の笑みを浮かべる少年。

「父さん、父さん、お姉ちゃんが起きたよ」

その声によう、と応える低い声がして。

姿を見せたのは深い栗色の短髪。笑い皺が目立つ垂れ目がちな

鳶色の瞳。少年とそっくりな三十歳くらいの男。

身なりはまあ、ここに辺で見かけた者たちと似たような物。

綿の洗いざらしのシャツに袖なしの上着に膝下までのズボン。

牛皮のブーツ。腰にはナイフやら工具やらをぶら下げた太いベルトを締めていた。

「おれは、ラッシュだ。あんた、もう少し寝ていたほうがいいぞ。

顔色が真っ青だからな」

「いえ、もう大丈夫よ。さよなら」

起き上がって行こうとする彼女は男の腕に捕まる。

「な、何するのよ…」

「おー、人の親切にはお礼をするもんだろ？ 母親に習わなかつたか？」

男の言葉にリディアはまたかと張り詰めた顔を向けた。

「何をしろと言つの？」

挑戦的に言つリディアに男はそعدなど首を傾げる。

「寝ていたくないんならまずは、その汚い体を洗え。お礼も何もおまえ、相当臭いぜ」

やはり、この男はわたしの体が田当てなのか。倒れてしまつた自分を恨むがどうしようもない。

「奥の部屋にお湯と着替えが置いてあるからそれを使え。手を抜くなよ」

男の言葉に寒気を感じながら仕方なくリディアは奥の部屋に向かう。

何日かぶりにお湯を使って汚れを落とすと蜂蜜色の髪も体もすつ

きりして気分が良くなつたが、この後の事を考へるとその気分もまたたく間に落ち込む。

置いてある着替えは綺麗に洗つてあるが何回も着たよつて少しよれていた。

何人の女がこの服に手を通したのか。

重い気持ちで着替えるとそれを見通したよつに叩かれる戸。

「ねえ、着替えたらこっちに戻つてきてね、お姉ちゃん」

邪氣の無い声にあの男がこれからやううとする事を少年は知つてゐるのかと疑問になる。

しかし、自分が初めてじゃないのならあの純朴そうに装つている少年も全てを知つているのだろう。

できるだけのるのると戸を開けると、待ちきれなかつたのか少年が、リディアの手を握つて引っ張るように歩き出した。

皿の前の食卓に置かれた物にリディアは啞然と言葉も無く視線をここに主に合わす。

湯気を立てた、具はじやがいもらじースープ。

前に口にしたと同じ丸いパンが皿に盛つてあり、別の皿にはベーコンの固まりがのつていた。

「ヘンリーがさ。あ、こいつはヘンリーつていうんだよ。おまえが腹へつてるからイライラしてゐつてさ。まあ、なんだ。人つていうのは腹へつてるところくな事を考へないからな。だから飯食えよ」

「お礼つて……？」

まあ、座れと手を引かれて椅子に座らせたリディアはぽかんとする。

「ああ、そいつ、お礼、お礼。」の子に言つてやつてくれ

「言つ？」

「そつだ、ありがとつて言つてやつてくれ」

笑いながら言う男の顔をリディアは訳がわからず見返す。

「お世話になつたらお礼をするもんだろ？ こいつみたいながきに

するには抵抗があるかもしけんがな」

父親の言葉ににこにこと笑顔を向けて、リティアの言葉を期待している少年。

「あ、ありがとう」

小さく言つリティアに、どういたしましてと大人みたいに神妙に言つと、ベンリーという名の少年は彼女の前に水を入れた茶器を置いた。

「お姉ちゃん、その服良く似合つてるよ。それ、死んだ母さんのなんだ。母さんもきれいだったけどお姉ちゃんは、一番田にきれいだな」

「そう?」

「うん」

はにかむ少年の様子に揺らぐ自分の硬い心。

「じゃあ、食べよつぜ。いただきまーす」

大声で言つと最初に食べ物に口をつけたのはここの中人だった。

「父さん、お客さんより早く食べるなんて行儀が悪いぞ」

ベンリーの指摘に悪いな、と田が無くなるほど細めてラッシュは笑いながらパンを掴むとリティアに差し出す。

「ほれ、食えよ」

渡されたパンを口に運びながらそれでもリティアは、いつ逃げ出そうかと考えていた。

「ねえ、母さん。薪はこれくらいでいい？」

「そうね、ありがとうヘンリー。仕事場からお父さんを呼んできて。お茶にしましょう」

「わかった！」

元気のいい返事を返して十四、五歳くらいの少年が飛び出していく。

傍らにいた七歳くらいの男の子が赤っぽい茶色の頭を上げて母親を見た。

「ねえ、ぼくが作ったお菓子、父さん美味しいって言ってくれるかな？」

体も大きく、活発で人懐っこい兄とは真逆の弟。細い体に神経質そうな顔。

「お茶の用意手伝つてね、ステファン」

「うん」

母親について卓上に茶器を出す少年を見ながら彼女はため息をついた。

あまりに似ているのだ。せめて自分に似てくれていたなら。勉強が嫌いな兄に比べて弟のステファンは、早々に自分が納めた語学も何も吸い取り紙のように吸収してしまった。

最近では、なけなしのお金で買った古本で、もはやリディアにも分からぬほどの数式を独学で学んでいる。

本人は近くにある廟で魔道師に勉強を習いたいと訴えていたが、いつもは優しい母親がその事に対しては頑なに禁止していた。

田舎では都会にあるような学校の代わりを廟が担っているのだ。

しかし、ステファンは体が弱いという理由で家に閉じこもって暮らしてきた。

ぼくはこんなに丈夫なのに。

ステファンはだんだん、この窮屈な暮らしに我慢ができなくなっていた。 ぼくも兄ちゃんのようになりたい。父さんについて仕事を覚えたい。何でいけないのか。

「疲れたな、おいステファン。いい子にしてたか？」

そこへ、大きな音をさせて戸が開く。汗の匂いをさせて父親が入つて来るとステファンをひょいと抱き上げる。

首にしがみついてステファンは大好きな父親の匂いを嗅いだ。刀鍛冶の仕事をしている父親はいつも汗びっしょりで帰ってくるが、それはちつとも嫌な匂いではなかつた。

暖かい泣きたくなるような安心感をもたらしてくれる匂い。

「ねえ、今日お菓子をぼくが一人で焼いたんだよ」

そう言いながら手に持つていた焼き菓子を父親の口にあーん、と言つて入れる。

「うーん、上手い。おまえは何をやらしても上手だな。母さんと一緒に緒だ」

「えー？」

その言葉にヘンリーが笑いながら抗議する。

「母さんなんか初めなんて何も出来なかつたじやないか。 おいら、教えるの、結構苦労したんだぜ」

「今じや、母さんが一番だけな」

ステファンを抱いた反対の手でリディアを引き寄せテラッシュュはチュッと妻に口付ける。

「もう、子どもの前でいちやつくのもいい加減にしろよな」

そう、言いながらもヘンリーは嬉しそうに焼き菓子に手を伸ばす。

「うん、上手い。おまえ天才」

和やかな笑い声が部屋に満ちる。

七年前、人を信じられず、どん底だった自分がこんなに幸せになれるなんて。 このままひつそりと生きていたならいいのに。

仲良くステファンの話を聞く三人の姿を見ながらリディアはこつ

そりとため息をつく。

次の日、父親とヘンリーは仕事場に行つて、母親も買物に出かけて家にはステファンしかいなかつた。

「いつものように食卓の上に広げた本を一心に読んでいたが。
「どうして、ここがこうなるのか全然わからない。ここだけ、聞くだけだからいいよね。すぐ帰つてくるし」

ストンと椅子から降りるとステファンは本を抱えて家を出て行つた。

「あの、すみません。教えてもらいたいことがあるんですが」
「そうつと廟の門扉を開けながら声をかけてきた少年に初老の魔道師が気がついて近寄つて來た。
「何ですか？ わたしに分かる」となら何でもいいですよ。まあ入りなさい」

「ありがとうございます」

あつさりと廟に入れたステファンは、初めて母親に反発を覚えた。ぜんぜん怖くないし、ぼくはちつともしんどくない。 母さんはおおげさすぎるんだ。

廟の中で散々質問をする少年に応対した魔道師は驚いていた。何て聰い子どもだらう。

しかし、そんなに裕福そうでもないのにここに勉強しに来ている子どもの中にはいなはづだ。

豪商や、金持ちの子どもなら家庭教師を雇つてている。廟では無料で午前中だけ文字の読み書き、簡単な計算のやり方などを教えている。

その中で目に付いた頭の良い子どもを魔道師にするよつて親に勧めたりもしていた。

これだけ頭のいい子を見逃しているはずはないがと魔道師は頭を捻る。隣町の廟にでも通つていたのかもしれない。

「きみの名前は何ていうのかな？」

「あ、ぼくステファンといいます。町外れの鍛冶屋の息子です」「そりか、ステファン。きみは頭がいいねえ。いつでも聞きたいことがあるならひつひつにおいで。きみが良ければ魔術の本だつて見せてあげるよ」

秘密を共有するように小さく囁いた魔道師の言葉にステファンの顔がぱつと輝く。

「本当に? だつたら明日も来ていいですか。魔道師様」

「ああ、おいで。ステファン」

スキップをしながら帰る少年を見ながら魔道師は書棚から分厚い書きつけを取り出す。

町外れの といつとラッシュの所か。でも、あそこの妻はだいぶ前に病で死んだはずだが。 いつの間に結婚していたのだろう? 人別帳を開いた先にある名前にはラッシュの名前と死んだ妻の名前。

そこには死亡の理由と日付が記してある。 その下にある子どもの名前、ヘンリー。

この子は覚えがある。 大層元気の良いこどもだつたが勉強は今一つだつた。 頭が悪いのではないが体を動かすほうが楽しいようだつたな。

はて、あれからラッシュは新しく所帯を持つたのか。

そのときは魔道師は深く追求もせずにすませたのだが。

次の日から毎日ステファンは廟にやつてきて驚くほど早さで廟にある書物を読破していく。

ある日、廟にやつて来たステファンは小さい杯に緑色の瓶から琥珀色の液体をそろそろと注いでは口に運ぶ魔道師を見つけて声をかけた。

「魔道師様、お薬を飲んでるの？」

おや、と慌てて瓶を後ろに隠した魔道師は相手がステファンと分かり、ほっと瓶を机に戻した。

「ああ、ステファンか。いやいやこれはお酒だよ。戒律で飲酒自体を禁止されているわけでは無いがまあ、人に見られたくない姿だから。」この事は黙つておくれよ

魔道師にうん、とうなづくステファンは面白そうに見上げる。

「大人にはいろいろ秘密があるもんね」

「おや、良く知っているんだね」

まあね、と胸を張る少年。それを楽しそうに見ながら魔道師はなんの気なしに聞く。

それは本当に思いつきで。

話のとっかかりを見つけるような気持ちで。

「ステファン、きみが知っている大人の秘密って何かな？」

うーんと少し考えていた少年は、にこりと笑う。

「魔道師様、これはとつておきの秘密ですよ。ぼくの母さんの事です」

「そうかね、父さんに黙つて新しい服を作る布でもうそつ買ったのかな。それとも鍋をこがしてしまった？」

「違いますよ」

不服そうに少年は答える。

「そんな普通の事じゃないです。ぼくの母さんの名前の事です」

「名前？」

「はい、ぼくの母さんはエリナっていうんだけど、別の名前があるんです。秘密の名前。リティア・ミゼルっていうんですよ。素敵な名前でしょ」

本を広げて頭を上げずに言つた名前に、魔道師の持つたペンの動

きが止まる。

「今、リディア・ミゼルと言つたのかい？ ステファン」

その緊迫した調子の声に大きな椅子に埋もれるように座っていた少年が顔を上げる。

「はい、それが何か」

「きみはいくつになるのかな」

内心の動搖を抑えて聞く魔道師の心中など知らないステファンはにこりと笑つてあっさりと答える。

「七歳です。ぼくは父さんの本当の子じゃないんですって。でもぼくは父さんのことが大好きなんです」

「そうか、良いお父さんで良かつたね。ステファン、今日は悪いが用を思い出してね。明日またおいで」

「あ、はい魔道師様」

大人しく帰る少年の後姿を見送つて魔道師はしばらく考え込んでいたが、思いきつたように机から羊皮紙を取り出して印を組んだ。姿を鳩に変えた羊皮紙がボルチモア州城に向けて飛び立つて行った。

その一刻ほど後。

州宰補佐の魔道師が詰めている部屋の窓を叩く鳩のくちばしの音に、一人の魔道師が書類に向かっていた面を上げた。

窓を開けると鳩は、その手にふわりとのって一枚の紙に戻る。

「これは……」

読んだ魔道師は明らかに狼狽してきょろきょろと左右を見るとため息をついた。

「何であたしの所に知らせを持つてくるんだ。州宰のラジム様にでも知らせればいいのに」

ダニアンは不平を言いながらこれをどうするかと思案にくれる。州宰補佐としては、ラジムに渡すのが筋なのだが。廟から来た

手紙には穩便に済ませられないかとしたためられていた。

「仕方がない。ご本人に決めていただく」

廟内の金庫に保管されている竜印のペンダントを取り出してダニアンは印を組んだ。

『アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せ、サイトスに通せ』

ぱつかりと開いた竜門に滑り込むようにダニアンは消えた。

「おまえは？」

急に現れた魔道師に首を傾げながらガリオールは問い合わせる。問

い正してから覚えがあると頬の赤かつた魔道師を思い出した。

「ボルチモアの州宰代理だつたな」

妙におどおどしている割には手腕は確かに男だつた気がするが。「はい、ダニアンと申します。先ほど田舎の廟からリーディア様の消息について連絡がありました」

「何？」

立ち上がったガリオールが直ちに人払いをする。

「詳しく話せ、ダニアン」

「クロード様にお会いしどうぞいりますが」

ダニアンの言葉にガリオールの片眉がぴくりと上がる。

「クロード様は王の影になつたばかりでサイトスの事情にも慣れておられない。こんなことで煩わすこともあるまい。話す必要は無い」

「しかし、『自分のお子の事ですよ』

「子ども？」

ガリオールは思わず大声で聞き返してから、ゆっくりと椅子に座り直す。

「魔道師は妻帯しないし、女犯もしないといつのに子どもなど出来ようはずも無いではないか。ダニアン、ここでわたしに報告して全て忘れなさい」

きつぱりと言われてダニアンのわざやかな抵抗も終わる。
「わかりました。場所ですが……」

ガリオールと会つてがつくりと肩を落としながら竜門をくぐつた
ダニアンは竜道の途中で思いがけず声をかけられた。

「ねえ、ますです君。今日は何の用だったの？」

一緒にくぐつたわけでも無いのに人の竜道の中に入つてくる魔道
師がいるとは思つていなかつたダニアンは腰を抜かしそうになる。

竜道は使う魔道師一人一人の結界で分かれている。同じ場所に
竜門を開いても前を歩いている魔道師に会うことは無い。
人の竜道に勝手に入ることが出来るほどの魔道師などほんの一握
り、だ。

次の日、いつものよしに廟に出かけたステファンは初老の魔道師の横に、初めて見る魔道師がいるのに気付いて立ち止まつた。

「魔道師様、そちらはどなた様?」

「ああ、ステファン。このお方は……」

初老の魔道師の言葉をあつさり無視して若く、背の高い魔道師がステファンの腕を取つて引き寄せる。

「おまえ、ここからすぐに逃げなさい。家に帰つてはだめだよ。殺される」

驚くステファンにその魔道師は金の入つている袋を渡す。

「おまえはこのレイモンドール國の王の半身。魔道師の子どもなんだ。知られれば殺される。魔道師を避けて逃げる。おまえは父親、今はクロードと名乗つているがいすれは、コーラルの名を持つ魔道師に瓜二つなんだからね。母親はこのボルチモア州の州姫だ。いいかい? もう、家族の誰も生きてはいない。おまえ一人で行け」

魔道師の言葉にステファンは驚いて立ちすくむ。

小さいこどもに手短に話すには本当のことを言つしかない。 真綿でくるんだように言つことなど理解できないのだから。

灰色の皿をひそめてルークは手に持つたままの巾着を子どもの懷にねじ込む。

「さあ、早く行け」

その声に弾かれたようにステファンは走り出す。

「ジビもが居なくなつて、やつと時が戻つたように初老の魔道師はルークを見た。

「ルーク様、何といつ事を……」、これはサイトスに「」報告せねば

「え? 何の話かな。おまえがこの廟でクロードの子ジモを匿つて

いた、という事だけ？」

「そ、そんな」

ルークの言葉に初老の魔道師がわなわなと震え、膝に力が入らないのかその場にしゃがみ込む。

「今日、ステファンはここへ来なかつた。で、いいじゃない？ そ
うだろ？ 良い廟だねえ、ここ。小さいけど居心地が良い。おま
えも一緒に焼けちゃうのは嫌だろ？ わたしが本気だと思わなかつ
たらいけないから、おまえの腕を一本もらつていく」

腕に現れたレーン文字の後に恐ろしいほど

痛みの淵から戻つた魔道師の左手は、肩口から無くなつていた。

初めから無かつたように。

笑いながら次々と物騒な事を言つ上位の魔道師に、痛みの余韻に
震えながら初老の魔道師は首を縦にふることしかできない。

「わたしが来たことをバラしたら殺しちゃうからね。ではさよなら」

竜門が開いて不吉な姿は闇に消える。

しかし、いつまでもしゃがみ込む魔道師の体の震えは収まらない。

こんなに上位の魔道師と言つ者は恐ろしいのか。 人外の者、
という言葉がその魔道師の頭に浮かんだ。

ステファンは混乱する頭を抱えながら町を出ようと走り続ける。

「ぼくは殺されるの？ 何か悪いことをしてしまつたの？ 母
さんの言いつけを破つてしまつたから？ ぼくが母さんの秘密をし
やべつたから？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

泣きながらいつしか歩いていた彼は自分を呼ぶ声にぎくりと立ち
止まる。

「どうした？ ステファン」

涙の向こう側にいたのは自分の兄。

「お兄ちゃん、生きていたの？ 母さんは？ 父さんは？」

泣き顔を途端にほほえませて抱きついてきた弟に兄のヘンリーは驚く。

「一体何を言つてゐんだ？ おこらは父さんのお使いで隣町のトーナさん家に修理の出来た鍬を渡しに行って来たんだけど。父さんと母さんに何かあつたのか？」

兄の言葉を聞いてステファンの顔は見る間に曇る。

「じめん、兄ちゃん。ぼくのせいだ」

普段あまり泣き顔など見せない落ち着いた弟の取り乱す様子に、ヘンリーは悪い予感を感じた。

「どうこうことかもう一回言つてみろ、ステファン泣きじやぐる弟をあやしながら聞く話にヘンリーは信じられない」と、一度言つたが。

本当は自分のほうが泣きたかった。だが、目の前の弟は自分を頼つてゐる。

そう思つと涙が目の奥から前には出でいかなかつた。

「なあ、お金を貰つたって言つたよな。兄ちゃんに見せてみな」しゃくりあげながらステファンは、懐から魔道師に貰つた巾着袋を取り出して兄に見せた。

「こ、これは。これは大金だぞ」中をのぞいたヘンリーが呻くようつて言つ。

金貨が五枚に銀貨が十枚、銅貨が三十枚ほど。

魔道師は当座に使うなら銅貨や銀貨のほうがいいだろ?と氣をまわして入れてくれたらしい。

年端もいかない子どもが金貨を持つてゐるぐらい、不信なことはないのだから。金貨についてはゆつくりどう使うか、決めなくてはならない。

「今日は、近くの森で野宿だ。いいか、兄ちゃんがこつそつ家の様子を見てくるから待つてゐるんだぞ」

「兄ちゃん、行かないで」

すがる弟を押し留めてヘンリーは立ち上がる。まだ、本当に全般的に信じたわけじゃなかつた。自分の目で確かめたい。

まさか、そんな事があるなんてと心の端でヘンリーが頭を抱えてうずくまつてゐる。

弟の前では決して見せられない、本当の自分。

それを振り切るようにただ、走る。走つていれば最悪のことから逃れることができるといふかのようだ。

息が切れて心臓が左右に引き裂かれるような無茶な走り方でヘンリーは走っていたがその足が急に緩やかになる。

見知った風景に 恐くなつたのだ。

本当のことだつたら、どうしたらいい？

走るのを止めた途端に周りの状況がいつもと違うのに気づく。

大きくもない道いつぱいに何人もの人が右往左往している。

ヘンリーは自分の家のある通りの少し手前で走っている男たちの一人を捕まえた。

「何を急いでるんだ、おじさん」

「ああ？ この先の鍛冶屋が火事を出したらしい。気付いた時にはもう、誰も入れないくらいに燃えちまつたそうだ。類焼を防ぐ為に皆大騒ぎだ」

喚くように話す男は一息にしゃべるとそのまま走つて行つた。

大勢が走る中にぽつんと立つ少年。

「みな燃えてしまつた？ 嘘だ、父さんが火を自分で出すわけが無い」

ぐるりと来た道を引き返すヘンリーは何度も大声で叫んでいた。とても現場を見れなかつた。

それに 火をつけた奴がまだ残つてゐるかもしねりのだ。

「父さんはそんな事をしない！」

「父さんは絶対しない！」

「いいか、俺たちは火を日常に使つてゐるが、氣を抜いたらダメだぞ。もらい火で火事になることがあつても、うちからは絶対火事を出さないんだぞ」

父さんはいつもそう言つてゐた。火の始末もくどいくらいしていたんだ。

「父さん、母さん……」

家の方角から離れて行くほど、流れていく涙。そして 思い出す。

「……ステファン」

そうだ、ステファン。あいつは大丈夫だろ？

一人残してきた弟の事を思い出して、ヘンリーの涙が止まる。
あいつを守らなくては。

魔道師たちが狙っているのはステファンだ。
息もつかず、走りに走つて別れた場所を目指す。

「兄ちゃん」

森の大木の陰から飛び出す弟を抱きしめてヘンリーは心に誓う。
「こいつだけは失わない、と。

それから何年も一箇所に留まらない生活を送りながら、一人の兄
弟は成長する。

いつの間にか十年近くの月日が流れたある日。

「兄貴、ぼくやりたい事が出来たんだ」

そう切り出されたヘンリーは思いもしなかつた言葉を弟から聞く。
「魔道師から権力を取り返す、レジスタンス活動にぼくは加わる事
にした」

「ぼくが兄貴の活動に引っ張られたんじゃない。兄貴がぼくに力を
貸してくれたんだ」

ステファンは、振り払つように手を一度硬く閉じてから、話を終
えた。

「それでおまえ、コーラルを倒すことが出来るのか。自分の親だろ
困ったように問う、ウイリアムの言葉に浮かぶステファンの皮肉
っぽい笑み。

「コーラルはたぶん、自分に子どもがいるなんて知っちゃあいない
さ。ボルチモアでの出来事は若気のいたりでつい、やつてしまつた
事。今では消してしまいたい過去だろ？さ。勿論、ぼくだって奴と
再会して語り合おうなんて思つてやしない」

「ステファン」

「あいつのせいでお袋も親父も、もつと言えば兄貴もぼくも酷い目にあつたんだからな。ぼくの父は死んだ鍛冶屋のラッシュだ。悪いがぼくの行動の八割は私怨だ」

アリストローザの気遣うような呼びかけをすっぱりと切って、ステファンは苦々しく言うとハーコートを見る。

「だから、あなたもぼくを甥っ子のよつに見るなんて止めてくださいね」

「それをおまえが望むのなら」

ハーコートが言しながら起き上がるステファンに手を貸す。

「では、出発だな」

御者台に戻ったウイリアムがムチを振り上げた。

森林地帯のボルチモア州とモンゴード州の州境近くに向かつて馬車に向かう。

しばらく響くのは馬車の車輪が地面の朽木を轆轤しだく音だけ。

「なあ、コーラルがボルチモアにいた頃おまえは何していたんだ?」

ステファンの代わりに御者台に上がった中年の魔道師にウイリアムが話しかけた。

「そりゃあ、ボルチモアにおりましたよ」

「じゃあ、さつきの話も知っていたのか」

ウイリアムの問いに顔を向ける事もなく魔道師はそつけなく答える。

「あたしはその頃まだ二十代でしたよ」

「つてことは?」

「そんな大事な事を魔道師だからといつ理由で誰もが知っている訳はないと言つてているんです」

ダニアンの回りぐどい方に眉をひそめたウイリアムが田の端で見る隣の魔道師。

「そうだな、おまえにも若いときがあつたんだよな」

ウイリアムの言葉にダニアンは大いに憤慨していたが、自分がステファンが生まれた頃からボルチモア州の州宰補佐をしていた事など話すつもりは無かつた。

「あなたこそ、ボルチモアの州軍を統括しているトレーンス将軍の弟という立場でレジスタンス活動なんてどういつわけですか？」

「おれ？」

「そうですよ、あなたのことも謎ですよ」

「おれは不良息子だからなあ」

「そんな事は見れば分かりますよ。トレーンス将軍はとても正義感の強いりつぱな方です」

ダニアンの見事な言い切りつぱりにウイリアムはしうだよなあと笑つた。

それが問題なんだよな。

小さい頃から立派な兄と引き比べられていたウイリアムは自分でも安直だとは思いながらも親に反発した生き方しかできなかつた。何もかも腹立たしく厭わしい。

親に無理やり入れられた仕官学校もさぼりがちで、今日もお偉い方のご訪問があるとかでばたついている学校の建物を抜け出して敷地内の庭をぶらついていた。

「君、士官候補生は講堂に集まっているはずだけど」

声をかけてきた方へ目を向けると目の前にはまだ十代前半くらいに見える、貴族らしい身なりの良い少年が立つていた。

明るい金髪が朝の光を受けて金粉をあたりに振りまいているかに見える。

澄んだ青の目がウイリアムを真っ直ぐに見て、ウイリアムはぱつが悪くなつて目を逸らす。

「せつかくわたしが前の日にがんばつて書いた原稿を読むのだから君にも聞いてもらいたいな」

そして、さあと言つて差し出される手。

「あんたは？」

「わたしは、トラシュ・コイル・ヴァン・デリック。ボルチモア州の候子だよ」

言葉を失つてただ見返すウイリアムの手を掴むとトラシュはすたすたと講堂へ向かう。

「あの、おれ、いや、わたしはウイリアム・リード・ヴァン・レンスです」

「ウイリアムか、良い名前だ。じゃあ、挨拶もすんだことだし少し急いで」

一人の少年は手を繋いだまま、大急ぎで走り出す。

講堂に近づくと、一人で抜け出した候子に学校中が大騒ぎになっていた。

「トラシュ様！ 大丈夫でござりますか」

青い顔の従者と学校関係者が取り囲む中、一緒にいたウイリアムにも追求が始まる。

「おまえがトラシュ様を連れまわしていたのじゃないだろうな」「ゾーイ校長、違いますよ。わたしが彼を連れまわしていたんですね」「大人に囮まれて少しも臆すことなく、トラシュはにこやかに言ってウイリアムの手を取る。

「ウイリアム、悪かったね。つき合わせてしまって。また、学校を案内してくれ。今日は楽しかった」

「い、いや、その」

しじろもじろで返事も出来ないウイリアムは無事無罪放免となり、大人たちはトラシュを囮みながら講堂へ向かっていく。

それが、おれとトラシュの初めての出会いだった。

しつかりして。

礼儀正しくて。

性格が良くて。

そんな奴、いるのか？

「ははあ、そんな奴いるものか」

安酒の瓶を口から離してトラシュは斜面になつている誕生日に寝つこうがつて顔だけウイリアムに向ける。

「おい、おまえ十二歳じゃなかつたっけ？ つていうか、酒飲みます」

無理やりまた、口をつけている横の少年から酒瓶を奪つてウイリ

アムは自分が呷る。

「まずい、こんなのが飲むなよ。体壊すぞ」

ウイリアムの苦言に少年は大笑いする。

「何だよ、君が説教するなんて世も末だな。酒だと思つから不味いんだ。ぶつ飛べる薬だと思えば悪くない」

「おまえ、裏表ありすぎだよ。ついていけねえ」

自分より五、六歳は下のはずの少年はくくつと笑うと爽やかに見える笑顔を見せる。この笑顔に大人はこひりと騙されるんだよなあとウイリアムは呟く。

だいたい、今日はどんな作り話をでつちあげてここに来てるんだか。ため息まじりにもう一口酒を飲む。

やつぱり、不味い。

「ねえ、うちにまた、弟が出来たんだよ。良くやるよなあ、父上も」

「え？ 何人目だつけ」

「確か十八人目かな、いや十九人目かも。誰が誰だかもう分かんなくなつてるけど」

あつさりと言うわりにはトラシユの眉は大きく顰められていた。「やつぱり、嫌なもんかな。親父がいろんな女人の人と子どもを作るのつて」

「父上も嫌だけど、たいしたことじやないとが言いながら、影で妾姫を虐めてる母上のほうが嫌だな。女なんて大嫌いだ」

「ふうん」

品行方正な候子の仮面の下にある本当の感情を見せるトラシユに何も言わず、ウイリアムは酒瓶を渡す。

「まあ、飲め。一緒にぶつ飛ぼうぜ」

27・道を説く者

そのまま自分は軍人になるのかとウイリアムは思っていた。別に他にやりたいことがある訳でもない。

ところがこのボルチモア州の候子とひょんな事で知り合つてから何かが変わつてきていた。

士官学校を出た途端にトラシユ付きの従者の一人としてボルチモア州城に詰めることになる。

これには、今まで不詳の息子だと嘆いていた父親も母親も涙を流さんばかりに喜んだ。

彼としても窮屈な家から出られるのは大歓迎なのだが。そんな生活が何年か過ぎて。彼がトラシユの従者の中でも筆頭役になろうかという頃。

「今日はウイリアムだけ連れて行く」

トラシユは、周囲の反対を撥ね退けるとこりと笑つた。

しかし、ウイリアムを連れて外出する時は、トラシユの行き先はどんでも無いところばかりなのはいつもの事。

「今日はどこへ行くんだ？」

他の従者も無く、一人きりのときのわんざにな口でトラシユに聞く。

「今日か？ 今日は城下の外れ、バインツ地区に行こうと思つてゐる

「バインツ？」

何でまた、と驚いた顔のウイリアムに彼の主はきれいな笑顔を向ける。

「貧民窟がどういうものか、知つておくれるものこの州を治める者として必要だろ？」

「そうかな？」

「そうさ。じゃ、これに着替えよ。」

楽しそうに笑うとトラシユは着替えの服を指差した。

「何だこれ？」

「ばかだな、そんな上質の服なんか着て行つたら襲つてくださいと言つてるようなもんだぞ」

なんで候子がそんな事を知つてゐるんだ、といづウイリアムの疑惑の眼差しをけりと受け流してトラシユはさつたと着替え始めた。継ぎの当たつた服を着て顔を汚した一人は、バインツ地区の近くで馬を降りると付いて来た馬丁の男をそこに置いたまま歩き出す。

「ここに何があるんだ、トラシユ」

「ここには、ある人がいる」

「ある人？」

「会えば君も心酔すると思うよ、ウイル」

彼しか呼ばない愛称で呼ばれてくすぐつたがいがいつもするのはなぜだろうか。

汚水が雨の後のように所々溜まつてゐるような所をすいすいとトラシユは歩いて行く。

明らかに何度もここへ来ているのだ。

口止めされていたのだろうが、他の従者から報告が上がつてない事にウイリアムは警護のあり方に危惧を抱く。

こんなところで襲われでもしたら自分はトラシユを守れるのか。ウイリアムといえば、あまりの臭気に氣を取られてビニで曲がったのかも分からなくなつていたというのに。

打ち捨てられたような崩れかかった廟の中にトラシユは樂々と入つて行くのをウイリアムは見失わぬようじにぴつたりと付いて行く。通路の奥、おおげさな音を立てて開く扉の向こうに見える人影。

「今日は、導師様」

「おや、トラシユか。よく来たな

闇の暗さにやつと日が慣れてきたウイリアムの眸に映る年寄りの

男。

彼が今まで見た中で一番歳を取つてゐるのではないかとも思える姿。

顔の中にはそれこそ隙間を作つてはいけないかのようにある皺。弛んだ瞼に隠れるようにわずかに見えるやぶ睨みの目元。

白くて長い髪は蜘蛛の巣のように絡みつて背中を覆い、顎から伸びた髪は地面に届くかと思つほど。

「魔道師？」

彼のまとうている服はこの国の魔道師が着てゐる物と同じ様式。違うのは色なのだが。

青灰色のローブでは無い、黒っぽい緑色のローブ。

「おや、初顔じやな。わしは魔道師では無い。導師じや。道を説く者だよ、君」

「おやがれた声で楽しそうに話す老人が一人に座れと椅子を指差す。

「導師様 ですか？」

「さよう、君の名前は何といふのじや」

「ウイリアム・リード・ヴァン・トレーンスと言います」

「トレーンス、ほつ、州軍にその名の将校がいたな」

俗世に疎いような成りをしていながら、この老人はかなり詳しくこの州の内情を知つてゐるようだつた。それはトラシユからの情報だろうか。

「ウイリアム、君はこの国の有り様をどう思つてある？」

老人の問いかけにウイリアムは絶句する。

この国の有り様？ 何がおかしいのか、どう思つとは何を指しているのか。

「意味がわかりません。この国はおかしいのですか？」

「ふむ、分からんのも無理はないわな。この国は他の地域とは隔絶されているのだから」

老人は顎鬚をさすりながら仙人のごとく笑う。

「では、質問を変えよう。この国を動かしているのは誰かな」

「それなら分かります。レイモンドール国王、コーラル陛下です」胸を張つて答えたウイリアムに隣にいたトラシユのばかにした声が被さる。

「国Hだつてえ、おい、ウイル。おまえ、物を知らないにも程があるよ」「みるよ

「何がおかしいって言つんだ？」

わざかに見上げてこむトラシコの方がよほど年上のような、自分がまだ十やそこいらのがきみたいだと感じられてウイリアムは慌てて尋ねる。

「Hのボルチモア州の州府を動かしているのは州率のラジムや。ラジムが指示を仰ぐのは父上では無く、サイトスの魔道師府長官ガリオールだ」

吐き捨てるように語氣荒く言つトラシコは挑むようにウイリアムを見上げた。

「そして、それはうつに限つたことじやない。Hの国に眞の自治を成し遂げてゐる州などあつはしない。Hの国は魔道師に操られてゐる」

「だが、魔道師の発言力が強くても理に適つことならいいのでは？要はHの国が發展し、国民が潤えれば誰が支配してゐるのかなんて関係ない」

きつぱりとHウイリアムに導師が笑い含みでうなづく。

「その通りじや、誰がやつていいよつとな。だが、そうでなかつたら？　おまえはどうする？」

誰が支配しても、のぐだりでトラシコは氣分を害したように眉根を寄せている。彼にとつては誰でもいいなどとは思えないらしい。まあ、Hの州の候子では仕方ないか。

「違うと言つのですか、導師様」

「違うな」

あつさつと返事を返すと導師は大げさに腕を組んで話し出す。

「Hの国を動かしている魔道師が目指しているのは、魔道教による永年に渡る支配と魔道師府の繁栄。ベオーク自治国への影響を受けない、レイモンドール国独自の魔道教を守る事、これに取組む」

「ベオーク自治国つて？」

聞いた事の無い国の名前をウイリアムが鸚鵡返しに聞く。
「ベオーク自治国か。ふむ、そこから説明が要るとはの。まあ、い
い」

導師はまた、ゆつくつと顎鬚を曳かる。

大陸の西にある大国、ハオタイ。ijiの高地にある小さな市くらいの自治国。ijiがベオーク自治国だ。

その国には何の産業も無く、農業が栄えているわけでも無い。といつてここが、貧しい国かというとそれは裏切られるほど潤沢な資産を持っているのだ。

それはなぜか。

その国は魔道師たちだけの国だ。そこにいる使用人以外は魔道師。その国はレイモンドール以外の国にいる全ての魔道師を影響下に置いている。

魔道師たちを各国に送り、助言をし、允許をとえ寄進などを受ける。

各国の王はベオーク自治国の教皇の神託なしでは正等と見なされないほど頼っている。

「そのベオーク自治国の影響を受けず、独自の魔道教支配をしている国。それがレイモンドール国なんじゃ」

「なんでそんな事が……」

「出来るのか？ どうのか」

ふむふむと出来の良い生徒に笑顔を見せて老人は続ける。

「ijiの国に張つていい結界じゃよ。恐ろしく強くて禍々しいがな」

この結界？

生まれた時からいつもある結界などウイリアムにとつては日常だ。海の向こうは見えないのが普通。それが普通ではないと。

「いくら、魔道師がいようと他の国は国主が決定権を握っている。それがどうじや、

この国は体裁は王国だが実質は魔道教国。本当の王は魔道師の祖、

イーヴアルアイ

「イーヴアルアイ？」

「そう、齡五百年以上生きている人外の者よ」

五百年以上と聞いてウイリアムは目の前の老人を啞然と見つめた。

そんな事があるはずが無いなどとは思わないが。

レイモンドールに住む者なら、上位の魔道師が人の寿命を越えて生きることくらい知つていいからだ。

しかし、今までその上位の魔道師など自分の州の州宰、ラジムしか見たことが無かつた。

そのラジムでさえ、先王の半身だつたため確か、七十台に入るかどうかくらいだ。

人としての寿命を遙かに越えているわけではない。しかも見た目は三十代初めほど。彼はその歳から何年経つても外見は変わらないのだ。

そのイーヴァルアイなる老魔道師にしても見た目は若いのだろうか、とそつちの方へ思いが行つていたウイリアムを隣のトラシューがつづく。

「おい、ウィル。何、呆けつとしてる?」

「あ? え? すみません、導師様」

「イーヴァルアイに興味があるのかね、ウイリアム」

老人は目を細めてニヤリと笑つた。その笑い方があまりに今までの老人の所作に似合わなかつた為に、ウイリアムの背中がぞわりとそそけ立つ。

口の端を片方だけ上げて笑う老人は本当に達觀した者なんだろう。しかし、その笑いも時の間に仕舞いこまれて、ウイリアムの心の隅に小さなしこりを残すだけになる。

だが、もつと氣をつけていたなら、トラシューの運命は変わつていたのかもしぬなかつた。

その後、何年かの月日が流れる間に、ますますトラシューは導師の教えに傾倒していく。

それをわずかに恐れながらウイリアムはどうする事も出来なかつ

た。 何がいけないのか。

何が心配なのかが言葉に出来ない。しかし、火事を知らせるような鐘の音は、あの日からずっと鳴り響いている。

あの、導師の笑い顔を見た時から。

ある日の午後意図していたわけでもないのに、自分の父親ボルチモア州候、

ドミニクに呼び出されたトラシュは興奮を抑えきれない様子で部屋に帰つてくる。

「なあ、ウイル！ 父上の事をわたしは見誤つていたようだよ」

大声でそれだけ言うとウイリアムに抱きつく。

抱きつかれたウイリアムがトラシュを引き剥がして椅子に座らせる。

「どういう事が言わないとおれにはさっぱりだ」

「ああ、そうそう。そうだよな」

言つた途端にまた立ち上がるとトラシュが抱きついてきた。

呆れながらウイリアムは今度は大人しくしがみ付かれたままの姿勢でトラシュの話を待つ。

「父上は、この国の有様を憂いておられて、わたしに魔道師をまつりごとから排す手伝いをして欲しいと仰つたんだ」

「ドミニク様が？」

あの方がそんな事を言つるのだろうか。ご正道うんぬんより、自

州の州庫がどれだけ潤うかの方が大事……と思つていた。

それが州候として悪いわけでもない。単に私服を肥やしているわけでもない。 次々と新しい施策を打ち出して、

あつという間にこの北部の何の特徴もない州を 豊かで住み易い州にしていったのだから。

自分の益になる事に貪欲なお方なのだ。 自分を犠牲にしてこの国を作りえるなどと思うとは天地がひっくり返つても無いと。

ウイリアムが思うようにはトラシュは思わなかつたらしいが。

ひねくれているように見えてトラシュはとても素直で理想にもえ

ている。父親の言葉に嬉しくて心が通じたと喜んでいる。

それに水を差したくない。

顔を輝かせてトライショウがウイリアムを見る。

「ウイル、わたしはおまえがレジスタンス活動を指揮する中心人物になつて欲しい。 そう考へてゐるんだ。やつてくれるだろ?」

何でその時、おれは断らなかつたんだろう?」

本当におまえの父親に裏は無いのか?

何でそう、言つてやらなかつたんだろう?

何でおまえの側を離れたくないと。 嫌な予感がするんだと言わなかつたんだろう?

だけど その時のトライショウはとても。 とても幸せそつた。

「それでトラシユ様は今はどうしているかご存知ですか？　あの混乱の時から忽然と姿をお見かけしませんが」

魔道師の問いかけに深刻な沈黙でウイリアムが応える。

「ウイリアム？」

「州城の裏手にあいつと仲間のひとり、トーマスの変わり果てた姿が見つかつたらしい。腐敗が進んでいて、だいぶ前に殺されたんだろう。おれたちがトラシユだと思っていた者は誰かが化けていたようだ」

ウイリアムの固く握り締めた拳から血が流れる。それは彼の涙なのか。それともトラシユの物か　トラシユ、おまえは最後に一体誰の顔を見たんだ。おまえを無残に殺した奴は一体誰なんだ？　心あたりなら　ある。

「そいつはきっとイーヴァルアイだ」

口の中の咳きは隣の魔道師には聞こえなかつた。

そう、思つたのは。

四年ほど前のモンド州、州公の長男ダリウスの成人のお祝いに州候代理として忙しい父に代わりトラシユが赴むく。その時自分も一緒に行つたのだ。従者として行動するのはそれが最後だつた。

その城内でトラシユは会つてしまつたのだ。

悪魔と。

その悪魔は隣の公子の弟に成りすましていた。

おれは不覚にもその時、美しいと、まるで氷で出来た花のようだと思つたんだ。

「ウィル、わたしは理想の人人に会つたのかもしれないよ」
トラシユの言葉にうなずきそうになつてウイリアムは、はつと我に返る。

「おい、あいつはモンド州の公子だぞ。男なんだぞ」

「ウイル、わたしが女性が嫌いな事くらい知っているだろ？」「

笑いながら何を言つてるんだと言つ自分の主に、困つた顔を作つ

て見せるが。

「話をしてくれる、おまえも心配ならつておいで」

「おい、待てよ」

ウイリアムは、ため息をつきながらトラシュの後を追う。自分の兄の横で愛想笑いをしているのは、亞麻色の髪を黒いリボンで結んで片側に垂らしている折れそうな細い若者。リボンと同じ黒い服。地味につくつているのにそれが返つて彼の美貌を際立たせているのだが。

「ダリウス殿、そちらの方は弟君とお見受けしますが紹介していましただけですか？」

「ああ、すまない。これはすぐ下の弟でコリウスといつ」

「コリウス、こちらは隣のボルチモア州の候子でこの度、州候代理でお祝いに来ていただいたトラシュ殿だ」

「はじめまして、コリウス殿。わたしはトラシュ・『イル・ヴァン・ドミニクです。よろしく』

コリウスが、ちらりと自分の兄に目をやると、ダリウスがさあ、と背中を押す。その様子にわずかに嫉妬してトラシュは伸ばされかけた手を掴んで引き寄せる。

「わたしはコリウス・ヴァン・ハーロートで　　あつ」

挨拶の言葉はコリウスがトラシュに強引に手を引かれてその腕の中にすっぽり入つてしまつたことで途切れてしまう。

「どうした？　コリウス」

心配そうに手を出そうとするダリウスに、コリウスがさつとトラシュの手を振り払つて体を戻す。

「いえ、失礼しました。躓いて倒れそつになつたのでトラシュ様が助けてくれたんですよ」

「そんなんふうには見えなかつたが」

憮然とするダリウスの様子に、後ろに控えていたウイリアムは彼が自分の主と同じ気持ちを弟に抱いているのかと気付く。

そして……見てしまったのだ。 その時。

あの笑いを。

にらみ合つダリウスとトラシュを見ながら浮かべていたヨリウスの表情を。

あれは、同じだった。

口の端を片側だけ上げてにやりとした、笑い。

導師と名乗つた老人と同じだったのだ。

これはいけないと注意したかった。だが、なんと言えばいいのか。

そして……あの悪魔は……ヨリウスと名乗つていた魔道師が、きっとトラシュを殺したのに決まっている。

おれの主を。おれの大事な親友を。

「おれは魔道師に支配された国なんか許せない、イーヴァルアイもその僕であるコーラルも許せない、絶対」

ウイリアムの低い呟きに魔道師はわずかに目を動かしただけで何も反応はしなかつた。

イーヴァルアイにそつくりな兄がいたことなど誰も知らない。

それは、ヨリウスではなく、バサラだと知っている人物は二人とも今は異国地にいる。

馬車はモンド州とボルチモア州の州境沿いの深い渓谷に入る。モンド州、ハーロート山脈に隣接する州境側はわずかな足場を残して絶壁に近い、刀で削いだような巨岩が深い谷へとそのまま落ち込んでいる。その為、この辺は関所も何も置かれてはいない。下に目を向けると深い谷底から濃い霧が湧き上がりて命の危険を侵して下を覗こうとしても見えはしないのだが。

そこへ馬車は止まった。

御者台から降りた魔道師が手に持った小刀で複雑な魔方陣を岩の上に描いていく。

その小刀には呪がかけられているのだらう。魔道師が軽く当てるだけで岩の上に線が引かれていく。

する事も無く他の者はその様子をながめていた。

「はい、出来ましたよ。こちらへ来てください」

その声にステファンが馬車から馬を放して自由にして、ウイリアムがアリストローザとハーロートと共に馬車を崖から落とす。

反響するおおきな物音も飲み込んでしまう深い深い谷。

魔方陣の中に入つて目を閉じた途端に始まる呪文。恐ろしい力で外に引っ張られそうになりながら耐える時間。長いやうで終わつてみるといくらも経つてはいない。

目を開けた目前に広がる風景はさつきと少しも変わってないかのようだ。しかし、さつきとは逆に深い谷があることに気付いて、アリストローザはほつと胸を撫で下ろした。

「ここで暫く待ちましょ。使い魔を放ちましたからじき、お迎えがまいります」

ダニアンはやつぱりとやつぱりと平らな岩を見つけて座り込む。

「ハーコート公様、こちらにお座りください」

アリストローザが自分のマントを脱いで岩の上に置こうとするのを

ハーコートが遮つて自分のマントを敷いた。

「アリストローザ、座りなさい。わたしは年寄りだがまだまだ男として格好を付けさせて欲しい」

「では、一緒に座りましょう」

軽く背中をつき合わすように座つたためにアリストローザに大きくて暖かい背中の感触が伝わる。

ああ、お父様。お父様はこのお方みたいに出来た方じや無かつたけど。それでもやつぱりアリストローザには大好きな父親だったのだ。

「どうした？」

「少し体を預けてもいいですか、ハーコート公様？」

「構わんが」

ハーコートの了承の返事の後に彼の背中にかかる重み。女の身で疲れているのだと解放して彼は体をすらして自分の背中が彼女の背中とぴつたりと合わさるようにしてやる。

「少し、休みなさい」

自分の末娘の事を思い出して、ハーコートは随分と彼らに会つて無いことに気付く。

三年前の出来事から大きく変わつていつたものだ。自分もこの国も。

ダリウスの事が無かつたら自分はクライブ陛下に最後まで仕えようと思っていたのだ。

自分の弟、前王と同じように優しく素直なクライブが心配で。

今度は、離れまいと。疎まれてもどうなつても自分からはサイトスから出ないと決めていたのに。

魔道師のコーラルに宰相の座を奪われても、それでもいいと思つていたのに。

こんな事になるとは。

彼は、陛下は大丈夫なのだろうか。

今越えたばかりの谷の向こう、サイトスに続く道を。ハーコート

はいつまでも見つめていた。

その半刻ほど後、馬の蹄と馬車の車輪の音が聞こえて。

「父上！ 父上！」

聞き知った息子の声にハーロートは顔を反対側に移す。

その声にぐつすりと寝込んでいたアリストローザが目を覚ました。

「あ、ハーロート公様。わたしたら、申し訳ありません」

「いや、こんなおじさんの背中だつたらいつでも貸すよ」

振り返ったハーロートが手を貸してアリストローザを立ち上がらせる。

「父上、ご無事で良かった」

「ダリウス、おまえが迎えにくるとは。まったく自分の立場をまったく理解しておらんようだな」

小言を言いながらも顔に浮かぶのは満面の笑み。

対するダリウスもこどものように父親に抱きつく。

「わたしは心配で、心配で。本当に良かつた」

自分よりわずかに高い息子の頭をよしよしと撫でてその後。

「挨拶は後だ。ここを早く出発しよう」

ハーロートの声を合図に馬車はゴート山脈に入つて行く。
モンド州ゴート山脈は三年前までこの国の魔道教の総本山だった。広大な山脈のあちらこちらに残るうち捨てられた廟。

この最奥にあるレイモンドール国一、険しく高い標高を持つハンゲル山に母廟がある。長大な巨岩を彫りぬいた天に届くかと思われるほど大きな廟。

五百年以上前、そこでレイモンドール国の創成の王、ヴァイロンが一人の魔道師と契約をした。

そこから始まった魔道で守られた国の歴史も今は昔。

鬱蒼と茂る緑の中を走る馬車から外を眺めてアリストローザは昔を懐かしむ温い思い出の中につかの間浸つていた。

「クライブ陛下、『乱心』

「まさか」

「夜な夜な大声で怒鳴りながら城中を歩き回っているらしい」

「毎日、気に入らない従者や女官の首を刎ねているらしい」

「ご公務は宰相のコーラル様に任せきりだそうだ」

「やっぱりまだ子どもだったからな。飽きてしまわれたのではない
か」

「こうなつたら王位の移譲も考えなくては」

「このところ、繰り返される噂。」

暫く前から朝議にも公の会議にもまったく顔をださなくなつてい
る王への勝手な憶測がまことしやかに流れていった。

王は病で危篤状態である。あるいは王である事に飽きて離宮に
移つて遊びほうけている。

または、王の重責に耐えられず、精神を病んでしまつた等等。
いずれにしても宰相のコーラルは否定しているが。

「クライブ陛下はまだお若いのだ。長い目で見てもらわなくては。
そのためにわたしがいるのだ。わたしはクライブ陛下の血に繋がる
者として誠心誠意お勧めする所存ですから」

コーラルの言葉に周りの高級官吏や大臣も口をつぐむ。
そして皆の頭に刷り込まれる事実。

そうだ、宰相コーラルは王たる資格を持つてはいるのだ　　という
ことを。

少しづつ、少しづつだ。ようやく自分にも運が向いて来た
とコーラルは胸の内で笑う。今までわたしは我慢しちゃひだつた
のだから。

ゆづくづく、焦らずゆづくづくでいい。誰も邪魔をする者などいな
い。

さきほど、待ち焦がれていた報告が届いたのだ。ボルチモア州内で元宰相の我が兄、ハーネート公爵が闇討ちにあつた。

その場所にマルトしかいなかつたら、腹を抱えて大笑いをしたり。今まで何かと反論し、意見して譲らなかつた兄。

自分と血が繋がつているなどと思った事など無かつた。彼にてて血の繋がりなど何の価値も無い。

王になる為にいるのは前王の血、その子どものクライブとの繋がりだけだ。

それも王になるためだけに必要なだけ……の。

「それは真の知らせなのか。なんということだ。この事はしばらく口外してはならん。急ぎ、モンド州だけに連絡を取りなさい。兄上が……お亡くなりになるなどと」

がつくりと崩れ落ちるコーラルをまわりの官吏が慌てて支える。

「コーラル様、しつかりなさつてください」

「早くコーラル様を寝室へお連れして」

宰相付きの執政官が大声で命を下す。その騒ぎはいくらの日にちも経たない間にサイトス中に広まる。人の口に口は立てられなさい。

コーラルは自分の演技がサイトスの王城に起こした波紋の広がりに満足していた。

さて、そろそろ最後の仕上げに取り掛からねば。

「ここは、どこだつたろうか。

そして自分は何だつたろうか。

寝台に横になつたまま、境界のあいまいなはつきりしない世界で、ただ一人の住人である少年は自問する。

まだ幼い、というには大人だが、成人というにはまだ数年待たなくてはならない。

そんな外見の少年の目は開いていた。が、しかしその目はぼんやりと天井に向いてはいたがそこを見ているわけでは無かつた。

現実の世界から逃げて、逃げて、逃げて。

その終着点がこの何ともはつきりしない空間。何があるわけでも無いが、心を乱される何かも、無い。

だから。ずっとここにいたい。 そうだ、ここがわたしの居場所なのだ。

部屋に満ちる香の匂い。 壁には隙間がないほどの呪符が貼られている。

真ん中に置かれている寝台の下には大きな魔方陣が描かれていた。その部屋の外で先ほどから行ったり来たりしている、密かな足音。充分躊躇ったのちに手が伸ばされる、扉の取っ手。

「陛下、あの、お食事を」

いくら食欲が無いと聞いていても、国王陛下が食事を取らなくなつてもう四日になる。誰とも会いたくないと仰つているとはい、放つておいていいのか。

女官のサリアは気になつてここへ来てこの数日、扉の前でうひうひとしていたのだ。だが、もう限界だ。一目、陛下のこ様子を見るだけ。見つかって怒られてしまつのは覚悟の上と思い切つて扉を開けた。

「こ、これは？」

内部の様子に慌てて扉を閉めると逃げるよつにサリアは走り出す。誰かに、伝えなくては。陛下が大変な事に。

誰に言えば良いのか？ マルト様？

「いえ、それはダメだわ」

マルト様はこの事を知つてゐるのだ。いや、彼こそが国王陛下にあんな恐ろしい事をしてゐる首謀者の一人かもしれないのだから。どうしたらいいの？

サリアは震える体でただ、遠くへ行くことしか考えられなかつた。

「どうした？」

ただならぬ女官の様子に気づいた男が女官の腕を掴んだ。

「お、お助けて下さい。わたしは何も見ておりません」

「何？ おまえ何を見たのだ？」

うかつに口に出した自分自身に驚いてその女官は硬直して腕を掴む男を見上げた。

国軍、左軍將軍レミントン。彼は宰相であるゴーラルとそりが合わず、何ヶ月も南であった騒乱を収めるためにサイトスを留守にしていた。

「陛下の『様子が』

「何？ 陛下がどうされたのだ」

レミントンはすっかり怯えきった女官を宥めずかしながら自分の居室に迎え入れると根気良くな話しを聞きだした。

「やはり、あの魔道師は良からぬ事を企んでいたのだな。サリア、わたしを陛下が軟禁されている部屋に案内しなさい。ガイダス、おまえは何人か兵を密かに配して速やかに陛下の御身をサイトスからお連れするのだ」

きびきびと命を出しながらレミントンは歩き出す。それにしても従者として付いていたはずの自分の息子らは何をしていたのだ？ 彼の息子をはじめ、新しく三年前に従者となつた若者の誰一人として生きていなき事をこの後彼は知ることになる。

「陛下、何でこんなこと……」

絶句しながらも部屋に入つたレミントンは配下のガイダスら数人の兵士にぐつたりとして反応の無い少年を抱き渡す。

その彼らの後ろで聞こえる扉の閉まる音。

ぎくりと振り返つた彼の前にいるのはマルトといつ官服の男。

「見られましたか、将軍」

「おまえ確かに還俗した魔道師だつたな。」「一ラルの手の者か」「腰から抜いた剣を構える男にマルトは驚く素振りも無い。

「知つていらつしやるんなら、話が早いですね。そうですよ、わたしは今でも魔道師なんですよ、将軍」「官服の男は印を組む。

『縛せよ』

レミントン将軍はそのまま髪の一本も動かせない。じわじと浮

かぶ額の汗。

もう少し手勢を残しておくべきだったのか。いや、それより陛下をここから出さねば。

陛下が無事、ここから出られるなら自分は喜んでこの身を差し出そう。

そんなレミントンの気持ちを逆なでする目の前の男。

「良いことを教えて差し上げましょう。あなたの息子も他の従者も皆、あの世です。ああ、でも大丈夫。あなたもすぐ追いつきますよ。何を気になさつておられるんです？ そうか、陛下を連れた部下の事ですね。それならそこの寝台の脇に倒れていますよ」

大きく見開かれる目。開かない口から漏れる嗚咽。

「まあ、陛下を拉致して何をしようとしたのか。聞いたとしても答えないのでしょうねえ。わたしが体を自由に出来る呪文を会得

していたら良かつたんでしょうが。今更ですかね。仕方ありません」とうとうとマルトが唱える呪文が終わる。と同時にレミントンの心臓が悲鳴をあげて彼は開かない口から泡を吹いて白目を向く。そして 訪れる静寂。

『解』

印を切つて、どさりと倒れる音を氣にする事も無く。男は部屋を出て廊下を見回す。

誰もいないうだ。そう、確信してにまつと笑う。

「コーラル様にすぐご報告せねば」

そして、こここの死体も誰にも見つからないうちに処理しなくては。

「何？ クライブ様が連れ去られようとした？ レミントンがかマルトの言葉に苦虫を噛んだような顔を見せる魔道師。もう、自分の邪魔をする者などいないと思つていたが。

「それで殺してしまったのか」

「はい、申し訳ありません。口を割らせる術などわたしは使えませんので」

マルトが言つその言葉にて、卑屈なものを感じてコーラルは片眉を上げた。

この者を使つてゐるのは、この男の言つとおり、術の巧みさゆえではない。

このマルトといつ男は魔道師庁長官であつた、ガリオールの側つきだつたからだ。コーラルはガリオールに心頭していた。

いつも冷静で何事もきちんとして肅々と物事を進めていくその姿に憧れをいだいて。

彼に認められたいと願い、自分の半身が亡くなつて正式に魔道師庁に下るのを楽しみにしていたのに。

だが、彼はもういない。

一方、マルトの方もコーラルに仕えているのはガリオール恋しさ

だつた。

十年というものの、誠心誠意仕えていつかガリオールによつて竜印を刻印されるのを心待ちにしていたのだ。もつと早く竜印を頂きたかったのに。

そう、思つた途端思い出す、嫌な記憶。

それはマルトがガリオールに仕えて九年経った頃。ガリオールの執務室にふらつと現れたのは、ガリオールと同期の魔道師。

魔道教の本山であるモンド州、ゴート山脈に散らばる廟を統べる廟長ルーク。

ガリオールとほぼ同じ時期に魔道師になつて、同じ時期に主に竜印を頂いた者。そして齡四百年以上を生きているレイモンドール最古参の魔道師の一人。

「ガリオール、お久しぶり。ちょっと遊びに来たよ」

ルークほどの高位の魔道師が何で用も無いのにこう、度々一人きりで遊びに来たなどとサイトスの王城にやつてくるのか。

控えているマルトはやれやれと自分の額に手をやるガリオールをちらりと見る。ガリオール様もやつぱりそう、お考えなのだ。

そう、思つて彼を見ると。

「ルーク、久しぶりなんかじゃないだろう? ゴートの廟に主があられないからといって君が遊んでいる暇は無いはずだが」

小言を言つているが、今まで渋面を崩さず仕事をしていた彼の顔に浮かんでいるのは軽やかな笑顔。

「ふふん、丁度、わたしに会いたい頃だろうかなあと思つてね。お茶にしたら? ガリオール?」

ガリオールが手に持つていた書類を取り上げて無造作に机に放るとルークは勝手にガリオールの正面に椅子を引きずつて座る。

「ねえ、君。お茶二つお願ひね」

ルークはそう言つと両肘を机についてその上に顎をのせてガリオールに向く。

「で、何かあるんだろ? 早く言え。灰色頭、わたしは忙しいんだからな」

ガリオールが彼にしか使わない親しげでやや乱暴な言葉を使う。

「灰色頭つて…… そのまんまじやないか。もつとすてきな愛称をつけて欲しいなあ。例えば可愛いルーカスちゃん、とかさ」

「なんで、おまえの事を可愛いなんて言わなきやならないんだ。思つてもいない事を言う義理は無いだろ。ばかルーカス」

「酷いな。それ言われるくらいならルークのままでいいかも。それよりさあ、来年の竜印を授ける魔道師の中にあの子がいたからさ」

「あの子？」

お茶を入れようとしたマルトの手が止まる。自分が来年こそはその中に入つているのだろうか。 どきどきと胸を高鳴らせながら用意を続ける。

「あの、ボルチモアの（ますですの子）だよ。確かダニアン」

「ああ、わたしの一存で入れた。あれの術は半身出身の魔道師より頭一つ抜きん出でているからな」

ガリオールの言葉に慌てて取り落としそうになつた茶器を盆の上に戻す。 来年は確か、五人ほどしか竜印を受ける者はいなはずだ。

そのうち、四人ほどは名前の知れた術士でほぼ確実と魔道師庁内で噂されていた者たちだつた。

あとの一人、それが自分ではないかと今の今まで思つていたのに。ダニアン？ そんな名前聞いた事がない。 しかもルークが名指しで確認しにくるとは。

「どうだらうかとさつきボルチモアに行つてきただけどさ。あの子つたらそんな滅相も無いつて泣きそうだつたよ。竜印なんて要らないつて感じだつたけど。外してやつたら？」

「本人の意見など関係無い。実力のある者にそれ相等の仕事を与える。そのための竜印なのだからな。あいつはこの先、使える魔道師になる」

ガリオールはため息をついて目の前の魔道師の腕を払う。

「ルーク、その子どもっぽい仕草をやめる。おまえはまた、前の話

を蒸し返すのか

「その通り、嫌だというのに竜印を刻印するなんてわたしは反対だよ。あの子は人として死んでいく方を選んだ。で、いいじゃない、ガリオール」

「じゃあ、わたしに。このわたしに竜印を下さいませ。ガリオール

様」

思わず声高に一人の会話に割り込んでマルトは期待の籠った目でガリオールを見た。

その声に一人は驚いて目を合わす。

「この子誰？」

「マルトだ。雑用を任せている」

ルークに簡単に返した後に続くのは厳しい叱責。

「私達の話に聞き耳を立てるとはどういう事か。竜印刻印の大事におまえが口出しする事は許されない」

「あ、えっと誰だけ、君、お茶早くしてね」

いつも側に居るために気安くし過ぎた事とガリオールの自分に対する評価の低さにマルトは茫然自失に陥る。

そして、あの子と呼ばれる魔道師の存在。魔道師の頂点にいる

二人に認められているくせに竜印を拒むなんて。

どんな子ども……若者？ どちらにしても絶対許されるものではない。

マルトは唇を噛んだ。

その魔道師が禿げかかってしょぼくれた中年の魔道師だとわかつたのは次の年だった。そして幸か不幸か、彼に竜印は授けられなかつた。

それは主が亡くなつてこの国の結界が消え、竜印を受けていた魔道師はまだ人としての寿命を残していたコーラル以外は消えてしまつたからなのだが。

自分が竜印を授かる事も最早無い。 気を取り直してマルトは今主人の言葉に注意を戻す。

「それはそうと陛下の御身を不埒な輩からお守りしなくてはならない。 陛下には王位の移譲の書類にサイン頂き、指輪をお渡し頂いた後、地下宮にお移り頂く」

「地下宮ですか」

そうだ、とうなづいてコーラルは重々しい顔を作つてみせる。

「サイトスで警備が一番厳重な場所だからな。明日、大臣級の貴族立会いの下クライブ陛下の御様子を見てもらひ。そして」

そこまで言つてもう我慢が出来なかつたのか、コーラルは笑い声で続ける。

「王位をわたしに移譲するための会議を開催する」

その時、上手くやつて国務大臣に口火を切らせよう。 正式な戴冠式は後回しだな。

さて、レミントン将軍にはたつぱりと泥を被つてもらつ事としよう。

うれしそうなコーラルの顔にマルトはこつそり鼻を鳴らす。 わたしの主人としてはこの男は役不足だが仕方が無い。

この主人には人を惹き付ける魅力に乏しい。 それは権力にあまりにも執着している様が浅ましいと感じられるせいか。

ガリオールやルークなどに感じられた超然とした感じ。 それは人としての寿命を越えて生きてきた者にしか無いものなのか。 所詮、人は自分の欲望に必死で喰らい付こうとする者なのだ。 それは、血の貴さとは関係無い。

しかし、もう失つてしまつたものをいつまでも欲しがつていても仕方ない。短い人としての一生を送るしか無くなつた今は自分も貪欲に生きていくしかないのだ。

マルトは魔道師の復権など頭から飛んでいるらしさ自分の主人を冷めた目で追いかがり思つた。

「陛下、なんという……お姿に」

国務大臣が呻くように呟く。

「ここに」と笑つて「この國の國王は誰の言葉も聞こえてはいな

い。
「今、ここでサインをなさつたとしても、それが陛下のお心だとはわからぬのでは？」

財務長官がクラブにペンを持たせようとする国務大臣に向かって疑問を呈す。

「ですが、このままクラブ陛下に王の重責を果たすことが出来る」とお思いですか。陛下のお血筋で残つてゐるのはコーラル様だけです」

「そう、だつた」

部屋にいる者たちは一様に黙り込む。先ほど、元宰相であつたハーラート公爵の死が公式に伝えられたばかりだつた。

「コーラル様、王への就任お願いいたします。そのためには恐れ多い事ながら還俗してもらわなくてはなりません」

その言葉にマルトははつとコーラルを見やる。それに対し、コーラルは表情を変えずに応える。

「このような事になり、わたしが王位に就くことは異存がないが。わたしが還俗するのは少し待つて欲しい」

「それはどういう？」

柔らかな笑顔を向けてコーラルは続ける。

「わたしには血を分けた息子がいる」

一瞬、皆の顔にのぼる疑問。

「その者に後を継がせることにするため、還俗は必要ないと思うが。その所在がわからないのだよ」

「コーラル様、それはどういう事なのか。」（）説明を

思わず、口を出したマルトにきつい視線を送った後、コーラルは書類に手を支えられて自分が何をしているのかも分からぬままサンをしている少年に目を移した。

「わたしは二十四歳の時に一時、魔道師の籍を離れてボルチモア州で普通の生活をしていたことがあるのです」

「コーラルはまったく普通にその事を話し出す。

「勿論、これは異例の事ですが。ご存命だったルーク様が王に仕えるには魔道師以外の生活も知つておくべきだと仰られたのです。そこでそここの州姫と結ばれました。その時の子どもです。姫は残念な事に亡くなってしまったのですが

なるほどどうなづく人々。

「それは本当に良かつた。では、すぐにお子様の探索にからねば「皆が許してくれるならそうしたいが

「勿論でござります」

昔のボルチモアの一件を知っているものなどここにはいない。

眞実に少しづつの嘘。

たいていはこれで嘘騙されるのだ。コーラルは口の端をにまりと上げた。

忘れていたわけではないが、自分の息子を本腰で捜さねばならぬいだろ。いや、もし見つからねば誰か適当に身代わりを立てればよい。

彼にとつて、肉親などそのくらいの価値でしかない。初めから彼は何かが足りなかつたのだ。

人として大事なもの　他人を認める事。自分以外の者にも生きる価値はあるのだということを。

モンド州州都エリアル、その州城の広大な敷地の一隅にある小宮。灰色の武骨な外觀を見せる小さな城。打ち捨てられていたその城は今は綺麗に掃除され、修理され、すべての部屋が使えるように整えられていた。

大きな玄関のホールを抜けるとすぐに見えている広い部屋。

そこにハーコートは落ち着いていた。目の前の長椅子には黒髪の優雅な婦人がゆつたりと向かい合つように座っている。

そこへ、やつて来たのはダリウスだった。

「父上、母上大変でござります。国王陛下が権を移譲されることに」

「な、何？」

「新王、コーラルの即位式の知らせが正式にサイトスからまいりました」

伝えるダリウスもハーコートもしばらく何も言えない。

「あなた、二階にいる彼らにも伝えたほうがよろしいのでは？」

妻の言葉に気を取り直したハーコートはダリウスにうなづく。

「わたしが行つてまいります」

従者を連れず、ダリウスはそのまま二階へ上がつて行く。手前

の戸に拳を当てるど中から大柄な男が顔を出した。

「あ、ダリウス様。何です？ あなたがご自分でいらっしゃるなんて」

「悪いが皆を集めてくれ、ウイリアム」

思い詰めた様子のダリウスにウイリアムも余計なことは言わず、次々と扉を叩いていく。

ウイリアムの部屋に集まつた者を見回してダリウスが首をかしげる。

「ステファンはどうした？」

「あの……」

アリスローザが口に手を当てて困ったように窓の外を向いた。

「どうした？」

「ええ、先ほどハーコート公夫人とエスペラント様がいらしたんですけど。エスペラント様が馬に乗りたいと仰って」「で？」

「ステファンが一緒に出て行つたんです」

「エスペラントめ」

大きくため息をついてダリウスは額に手をやつた。

「ここは、どこだ？ 馬場じゃないけど？」

ステファンは州城の外れのややうらぶれた場所に出て頭をかりかりと搔いた。

「ここでいいのよ、ステファン。ここなら遠慮無く馬が乗れるわ」やれやれと辺りを見渡して、ステファンは並足よりわずかに速く馬を走らせる。後ろに座つてぴたり体を寄せているのは十五、六の少女。

彼女には前に初めてモンドの城に来たときに会つたことがある。ダリウスの妹、確かモンド州州姫エスペラント。自分の夫に会いに来た公爵夫人についてきて、部屋にいたステファンをじろりと見て話しかけてきた。

「あら、あなたアリスローザ様どー一緒にいた方ね。どうしたの？」
「どうしたっていってるのは、君のお兄様に聞いてくれないか。で、ちよちよろ動き回るのもやめていただきたい」

ステファンの言葉にエスペラントはややむつとした顔を見せる。
「ここはわたしのお城なのよ。何をしようとかわたしの勝手よ。わたしは自分の思うところへどこへでも行くわよ」

「そりやまあそうだけさ」

「ふん、分かればいいのよ。じゃあわたしを馬に乗せて」

「え……？」

少女の高飛車な態度に鼻白んで、なんでこんな事になるのか分か

らないまま、ステファンは馬上の自分の背後に少女をのせて州城の敷地の東の外れにいた。

「君さあ、もし、ぼくが悪者だつたらどうするの？ よく知らない男と二人きりになるなんて」

こうやつてさと、ステファンが後ろに手を回して少女の腕を掴む。それに対して、大声でも上げるのかと思いきや、腕の中の少女は笑いながら自分を捕まえている男を見上げた。

「だつてあなたは物騒な輩じゃないでしよう？ そんなに強そうにも見えないし」

「ちえっ、少しは怖がつてよ。まあいいや」

エスペラントの見せる笑顔にステファンは面白くなさそうに返すと少女の腕を自分の腰に捕まらせて馬の速度を上げた。

「ねえ、なぜだか……前にこんな事があつた気がするの」「はあ？」

「いいから、少しだけ。ね？ 少しでいいのよ。黙つてて。何か思
い出しそうなの。大切な何か」

「わかつたよ、少しだけだぞ」

ステファンはため息をついて馬を走らせた。柔らかい彼女のからだが背中に触れて、柄にも無く胸がどきりとした。

ぼくにもこんな感情が残っているのか。復讐^{じや}じゃない、何かを求めている心。

「何か思い出した？」

自分の動搖を隠そ^うと慌てて聞く。それに、素直に答える少女。「わたし 前に兄様とここに何度も来たことが。そうだわ、何で忘れていたの？ わたしの大好きだった兄様」

「ダリウス様のことか？」

後ろを振り返ったエスペラントが頭を振る。

「違うわ。クロード兄様よ」

「クロード？」

その名前にステファンは表情を暗くする。それは国王クライブの双子の弟の名前ではないのか？

変わった名前では無論ないが、この国では今や禁忌とされている名前だ。この国を混乱に貶めた者の名前。

それでもう一つはステファンにとつての……禁忌の名前。

「ねえ、アリストローザ様のところに連れて行ってくれない？ 彼女と話がしたいの」

エスペラントはアリストローザが何か知っているとの前、彼女と会つたときの会話を思いだしていた。

「エスペラント！ 自分勝手にこここの連中を振り回すのは止めなさい。大事な目的のためにいるんだからね」

妹の顔を見た途端にダリウスの小言が始まる。

「お兄様、クロード兄様はどこなの？」

「クロード 兄様？」

ダリウスは妹からの返事にわけが分からず、後ろにいる自分の両親を振り返る。

「エスペラント様、思い出したの？」

黙るダリウスに代わって喜びの声を上げたのはアリストローザだった。

「何を言つているのか、わたしにはさっぱり」

分からぬと言おうとしたダリウスの言葉は母親の声に遮られる。「ダリウス、あなたにはコリウスと、クロードといつ弟がいたのよ」「何を言つているんだ？」

これには後ろで聞いていたハーネートが堪らず口を挟む。

「あなたも、ダリウスも。男つて忘れ易いのかしら。三年前まであなたの子どもとして魔道師のイーヴァルアイとクロードがモンド州にいたのよ」

ゆつたりとした物言いで夫も息子も即座に黙らせて夫人は続ける。「十年も一緒に暮らしてました。その間、わたしは城下の町に館を構えてあなた方と離れていました。寂しかったわ。でも、三年前のある日わたしの部屋に竜門が開いて……」

刺繡をしていた彼女の目の前に現れたのはこの国の魔道師の祖、イーヴァルアイとその後ろからのぞくようにこちらを見ている十四、五歳の少年。

しかし、彼女は初めて会うわけではなかった。

始まりは十年前。彼がモンド州の州公の息子になるために邪魔だからと一方的に城を出るよう言いに来たとき。

「いくら、魔道師庁長官であるあなたの申し入れだからと言つてこんな理不尽ななさりようには納得出来かねる」

モンド州州候、バルザクト・ロイス・ヴァン・ハーロート公爵が、この国の魔道師の重鎮ガリオールにきつぱりと断りの言葉を伝える。「あなたの弟の子どもを養育して欲しいというのがそんなに理不尽ですか？」大事をとつて魔道師を一人お付けすると言つているだけですよ、公」

「なんでその魔道師までわたしの子どもになる道理があるのか、お伺いしたい。下の娘はまだ三歳なのだ。母親と引き離すなど論外だと思われませんか」

「まあね。無茶苦茶なのは分かつてているけど。でも今の雛ちゃんは自分を魔道師だとは思わず育つて欲しいんですよ。で、兄としてつけることにしたんですけど。お一人とも黒髪ですし……」

横からレイモンドール国の魔道教の本山を統べるルークが口を出します。

「公、悪いがこれは決定事項だ。王陛下の許可も取つてある。了承も何も決まつた事にこれ以上何を言われてもこの決定は覆らない」

ガリオールは聞く耳を持たないとばかりに言い切つて後ろを振り返る。そこにいるのは七歳くらいの亞麻色の髪の少女の容貌を持つ少年。

「話はついたのか。わたしの名は、ユリウスだ。ハーコート公、州城にある離宮のどれかをわたしの住まいに用意しろ」

この場にいる誰よりも偉そうな口を利いた少年は、それからいくらもしない頃、婦人の住む城下の館に長身の従者を一人連れて現れたのだ。

「これは、ユリウス様。どうされたんです？」

夫人は突然現れた一人に驚く様子も無く、自らお茶を入れようと立ち上がる。

「公妃様、お茶ならわたしがご用意いたします」

青年が手を出すが。

「あら、いいのよ。ここに来て何でも自分で出来るようになつたわ。でないと何もすることも無いし。それにあなた方が来ている事をあ

まり人に知られたくないのではなくて？」

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

従者の青年が素直に引き下がる。椅子をすすめたが固辞して椅子にふんぞり返る少年の後ろに立つていて。

「今日は、これを持って来てやつた」

ゴリウスが言うとすかさず、青年が丸い古ぼけた銅鏡を婦人に差し出した。

「これは？」

「ハーロートの奴が親の敵のようになつたしを見るので適わん」
ぶすつと言う少年は説明する氣はさらさらないようだ。

意味が分からず婦人は困惑する。

それを見てため息をついて青年が口を出す。

「これは自分の見たい者を映します。長い時間は無理ですが。これでご家族の様子をご覧になれますよ。少し、簡単な呪文を覚えていただきますがよろしいですか？」

青年の指導の下、何回か練習して鏡に呪文を唱えてみる。途端に銅鏡の表面の曇りが取れていき、鈍い鏡面に何かが映る。自分の顔では無いそれ。

「エスペラント。寝ているのね」

ふつくりとした顔の幼女がすやすやと女官の腕の中で寝息をたてている。

「ありがとうございます。ゴリウス様」

顔を上げてにっこりと笑つて手を出す婦人に、億劫そうに手を出す少年。

「おい、何なんだ」

手を引き寄せられて抱きしめられたゴリウスが慌てて声を上げる。

「だつて、ハーロートの息子ならわたしの息子でしょう？ ゴリウス様。抱きしめられないエスペラントの代わりに暫くわたしに付き合つてくださいませ」

「なつ！」

「公妃様、いけません」

若者が気遣わしそうに近づく。 気難しい自分の主人は気安く自分の体に触れられるのが事のほか嫌いなのだ。 自分でも世話を焼く以外に触ることなど適わないというのに。

ところが。

「ちつ、仕方ないな。時々来てやる。その代わりあんまりべたべたするなよ」

「はい、ありがとうございます。いつもそのお姿でおいでくださいませ。大人の姿に戻つてはダメですよ、ユリウス様。膝に乗せられませんからね」

驚愕の表情を浮かべる従者の前で、大人しく婦人の膝にのせられているユリウスは自分から婦人の首に腕をからめた。

それから度々彼女の所にユリウスは従者と共に現れた。特別何をするわけでも無かつたが。一緒に話をして子どもの代わりに抱きしめながら暖炉の前でくつろいで。

とつぐに気づいていた。ユリウスが肉親の愛情に飢えていること。自分を通して彼はきっと彼の母親と過ごせなかつた時間を取り戻そうとしているのだ。知らない振りをしながら彼女はそんなユリウスが可愛いとさえ思つていた。だから思いつきり子ども扱いをしてあげたのだ。実際は自分より年上なんだと知つてはいたが。

そして十年ほど経つた頃、彼は一人の少年を連れて館に現れた。

「今日はラドビアスは一緒じゃないの？ ユリウス」

長い間にすっかり母親口調の公妃がユリウスに問う。

「ああ、ルイーズ。今日は弟のクロードを連れて來た。会うのは初めてだつたか」

「今日は、おれのせいで城を追い出されているんでしょう？ ゴめんなさい」

ユリウスの後ろからひょっこり体を出して素直に謝る少年の手を握つて婦人はゆつたりと笑う。

「あなたも大変な運命を背負つてはいるんでしょう？ お互様だわ。

ねえクロード、ユリウスのお兄さんぶりはばつなの？」

「お、お兄さんぶり？」

隣で睨みをきかすユリウスの横でクロードはユリウスを呼び捨てにする豪胆な女性に圧倒された。

「ルイーズ、今日はお別れに来た。おまえはじき州城に帰れる」

ユリウスは小さくそれだけ言って横を向く。

「どういう事です？」

「どういう事？」

クロードと婦人の声が同時に重なる。が、それにユリウスは答えない。

「何があるのね、ユリウス。言いたくないのならわたしは聞かないわ。もう、会えないのかしら。寂しくなるわ」

手を伸ばしてユリウスの体に腕を回すと彼の腕も自分に回わる。抱きしめられておでこに口付けられた。

「もう、親子ごっこは終わりだ。本物のところに帰れ、ルイーズ」「じつこでもあなたはわたしの可愛い息子だったわよ、ユリウス」「……うん」

目を丸くしているクロードを引きつれユリウスは帰つて行つた。その後いくらもせずに自分は州城に帰つたのだ。が、術をかけられたのか、誰もユリウスもクロードの事も覚えている者は城内にはいなかつた。自分は病氣療養のために他州に行つていた事になつていた。

彼女の話に納得してないような顔のハーコートとダリウスの横でアリストローザはなんだかほつとしている。クロードのことを知っている人がいたのだ。そして記憶を取り戻した者も。クロード、あなたを待つてるのはわたしだけじゃないと声を大きくして教えたい。忘却術はユリウスことイーザルトイが死んで効果が薄れているのかもしかつた。

「クラブ陛下がコーラルに王位の移譲をなされるという知らせが

サイトスからまいった。クライブ様の御身が心配だ」
ハーコートの言葉に皆の顔色が変わる。

「でも、ぼくたちのやる事は変わらない、だろ？ ダリウス様の州候就任の挨拶が「一ラルの即位式に変わつただけだ」
ステファンが勢い込んで皆の顔を見渡す。 そりだらつ、と確
認するかのように。

「だが、驚くほどの人数がサイトスに集まる。警備の兵だつて自分
の主人を守るために州軍の半分は連れていくのではないか。やりに
くいのは本當だ」

ウイリアムが天井を仰ぐ。

「奇襲しかありませんね。州候が新王にお祝いを述べる、その時し
か機会はございません」

物騒な発言の主は他ならぬ魔道師の男。

「そうだな、それしか機会は無いだろうが。玉座に進む時に武器は
持つ事を許されていない。それをどうするか、それが問題だ」

三年前の事を思い出してハーコートはため息をついた。

「それにクライブ様もお助けしなくては」

アリストローザは心配げに咳く。 自分がひつぱたくまで元気にし
ていてくれなくては。

「ひつぱたく？」

ダニーアンの問いに、いつの間にか口に出していたのかと何でもな
いと薄ら笑いでじまかしてみる。

「ねえ、ステファン主城に送つて行つて」

一同の緊張感をはらむ空氣の一瞬の隙をついて繰り出されたエス
ペラントのおねだりにダリウスが困つたように父親を見た。

「エスペラント、今日はだめだ。大事な話がある」

短く言つと、さすがのエスペラントも父親には逆らえないのか大
人しくうなづく。

「わたしたちは主城に帰りますわ」

夫人がエスペラントを伴つて席を立つ。それを見送るように田
を上げたステファンはエスペラントと田が合つて慌てて逸らせた。
それに気づいてエスペラントは口をとがらして見せた。

「あたしに案がありますが

魔道師がのつそりと話し出す。

「あたしたちは謁見えうけんの間の近くで待機します。あらかじめ、羊皮紙に空間移動の魔方陣を描いておきます。ダリウス様はコーラル様の前でその羊皮紙を開き、術の封印を解いてください。待つているこちらにも同じ魔方陣を描いて、中に待機してダリウス様が封印を解いた瞬間にその場に行く。といつのでいかがです?」

「ちょっと待て。今の話では、わたしが魔道師のように術をかけるとか言つてなかつたか?」

「はい、その通りですと魔道師はあつさりと笑う。

「ルーン文字は左回りに読みますが、ふりがなを打つておきますし、今から印の組み方もお教えいたします」

「まさか、わたしがそんな事を」

「他に何かありますか? ダリウス様。要は練習だけです。この術だけの呪文と印だけですから大丈夫でしょう」

「そんな簡単に言うな」

ダリウスが立ち上がるのをハーコートが押さえる。

「わたしもそれがいいと思う。がんばりなさい、ダリウス」
ダリウスを見守る誰もが首をたてに振つていてるのにダリウスは気付いて、苦笑いしながら仕方無く座つた。

「分かつた、やってみよう」

「場所の移動だけならこちら側だけの魔方陣でいいでしょうが、時間を使わせるならダリウス様からの術が要りますからね。さて、範字一つ一つには対応する印がいります。今晚からはじめましょうか、ダリウス様」

「そう、だな。しかし、魔道師でもないわたしに術の封印を解くなんて出来るものなのか」

「そうじやないんですよ、ダリウス様」

「何が違う？」

それはですね、とウイリアムがコホンと咳払いする。

「魔道師は血統でなるもんじや無く、他の学問みたいに修練を重ねて得とくしていくつてさ。なあ、ウイリアム？」

自分の言わんとしていた事を横からステファンに、かつ攫いのわれてウイリアムはあと口をひん曲げてみせた。

「サイトスへはわたしも同行させてくれないか」

「ハーコート公様」

「父上」

その場にいた、彼以外の人間がいっせいに反対の声を上げる。

「いけません、父上。わたしにもしもの事があつたらこのモンド州はどうなるんです？ 父上はここで私達を待つていただなくては」ダリウスの言葉にうなづくアリストローザたちをハーコートは軽く見渡して笑う。

「コーラルに捕らえられているクライブ様をお助けしなくては。第一、おまえ達が失敗したならすでに死んだことになつているわたしなど、このモンド州で何が出来るというのだ。それに足手まといにはならぬよ。剣の腕はダリウスより上だ」

「父上」

ダリウスの抗議など聞く耳もたぬとハーコートは魔道師に向く。「表からはダリウス。裏からは魔道師とわたしだ。一二手に分かれよ

う」「仕方ありませんね。では、ハーコート様とアリストローザ様とあたしがクライブ様の救出。あとの方たちにコーラル様の方をお願いしますか」

ダニアンの提案に皆がうなづく。

一旦、ダリウスは主城に帰る。州府の事もおざなりには出来ない。それに近々サイトスに行くならその間の事も考えていなくてはならない。

アリストローザたちも二階に上がっていく。

「何でわたしがあなたとクライブ様のところへ行くの？」

前を行く魔道師はたっぷり時間を取りてから振り向く。

「そりゃあ、アリストローザ様、クライブ様をひっぱたきたいんですよ？　そう仰ってたじやないですか」

「それは言つたけど、それだけ？」

「それだけじゃダメですか」

面倒臭そうに魔道師は体を戻す。

「たぶん、クライブ様は地下宮に幽閉されておりましよう。だつたら、あそこから出る道を知つているものに来てもらわないと」

「でも、わたしそんなの覚えてないわ。扉のからくりだつてラドビアスがどうやつたのかなんて知らないし」

はあと大きくため息をついて魔道師は階段を上がる。

「覚えてないと思っているだけで人は結構頭の中に見た物を保管しています。あたしが術で記憶を探ります。ウイリアムはダメですよ。彼は」

先回りして言つダニアンに、それでもなぜとアリストローザは食い下がる。

「ウイリアムはクロード様が術で入り口から堂々と出しちゃたんですよ。どんな術だつたんだか。後でラドビアス様がその辺の後始末はなさつたでしょ？　手本にはなりやしません」

言つだけ言つてアリストローザの返事なんて待つことも無く、ダニアンは自分の部屋にばたりと入つていった。

それにもダニアンという魔道師。これほど能力のある魔道師だったとはアリストローザは思つていなかつた。それはあの情けない外見のせい、と言つては本人に悪い。

「あたしは魔道師なんですからね。コーラル様と剣を交えるなんて冗談じやない。ついでに失敗したら、その足であたしは逃げさせていただきます」

はつきりとそう断言する魔道師にアリストローザは呆れてしまつた

が[。]

突貫工事で生活できるよ^うにしたせいか、下の豪華な部屋にくらべて一階のアリストローザたちの部屋は間に合わせの家具が置かれて簡素な造りだつた。そんな事を思つてゐるのは、生まれた時から贅沢な生活をしてきた自分くらいだらうか。寄木で作られた書机の前でアリストローザはふと考へる。

クライブ様を助けて自分はどうするのだろう? 何をしたいのか。良い国にする 言うのは簡単だが実際、どうすればいいのかなんて自分には分からない。市井の人々にとつて国の統治者などはつきり言つてしまえば誰でもいいのだ。今の生活を良くしてくれるなら、魔道師だらうが何だらうが関係ない。上の者の権力争いなど自分たちの生活に関係ないなら興味も持たないだらう。

税金を安くする。

福祉を充実する。

兵役の年数を少なくする等々、考へていた事はどうも口当りはいいが。

その原資はどうするのか。

避けられない戦争が起つたら、兵士の補充はどうするのか。

今までの魔道師は私服を肥やしていたのでは無かつた。この国で生きてゐる者に対しては良い統治者だつた。結界により守られていたこの国に大量の兵は必要無く、國土はこの五百年戦火にまみれる事は皆無^{すいじゆ}。安定した長期的な政策によつて大きな事業は途絶える事無く遂行されていた。

私達はそれに比べてこの国の住民に何をしてあげられるといふのか。

してあげる、と思つことすら不遜なことか。

魔道師から権を奪い返す、これは一体誰のためだつたのだろう。上に立つものの驕り^{おこ}、高ぶり。國の中がバラバラになつた今、

わたし達がやらなくてはならない」とは一体何なのか　国民の益を守り、國を守る。

「コーラルにそれが出来るのか。　コーラルから王位を奪い、クライブ様に渡す。　そしてその後は……。

「わたし達は間違つてない、わよね」

「そうだな」

「人事を言つたつもりなのに思いもかけず、返事が返つてきてびくりと戸の方へ顔をむける。　そこには大柄な優しい笑顔を向ける男。

「ウイリアム、やめてよ。驚くじゃない」

「入るぜーって言つたけど。何を今から心配してんだか」

「まだ、早い?」

「そうだな、そんな事はコーラルの首を取つた後に考へるんだな。第一、コーラルの野郎は謀略^{ぼうりゃく}で王位を奪つたに違ひないんだからな。そんな奴に忠誠なんて誓えるかよ」

「この人は兵士だったんだとアリストローザは思い出す。　ステファンならどう言つうのか。

忠誠なんて糞喰らえとでも言つかもしれない。

「コーラルを倒す目的は同じでもその理由が各自違つのだから。

「なあ、そんな顔すんな」

「気がつくと目の前にはウイリアムがいた。　彼の手がアリストローザの頬に触れる。

「おまえが悲しい顔をすると心が痛む。おまえの目はトラシユにとても似ている」

「兄……様?　あなたトラシユ兄様を良く知つてゐるの?」

アリストローザはウイリアムがトレンス將軍の弟だとしか知らない。知つてゐるのはレジスタンス活動のリーダーとしての彼だけだ。あの活動以前はトラシユとそんなに親しいわけでも無かつた。何しろアリストローザには異母兄弟が山ほどいる。　ウイリアムとトラシユとの因縁は馬車の荷台で彼が魔道師に語つただけだ。

「たぶん、あんたより素のトラシユを知ってる」

取り澄ました、州候の跡取りじやない彼を。 酒飲んで管巻いて。 愚痴をこぼして熱く青臭い事を本氣で語つていた。

そんなトラシユを おれは知ってる。

「ウイリアム？」

黙りこむウイリアムに問いかけるように名前を呼ぶ。 兄様の素つてじうじう事なんだろう。 いつも優しくて冷静な兄の事しか自分は知らない。 そのほかに何かあるのか。

それをレジスタンスのリーダーだった彼が知っているというのか。

「ウイリアム、 答えてよ」

アリストローザの問いにウイリアムは彼女を抱きしめて口付けることで誤魔化す。 誰にも言いたくない。 ただ、 それだけ。

それだけの…… はず。

いきなりの口付けにアリストローザは咄嗟に何も反応できない。

「ど、 どういう事？」

やつと離れた唇の余韻に思わずほど動搖している。

「どういう事つて…… おれは前から言つてるじゃないか。 頂きたいつてさ」

その声があまりにいつものウイリアムと違つていて、 本人は気づいていない。

わずかに震えて。

その緊張を打ち破る戸を叩く音。

「おい、 飯だぜお一人さん」

「わかった。 おい、 なぜ二人だと分かつたんだ？」

戸を開けたウイリアムがステファンに聞く。

「先にウイリアムの部屋に行つて、 あんたがいることを知つた。 あとは」

「あとは？」

「ここに戸に耳を付けて聴いてた」

あつさり不正行為を告白したステファンは片手をつぶつてみせる。

「続きはどうする？」

「続きなんてないわよ、今度そんな事したら殴るわよ」

アリストローザの剣幕にステファンは降参と手を上げる。

「ところで今の台詞はぼくに言ったの？ それともウイリアム？」

「つるさい！」

怒鳴るアリストローザに笑いながらステファンは階下に降りて行く。

その途中でウイリアムとすれ違う。

「なあ、邪魔だった？ それとも助かった？ ビックリ？」

「助かった」

ウイリアムの言葉にステファンがにやりと笑う。

「だと思った」

ステファンの後ろ姿をながめながらウイリアムは苦くつぶやく。

「まったく。はどめが効かなくなるところだった。おれもまだまだ

青春野郎なんだな」

その少し前、中年の魔道師が書机についていた。懐から出した、一枚の羊皮紙。それに細心の注意を払いつつ魔方陣を描いていく。空間移転の複雑な模様。

それに範字を入れ、レーン文字を書く。

一旦それを仕舞い、もうひとつ羊皮紙を広げる。

『アンズス、アンスル、オス』

印を組んでレーン文字を唱えるとそれは大型の猛禽類の姿に変わる。

竜道が使えなくなつたこの国では近距離なら羊皮紙に用件をかいだ鳥に姿を変えて飛ばす方法がある。が、州を越えて目的地までとべる鳥を作ることができる魔道師など数えるほどだろう。しかも彼の使う鳥は書を運ぶ以外に擬態して主の言葉を伝え、行動する。次位の魔道師でこんな高度な術を使いこなすのはダニアンだけだろう。竜印を受けていた高位の魔道師、コーラル以上かもしれなかつた。

まあ、竜印を受けた魔道師といえど、二種類ある。王の半身は無条件に竜印を受ける事ができる。しかし、半身以外の道は厳しい。地方の廟から廟主の推薦を受け、上位の魔道師の厳しい試験に合格して。最後にはゴートの廟主ルークのめがねに適つた者だけが魔道師長ガリオールの竜印を受けることが出来るのだ。

同じくらいの歳ならその腕は比べるべくもない。王の半身が力を持っているのはその後の長い年月によつて会得していくからだ。

しかし、たくさんの魔道師の中から選抜された魔道師が生まれながらに竜印を刻印される運命の魔道師と同等なのか。

国を動かしていた二人が一人とも王の半身では無かつた 事がすべてを物語つてゐる。

小作農の子どもだつたガリオール。

日雇いで日々をしのいでいた親の元にいたルーク。

才能は誰にでも等しく『えられているものでは残念ながら無い。

「いひなつたら最後の手段」

猛禽類に書き連ねた書簡を持たせて長い呪文を唱える。

「無事に届けばいいが。もし、他人に渡ることになつたら自ら消滅せよ」

こくりと首を下げるあと、その大型の鳥は大きく羽ばたいて開け放つた窓から飛び立つて行つた。

「おい、飯だ魔道師」

外から若い男の声。

「はいはい、今行きます」

ダニーアンはゆっくりと立ち上がって部屋を出た。

主城に戻つたダリウスは、いきなり大きな声に出迎えられて眉をひそめた。

「あなた、サイトスへわたくしを同行しないと伺いましたが。どういうことなのか、教えてくださいますでしょ?」

腰を手に当てて階段の上から見下ろす妻、マーガレットに大きくため息をつく。

そのまま自分の居室に戻るとする夫を追つてマーガレットがダリウスの腕を掴んだ。

「皆の前で無様なまねをするのをやめなさい。話があるなら部屋で聞こう」

こつものように淡々と言わされてマーガレットは唇を噛む。

いつもこの人はそうだ。 わたくし一人が騒ぎ立てているのにいつも冷静に交わそうとするのだ。 眉をひそめて。

部屋に入ると堪らず、大声を上げてしまう。

「わたくしはあなたの何なの？ ダリウス。 何かの原因で王座をコラルに渡すのはわたくしの弟なのよ。 どうしてサイトスに連れて行かないなどと言つの？」

「悪いが君にはここにいてもらわないと困る。」この混乱が収まつたらサイトスへ行く事に別にわたしは反対しない」

ダリウスは話を切り上げようと早口でそれを言つと扉に向かう。ところがその背中に思いも寄らず抱きついてきた妃に心底驚いたダリウスが首を捻つて後ろを向く。

「ダリウス、あなた、危険な事をなさりにサイトスに行くのでしょうか？ わたくしに何も言わないけど、それくらい分かるわ。 心配してるのが分からぬの？」

「心配？ 君がわたしを」

「わ、わたくしがあなたを心配するのがそんなに変ですか。 わたくしはあなたの妃です」

ダリウスが体を返して自分の妃と向かい合つ。

そんなことが？ 何かほかの理由があるのか。

「わたしにもし、万が一の事があつたとしても君は心配しなくてもいい。君の身分は保証されるし、そう望むならサイトスに帰つても……」

「違うわ、違うの」

ダリウスの言葉は強いマーガレットの声に遮られる。

くやしそうに両手の拳を握り締めて彼女はダリウスを見上げ。

「わたくしはあなたの身を案じているのよ、ダリウス。わたくしを見て。あなたはいつもわたくしなんか見てもくれない。でもわたくしはあなたしか見てないのよ」

そうだ。婚礼の日から一度だつてわたくしの事なんかレイモンドール国の姫としか見てくれなかつた。愛の無い政略結婚だから？ だけど……わたくしは真摯に政に取り組むあなたが。いや、そうじゃない、もっとそんな理性的なことじやなく。わたくしはあなたが好きなのだ。

結婚の話ならそれこそ星の数ほどあつたのだ。宫廷に顔を出す貴族の男なんて自分が声をかけるだけで顔を赤くして贅辞の言葉を返す。それが当然。自分に夢中になつている誰かと仕方無く結婚してやると思っていたのに。

それなのにダリウスはわたくしを見る事も無かつた。くやしくてくやしくてどんどん我慢だと思いながらも口を引っ掻き回していた。止めてくれるかと。

理由を聞いてくれるかと思つていたのに。

「わたくしはあなたを愛しているのよ」

マーガレットの叫ぶような告白にダリウスは初めて彼女を見た、気がした。

「ダリウス、わたくしと一緒に連れて行って

思わず、彼女を抱きかかえたダリウスはがくりと自分が膝をついてしまふのではないかと思つた。

それは、彼女の重さでは無く。 矜持の高い妃にここまで言わせてしまつた自分のふがいなさに。 抱きしめた彼女は驚くほど細くて折れそうだった。 そうだ、なぜ自分は彼女を見ていなかつたのか。 仕方ないと。 決められた事だからと。

こう、なつてしまつたのは彼女の責任では無い。

「済まなかつた、マーガレット」

彼女の思いに答えられるかどうか。 それは今はわからない。しかし、自分は彼女を、故郷を離れ一人異郷の地に来てくれた彼女をしつかり見なくてはならない。

すべてはそれから。

ダリウスは、マーガレットの気が落ち着くまでその場に留まつていたが。

「少し、忘れないうちにやつておくことがある」

彼女に言い残すとダリウスは部屋を出た。

「一階東の端の部屋の絵を外しておいてくれ」

従者にかける言葉。

「はい、それでよろしいのですか。 気に入つておられた絵ですね。どちらかに掛け替えられますか」

「いや、倉庫にでも仕舞ってくれ」

「それでよろしいのですか」

「ああ」

ダリウスは東のほうへ、自分の心の弱さと思いに決別の視線を向けた。

慌ただしくサイトスに向かう準備が始まる。 夏至の時を過ぎて

今は気候が過ごし易いが州候を集めて即位、戴冠式を行うにはそれ相当の準備期間が要る。

州候も一番遠いダートベージ州からサイトスへ向かうには一ヶ月ほどかかる。州候が自分の州を留守にするのだから、おいそれと出ては行かれない。普通なら厳しい冬を越えた後春の月に設定されようという大事な行事。

だが、今回は直ちにサイトスへの登城を記されていた。冬が来る前に即位戴冠式を行う事に決まったのだ。

ダリウスは夫妻でサイトスに赴く事になつてゐる。その妻役はアリストローザなのだが。

付いて行く侍従長にハーロート。

他、追従する者に紛れていく。

サイトスに入った後、二手に分かることになる。

「しかし、いきなりサイトスに入つてから公妃がいなくなつては不信を招くのではないか？わたしの妃はレイモンドールの皇女なんだぞ」

ダリウスの問いにウイリアムは魔道師を見る。

「おい、出番だ」

「何ですか、あなたがたは。あたしは何でも屋じやありませんよ」「しかし、わたしの時のように身代わりを出してくれるのだろう？」

「……ハーロート様」

ハーロートに言われてしまえば反論できよづはずもない。
「わかつてあります。はい、やらせていただきまーす」
心底嫌そうに魔道師は大げさに礼を取つた。

州城の蔵書室で本を開いていたステファンは、田を通じている紙面に影が落ちたのを見て顔を上げる。

その目に映るのは華やかな衣装。綺麗に結い上げた髪。

そして寂しそうな顔の少女。

「エスペラント様。何ですか？ もう立たれると影になつて読みにくいんですけど」

「だつて」

ステファンの問いに答えにもならぬ返事を返す少女に仕方なく、本を閉じる。

「だつて……何？ ぼくで答えられる」となら教えるけど」

「だつて、もう行つてしまつてしょ？ わたし、また馬に乗りたかったのに」

ふつとステファンは笑つ。

「そういう事か。いいよ。今から乗りに行く？」

「それはそうなんだけど、そういう事じゃなくて」

「じゃあ、何？」

エスペラントが何を言いたいかを計りかねてステファンは少女の顔を見上げた。その泣きそうな田を見て胸の奥がどきりと動く。何を考えているんだ。ここにいる少女は州公の娘だ。そんな男女の気持ちを持つ対象になるわけがない。しかもぼくはそんな気持ちになつてはいけない。

ぼくは、生まれただけで周りを不幸にしてきた禁忌の者。

大事な人をこれ以上作る事も失つのも嫌だ。

「わたし、今まで結婚なんてどうでも良かつたのに。相手なんて全然気にならなかつたのに。今はお嫁に行くのがどうしても嫌だわ」

「結婚……するのか」

結婚と云ふ言葉と田の前のエスペラントがしつくつと頭に入らな

い。でも貴族とはそういう物なのだろう。

自分が知っている結婚とは暖かくて親密で 頭に浮かぶのは、

抱き合つて笑つていた両親の姿。それを見ている兄貴とぼく。

そうだ、ぼくはやる事があるので。

自分がここにいる理由。

ぼくは、復讐者だった。母や、父。そして兄の無念を晴

らすためにここまで来たのだ。あいつを、コーラルを殺すために。

ぼくは一体何をやつているのか。

「それは お幸せに、エスペラント様」

「ばかっ、大嫌いっ」

慇懃な態度に戻つたステファンの口調に、エスペラントは大声を

出すと蔵書室を飛び出して行つた。

「追いかけなくていいのか？ 色男」

その声の主が大股で近づいて来る。

「どこから見てた？」

「わりと最初から。で、どうするの？」

「どうもしない。ぼくはあんたと違うよ、ウイリアム」

「あーそう。がきつてことか」

ウイリアムに一睨みを返すが、それが効いているとはとても思えなかつた。

「あんたはアリストローザをどうにかしようと思つてゐるのか、大人の男としてさ」

皮肉交じりのステファンの視線を余裕で交わしてウイリアムが笑う。

「ははは、妬くなよ。おれは良い男だからな。黙つても女が放つてくれないさ」

「黙つてなかつたし、放つても無いじゃないか。このつそつきのおつさん」

勢いよく立ち上がりながらステファンは冷たく言つと蔵書室を出て行こうと歩く。

「いいのか？ もう？」

「何だよ、どいつもこいつも。人の調べ物を邪魔しといて。いいよ、もう。どうせ趣味に走つてたし」

「趣味？」

「外国の政厅の仕組みを調べていたんだ。諸外国の良い所はこれら取り入れる検討があつてしかるべきだろ。今までと同じじゃうまくいかない。魔道教が支配していた時代と同じ形態では綻びが出来て当然だ。州公の蔵書に目を通すなんてめつたに出来ないからな。ついでに古文書を調べたかつたんだが。古代レーン文字はなかなかやつかいなんだ。あの禿げ魔道師なら読めるんだろうが協力なんてしてくれそうにない」

ステファンの後姿を見ながらウイリアムは人は血なんて関係ないと思っていたが、自分の考えに疑問を感じる。

ステファンの考え、行動は上に立つものの物だ。ただの復讐で政厅の仕組みなぞ知る必要など無い。この策謀が成功した後の事を彼は考えているのか。

あいつには、レイモンドール国主の血が流れている。

おれはどうなんだ？ アリストローザへの思いに囚われているおれは。今はそんな事を考えている場合ではないというのに。だけど、この思いを彼女に伝えたいと。ただひたすらそう思つてているばかなおれが、心に住んでいるのを隠しておくのはもう無理だ。

おれのほうがよっぽど子どもだつた。

「ダリウス、絶対帰つて来てね」

「分かった」

簡単な挨拶を返す一人。しかし今までと歴然とした違い。人を包む空気の温度の違いにその場に居た者すべてが気付く。そしてそこに現れたアリストローザの姿に騒然となる。

濃い群青のドレス。薄い青のレースが胸元と袖にたっぷりとついて。髪も纏め上げられて真珠の髪かざりで留められている。薄つすら化粧している彼女の姿。

「へえ、きみは女だつたんだ。やつぱり」

ステファンが感嘆の声を上げるのに隣の魔道師がこつそりと同意のうなずきを見せた。

「何？ ウイリアム、わたしに何か言いたいのじゃない？」

「いや、つまり」

いつもの余裕を無くしてウイリアムが言ひよどむ。

「あんまりアリストローザ様が綺麗なのでびっくりなさったのね。本当にお綺麗だわ、男の格好の時も凜々しくて好きだけだ」

横からエスペラントが口を出す。

「嫌ねえ、そんな事ウイリアムが思つてているわけないじゃないですか、エスペラント様。また、何か難癖つけようと搜しているんじよつ？」

苦笑いしながらアリストローザの前をウイリアムは無言で横切つて行く。

「何？ どうしたの？」

「何も、どうしたのも、本人に聞いてきたら。アリストローザ」

ステファンが片目を瞑つてみせる。

部屋を出ると長い廊下の先にウイリアムは立つていて。二人の間を強い風が吹き抜けていく。そこは外に続く渡り廊下になつていた。

「ウイリアム、何？ 急に出て行くなんて」

「何で追いかけてきたりする」

「え？」

返される硬い言葉に、肩に手を触れようとしたアリストローザの手が行き場を失つて下に落ちる。

「おれにそんな姿は目に毒なんだよ」

「ウイリアム……」

「ああ、もっ」

ウイリアムが舌打ちしてこちらに向かって来る。落とした手を反対に強くひかれてアリストローザの体は彼の腕の中に納まる。

あまりの事にアリストローザは何も出来ない。

「くそっ、黙つてようと思つてたのに。おれは、おまえの事が愛しいと三年前から思つていた」

強く抱きしめられて耳元で囁くよつて言われた言葉。

「わ、わたしは」

「言わなくていい。おまえはクロード様の事を忘れていない。それは分かっている。今のはおれの身勝手な気持ちだ。本当は言つつもりもなかつた。でも、おれは自分に嘘をつきたくない。おまえが好きだ。ずっと、この三年間おまえの事しか見てなかつた。守つていたのは言われたからだけじゃない」

身じろぎさえ出来ないほど抱擁にアリストローザは困惑だけでない感情もあるのを自覚していた。

クロード、今すぐ会いに来て。でないとわたし。私は……。

顎に手がかかり、ウイリアムの顔が近づいてきて。

「だめ、わたしだ……」

「今はこれで終わりにするから。今はおれに」

強引に上を向かされてウイリアムのやや厚めの唇がアリストローザの唇に被さる。

そのあまりの甘さにアリスローラは抗うことが出来ない。

やつと離れたウイリアムは悪かつたと言つて、手の中からアリスローラを開放した。

「おれの思ひは伝えたが、おれの事を思ひやつてどうじうとか考へるなよ。おまえはおまえの気持ちに正直になつてくれればいい」

「わたしは」

自分はクロードを好きなのだ。いや、そうだと今まで何の疑問も持たなかつた。でも、本当にそりうのか。本当に嫌なうつしきの口付けがあんなに甘かつたのはなぜなのか。

「じめんなさい。分からないわ」

「すぐに返事はいらない。あつさり振られるのも悲しいからな。事が収まるまで返事は要らないから」

いつもの笑顔になつてじやあなど踵きびきを返す男の後姿に何も言えない自分。

今すぐクロードに会いたい。会つて確かめたかった。

自分の気持ちを。

「どう思つ?」

「どうつて、あたしに男女の機微を分かれつてこうほつが無理でしょ?」

「まあ、そうか。しかしあんなとこひでこちやつかなくてもいいよなあ」

「それは、部屋から出て見ていろあたし達の言つことじやないですかね」

ステファンとダーランはお互に顔を見合させて笑つた。

大型の豪華な馬車列が州城の敷地を出ていく。

それはこの国を正しい道へ導くものか。

それとも新たなる混乱をひきおこすものか。

「真に民のための国の礎となる戦いだと信じるわ」

ダリウスの横に座るアリストローザの咳きに車内の誰もがうなづく。

そうでなければ、やる意味が無い。

大勢の従者や支度をして出かけるという事は、手間もかかる上に一行が一日に進む距離も少人数で行くより倍近くかかってしまう。逸る気持ちに反比例して正規の州公の馬車列は思いのほか、その道程をゆっくりとサイトスへ向かっていた。

馬車の中の話はいつしか政治の話になつていて。 税金の話。主要道路の整備について。 正しい外交のあり方とは。

ダリウスと対等に渡り合つのはステファン。 それを食い入るよう見ながら質問をする、アリストローザ。 それに答えるハーコート。

さながらそこは擬似政庁のようだ。

御者を追い出して御者台に上がつてているのは、中年の魔道師と大柄な男。

「おい、いつまであいつらはあんな腹の足しにもならん事を続けるつもりだ？」

「そんな事、あたしが知つてゐるわけないですよ。 政治なんてあたしは関わりあうのは、もうまっぴらですかから」

「そうか、とウイリアムは隣の魔道師を見る。 この毒にもならぬいような容姿の男は昔、ボルチモア州で州政の一時になつていたのだ。 そこで自分を省みる。

おれは果たしてこの騒ぎが収まつた後、何をしたらしいのだ

う。 おれに何ができるのか。 今まで魔道師を倒すことが目標だった。 それ以外に生きる目標が無い、その事に最近気付かされて少しづつ、ウイリアムは焦りを感じるようになってきた。

おれの存在価値。 生きるあて。

「そんな事、生きてりやあ見つかりますよ。 今から心配したって仕方ありません」

「おい、何でおれの考えていた事がわかつたんだ？」

「氣味悪そうに言う男に魔道師は素つ氣無く言つ。

「自分の胸に秘めていたいんなら口に出さなきゃいいんですよ」

「何だ…… 口に出していたのか。」

長いため息をつくウイリアムに魔道師は前を向いたまま低くつぶやく。

「ステファンが裏切つたらどうします？」

「裏切る？」

「ばかなと魔道師を見ると彼もこひらを見ている。 そこにはふざけた様子は微塵も無い。」

「王には後継者が必要です。 彼がもし、自分に子供もがいると知つていたなら」

魔道師は乾いたくちびるを舐めて再び口を開く。

「搜すでしょうね。 そして、案外自分の近くにいると知つて」

「ステファンは家族を殺されたと。 自分は復讐【】すると言つているんだ。 そんなばかな」

「頭で思つてはいるのと、 実際会つて話すのとは違いますよ。 人の情なんて」

魔道師の言葉につつと詰まつてウイリアムは何も言えない。

「そうだろうか。 もし、コーラルが、許してくれと一緒に来てくればとステファンに言つたら。 どうなる？」

「親に会いたいとかおまえは思つた事あるか」

「ウイリアムは確認するように聞く。」

「あたしだつて人ですよ。 親と別れたのは五歳の時ですが。 あたし

が廟に行く前に服を買つたために貰つた支度金を使い込まれちゃつたんですよ、父親に

はあと言うため息。

「おかげで廟に行く時あたしは寒い中上着の一つも着て無かつたんですよ。これまでの利子を含めて請求したいもんです」

「ええ?」

真面目に聞いていた自分がばからしくなるダニアンの親に会った理由。本当の事なのか、違うのか。

「会いたい理由なんか人それぞれでしょう。それでも会つて相手の情を見せられたらどうなるか、分からないと言つているんです。今まで孤独だ、何だと言つている者のほうが案外弱いもの、ですよ」

「そうかな」

大抵そうです、とぼつさり切られてウイリアムは面白くなさそうに横を向いた。

予定の宿場について宿に入る。ステファンと同室にしたのは、さつきのダーリアンとの話のせいか。一緒にいたところでどうするわけにもいかない。ただ、心配なだけだ。だが、本人が親を想う気持ちに誰が異を唱えることができるだらう。

「何見てんだよ、気味が悪いぞ」

「いや、ごめん」

「ごめん? 何を企んでんだ、おっさん。あんたが謝るなんて世界の終わりか、天変地異の前触れだぜ」

眉をひそめて寝台に寝転がるステファン。

「おまえ、親父さんの事どう思つてる?」

返事の代わりにいきなり投げつけられるブーツをウイリアムは慌てて避ける。

「おい、危ないじゃないか」

「つむさい! ぼくの父親はもつこの世にいないんだ。どう、思つてるも何もぼくは親父を愛していたさ。死んじゃつたけどな

ぼくのせいで。ひとつそりと続けてうつむく。

あんなに良い人だったのに。ぼくと母さんがいなければ死ぬ事は無かつたのだ。普通に日々の暮らしを送りながら……生きていけたのだ。

ぼくを宿したから 母さんは死んだのだ。

ぼくが誘つたから兄さんは 死んだ。

「コーラルはぼくが殺す。その対象でしかない。あんたが何心配してんのか知らないが。むしろ心配なのはあんたのほつじゃないのか」「何でだ」

ウイリアムが強く聞くのにステファンは鼻を鳴らす。

「ふん、じついう時に女相手に好きだ、嫌いだとがんばってるからだよ。おっさん」

「つぬせこ、がき」

「がきで良かつたよ。あなたも女の事ばかりに夢中になるなよ。迷惑だ」

ウイリアムの足元にあるブーツを拾つて履くと、ステファンは部屋を大きな音を立てて出でいった。

あんな事を言うつもりは無かつたのに。

自己嫌惡で落ち着かない気持ちを抱いて廊下にいたステファンは、外から入つて来た魔道師と鉢合わせになる。思わず出る、やつあたりな言葉。

「どこに行つてたんだ、はげ」

こきなりの雑言に、魔道師は憮然として無視を決め込んで通りすぎようとするが。

「何してたんだよ。あんたは」

重ねて聞かれて嫌そうに立ち止まった。

「すみませんが、何にお腹立ちか知りませんけど。あたしにあたるのは筋違いという物です。風にあたつてきただけですよ。何をもめてたんです？ ウイリアムとですか」

「え？」

いきなり当たられてステファンは素直にうなづいてしまう。

「そんなことだと思いましたよ」

魔道師に浮かぶ心配げな表情。

「彼はあなたが裏切るかもしないと思つていてるんですよ。あたしにしたら彼のほうがよっぽど危ないと思想ですが」

密やかに言う魔道師の言葉にステファンは眉を上げる。

「どういふことだよ」

「さあ、言葉の通りですが。ただこれは、廊下で話すことではありません。聞きたいのならあたしの部屋に来てください」

後ろを振り向かず歩き出す魔道師の後をステファンはただ追い

ていいくしかない。 その先を聞かなくては。

「 一体何をこの魔道師は言つつもりなんだ。

ばたりと閉められた戸に鍵をかけるとダーランは椅子に腰掛けてステファンに対に置かれている椅子を手で示す。

「 さつきの話だけど」

座ると同時に飛び出す声に魔道師はわかつてゐる、といつゝように手を少し上げる。

「 ウィリアムがこの策謀に関わつてゐる理由は何だと思いますか」「 三年前の義憤。 それ以外に何がある？」

「 いいえ、その通りですよ。 それが問題です」

相手の思い通りの答えに魔道師の口元がにまことに上がる。

「 コーラル様が王になつた事で昔の『ご自分のやつた事はなんだったんだろう。 無駄だったのかと思つてらつしゃるわけですよ。 それは、アリストローザ様も一緒ですが』

分かりきつてゐる事をとうといと喋る魔道師を、初めて見るようステファンが眺める。

「 だから、それがどうしたと……」

「 ハーラル様が還俗なさつたらどうなんです。 魔道師でなくなつたら」

「 魔道師でなくなつたら……？」

「 そうです。 例えばクライブ様が本当に王の務めを果たせないお体だつた場合はどうです」

畳み掛けるように言われる事に体の自由を奪われてステファンは身じろぎ一つできない。

そうだつた場合、コーラルが王になることに何の支障も無い。魔道師が王でない時にウィリアムやアリストローザ、ハーコート公、ダリウスらの反旗は降ろされるのだろうか。

「 正等な血ゆえに」

「 ぼくは……違う。 コーラルに遺恨があるのでから」

「 だからですよ。 サイトスへ行かれた時に良ぐご自分で確かめられ

る事が肝要だと思いますよ、

ダニアンは言いながら立ち上がりて戸を開けた。

「さあ、出でつてください。あたしは一人になりたいんです」

肩を落として出て行くステファンの後ろ姿を見送つて。

「さて、次は」

眩く魔道師の面は凍つた湖のような冷たさ。

誰が言つたろうか。

魔道師は外見と内面が上位になるほど違う場合が多い と言わ
れている。

ダリウスは長い時間馬車に揺られて疲れたのか、うたた寝をしている父親にそっと上着をかけると起こさないように部屋を出た。廊下を歩いていると自分が入ろうとしていた部屋から誰か出て来る。見るとステファンだった。声をかけようとしたが、彼があまりに深刻な表情をその顔に浮かべていたため、そのまますれ違ったのだが。彼はそれさえ、気づかなかつたらしい。

「ダニアン、入つていいか」

応えの代わりに戸が開いて中から中年の魔道師が顔を出した。気の抜けるような笑顔にダリウスはさつきのステファンの事を聞きそびれてしまう。

「呪文の練習をと思つたんだが」

「ええ、よろしいですよ。まったく術を行うのがダリウス様でございました。ウイリアムなんかじゃとても出来そうにありませんからね」

「そんな事もないだろ?」

「の方は眞面目にやろうとは思いませんよ。呪文は適当なんて通用しません。一言一句間違えてはならないんですからね」

魔道師の言葉にダリウスも身が引き締まる。

その様子に魔道師は笑つて椅子を勧めた。

「そんなに緊張なさる必要はありません。この前でほとんど出来ていらしたんですから」

何回かの呪文と印を組む練習のあと。

「じゃあ、失礼する」

立ち上がりかけたダリウスに魔道師は顔の笑みを顔に貼り付けたまま問う。

「ダリウス様は王がコーラル様では本当にだめだとお思いですか」「ダニアン? 何を言つてゐる。おまえ達は何のために危険を侵し

てモンド州に来たんだ？　わたしを説得しに来たのでは無かつたか

「アリストローザ様やステファンはそうでしょうが。わたしは、ハーハート様をお助けする事を申し上げに行つただけのつもりです」

「いけしゃあしゃあと言つ魔道師にダリウスの顔が曇る。

「あなた様は個人の感情で動く事は出来ないと言いたかつただけです。他の方と立場が違うのは分かつていらつしゃると思いますが」「だから？」

「コーラル様はクライブ様に比べて政務に精通していると言つているんですよ。今までの因縁うんぬんはさておき、彼が還俗して王に即位する事がそんなにこの国にどうて悪い事か、どうかという事をお考えいただきたいのです」

あまりの正論にダリウスは考え込む。

この国においては王座の略奪など今まであった試しはないが、他の国ではおうおうに起こつてている事だ。しかし、それで王が変わつてその後、その王が立派に国を導いていく事があるのも事実。どういう理由で王になつたかより、その王の施政のあり方のほうが問われるのも事実。

所詮、王の資質とはどう国を動かしていったのかといつた後の評価によるものなのだ。

しかし。

「クライブ様が今どういう状態なのかを知る必要がある。いいが、我々は理に適つた王を選ぶ責任があるのだ」

ダリウスにまつたくですと頷いた魔道師。

「勿論です。だから良く考えてと言つております。サイトスへ向かう中で、即位式に向かう最中で、お考えください。そして、周りに惑わされない」自分のお考えで決断をお願いいたしますよ

穏やかな顔を見せる魔道師の言葉は顔ほどには甘くなかった。

一行がサイトスへ近づくほど、顔を含むすどぎくしゃくとするのはなぜなのだろう。アリストローザは顔を下に向けているステファンとくだらない軽口を言つてゐるもののは気持ちがここに無い様子のウイリアムに首を傾げる。

ダリウスにしてもいつしか寡黙になつてゐる。

いつからなのか、それとも初めからこうだったのか。

唯一変わらないのは魔道師の男だけ。

「ダニアン、ちょっと話があるんだけど」

休憩に寄つた宿での昼食後、日よけの下、大きく開かれたバルコニーに置いた長椅子に腰掛けている中年の男にアリストローザが話しかける。

「話ですか」

どうぞ、と男は長椅子の端へと寄つた。

「最近ウイリアムや、ステファン。おまけにダリウス様まで様子が変だわ。何か知つている？」

「さて、あたしにはどこが変わったか分かりませんが」不思議そうに聞く魔道師にアリストローザは息を吐く。

「他人行儀だし、いつも一步引いたようにお互いを牽制しているわ」

「そう見えるのはあなたが他の方にそうしているからでは？」

「わたしが？」

困つたように聞くアリストローザに魔道師はあつさりと言つ。

「彼らがあなたと同じように思つてゐるとは考えておられないでしょ？ 分かっておられますよね、アリストローザ様」

それは前から思つていた事だ。

自分と同じような思いで誰もがサイトスへ向かつてゐるなどと。

そんな子どもじみた事を思つてゐたわけではない。ないが、モンド州にいるときはもっとお互いがつながつてゐる、そう感じていたのに。

「人はお偉い理想を掲げていたとしても自分の思い込み以上の事から外れることなんて出来はしませんよ。あなたが見てるあたしだつたのに。

「人はお偉い理想を掲げていたとしても自分の思い込み以上の事から外れることなんて出来はしませんよ。あなたが見てるあたしだつたのに。

て違つてゐるかもしだれない。だからと言つてあなたがおかしいのでも何でもない。人の内面なんて理解しようとしたってしようがない。したと思つてもそれは勝手に自分のいじょうに思いこんでいるだけですよ」「

優しそうに話す内容の何と救いの無いことか。この男は、魔道師とはこうじるものなのか。

食い入るように見返すと、魔道師はにやりと口の端を上げた。

そこでアリストローザは確信する。彼らは皆、ダニアンの洗礼を受けたのだ。なんて男というものは簡単に洗脳されるのか。

「ダニアン、何を企んでるのか知らないけど。今度そんな事を言つたら酷いわよ」

アリストローザの言葉に一瞬ぽかんとした魔道師は今度はくくつと笑う。

「覚えておきましょ。アリストローザ様」

爽やかな風が小さな竜巻を起こしてバルコニーに落ちていた落ち葉を巻き込んで高く飛ばす。

「あたしが言つたことも 後で正しいと分かりますよ」

ひらりと落ちてきた葉を指で掴むとダニアンは粉々に握りつぶした。枯れ葉のようにこなこなに。

口の端に笑みの名残を残したまま、ダニアンは立ち上がり立ち去つて行く。アリストローザは取り残されてしまはらく椅子に座り込んでいた。

46・抱きしめたい（前書き）

今回は少し、短いです。

近づいてくる足音に気がついて後ろを振り返った彼女はおっと言つ声を聞く。その声の主は彼女の存在に気がつくとその足を止める。

「あ、アリストーザ」

「ウイリアム、何、どうしたの？」

いや、とか何とか口の中で「も」も「も」も「も」と心地悪そうに体を揺らしていた。

「ねえ、ウイリアム。ダニアンが何をあなたに言ったのか分からないけど。惑わされないでよ。コーラルから王の権を取り返す、わたしたちの目的はこれでしょ？」

「おまえ、本当にそう思つていいのか？　コーラルが還俗したらどうなんだ？　おまえにとつて問題なのは、魔道師が権力を持つ、それだけだろう。王の血を受け継ぐ継承者としてのコーラルがいたとして。その男に何の遺恨がある？」

「ウイリアム」

そんな事を考えていたのか。コーラルの還俗。そんな事は思つても見なかつたが。言われてみれば、コーラルは先王の双子の弟なのだ。今の王だったクライブはまだ、子どもがいない。とするなら継承者としては何の問題はない存在。だが、本当にそれでいいのか。

「誰が統治するとしても良い執政者ならいい。それはそうだけど、わたしたちには違う役割があるわ。その王座が正しい継承で得られたものなのか。それは国民には関係ないことかもしれないけど、わたしたちには多いに関係がある。その真偽を見定める役目を背負っていると思うわ」

「そうかな」

「さうよ、知つていい。それだけでわたし達は見逃す道を外れたのよ。その結果、コーラルが王になつたのならそれでいい。でも、何

もしないのは反対よ。あなたはどうなの?」

「おれは そんな大義より何より」

ウイリアムの手がゆっくり伸びて座っているアリストローザの顔を触れるように通り過ぎ、髪を一房指に巻きつけるように掴む。

「おれは……おれはおまえが一緒に行くといつならどこにでも行く。主義主張より何より、おまえを守るためにおれはいるのだから」

言つてしまつてから、ああ、まだと舌打ちする。

今はダメだと。

この戦いが終わるまでは手を出さないと誓つていたの。

それでも姿を見ると追つてしまつ。

声を聞くと話しかけてしまつ。

近くにいると 抱きしめたくなる。

おれは悪い術にでもかかつてしまつたのだろうか。一度、見せてしまつた心を閉じておくことが出来ない。無数の小さい穴が開いているかのように。

流れ出てしまつ、おれの思い。

言つてしまつ、自分の思い。

「いつでもおれが側にいる。おれはおまえを裏切つたりしない」
掴まれた髪からウイリアムの感情が流れたようアリストローザは、そのまま動けない。

いや、そうじゃない。動きたくない。これは わたしの意志。

「のまま、ウイリアム一人言わせておくのか。いえ、それはだめだ。

「ウイリアム、わたしあなたが側にいてくれて……うれしいわ

ためらいがちなアリストローザの言葉に彼の手は、髪から離れて頭に差し入れられる。そして引き寄せられる。

はつきりと好きだと言われたわけでもないのに。うれしい、

その一言だけでおれはこんなに満たされて、強気に出られる。

彼はアリストローザの意向など関係ないよう激しく口付ける。

だが、以前の時とは違っている。なぜなら、ウイリアムの首には細いアリストローザの腕が巻きついていたからだ。

足を進めるたび、グシュグシュ音がして水が染み出してくる。歩いていた男は後ろから重い足音を立てて迫いてくる、大柄な人影をややうんざりした様子で待つ。

レイモンドール国北部のモンド州。その州の半分を占める広大な山脈、ゴート山脈。

その最奥。国一番の標高を持つ山、ハンゲル山。

三年前まで、ここは首都サイトスと同じくらい、いや、それ以上にこの国にとって重要な場所だった。

レイモンドール国を強力な結界によつて封じていた魔道師、イーヴァルアイ。彼によつてこの国は五百年もの長きに渡り、他の国とは隔絶されていた。

その本山がここハンゲル山の廟だつたわけだが。今は、イーヴァルアイの死後、廃墟になつてゐる。

「ここなの？ 疲れちゃつたわよ。汚い所ね」
酷く低くて太い声が女言葉で不平を口にする。

「申し訳ありませんね。少しあ待ちください」

全然悪いとは思つていらないだろう調子の男は、そつ言づと印を組む。

『変化！ 変質！ 変転せよ！ 石岩、遡及し水をたたえよ！』
呪文の後に起こる変化。

床の石板は崩れ、中に落ちていく。大きく開いた穴の中には厚く氷が張つていたが、それも大きな音とともに割れて細かい欠片になる。

男は後ろに立つ人影に振り向かず、心配げに視線を前に向けたままだ。

「お早くお願ひします。ハイラ様」

「ふん、偉そうな口を利くんじやないわよ。誰がおまえをくつつけたと思つてゐるんだい？ おまえは黙つて見ておいで。わたしが見つけてやらなきゃあおまえは、あのまま仮死の術で生殺しだつたんだからね」

ひしゃりと男を黙らすと大柄なハイラと呼ばれた者は、穴のまわりに魔方陣を描いて印を組む。

『我の思いし統合の祈願、腐朽の者、復円の者、不死の者、ここに現し給え』

呪文を言しながら、腕をまくりあげて氷の中に手を差し入れる。

一、三度探すよつに手を回した後にぐいっと何かを掴んで、思い切り氷の欠片を飛び散らせながらその探し物を引き上げる。

「ああ、濡れちゃつたわよ」

引き上げた物を近くに降ろすとハイラは、自分のドレスを見て悔しそうに言つ。

「いひいう西域風の服を着てみたいと思つてたのに。インダラ、新しいのを用意しなさい」

「分かつてあります。今はそれよりバサラ様のお体の事が心配です」

「そうね、体を離さなきや」

寝かされた男は意識が無いのか、青い体をびくりとも動かさない。それを見ながらインダラと呼ばれている男は、自分の腰から大振りの剣を引き抜く。

卵形の顔につり上がつた一重の黒曜石の瞳。ややのつぺりとした印象の顔はここいら辺の國の者ではない。動くたびにゆれているのは黒の絹糸のような頭の頂点近くで結つてある長い髪。口角の下がつた口は今は真一文字に引き結ばれている。

インダラが太いバスターードを振りかぶる。たあい躊躇いなく振り下ろされた剣は寝かされた男の腹部を真横に切断した。直後に切り離された下半身の様子が変わる。

斬り離された下半身が砂のよう崩れていくのを剣を持った男が

見送つて、はあと安堵のため息をつく。

「ハイラ様」

「わかつてゐるわよ」

ハイラと呼ばれている者がインダラにつるをそぞうに手を振る。確かに着てゐる物は文物だが。普通の男よりも丈はあり、並の男より、厚い筋肉に覆われていそつた体は分厚い。顔つきもごつごつした印象であるで何かの余興で屈強な兵士が女装しているかのようだ。

だが女、であるらしい。

あらかじめ描いていた魔方陣に、気がついたかのように流れ出した血まみれの上半身だけの男を運んで、女は印を組んで長い呪文を唱える。それは半刻ほども続く。やがて、疲れた、の大声と共に唐突に呪文は止んだ。

「終わりましたか」

「ええ。でもなるべく早く体を準備してひつつけないとね」ハイラの言つた後を引き取るように、寝かされていた男が身じろぐ。

う、ううと声を出した男にインダラと呼ばれた男が走りよつて抱き上げる。

インダラの腕の中で薄目を開けた男はにっこりと笑つた。

「久しぶりだな」

笑つた男の美しさに側に立つハイラが息を飲む。

亞麻色の流れるような髪が縁取る細面の顔。完璧な曲線を描く柳眉の下、長い睫毛に隠れたようにある、色素の薄い水色の瞳。細く通つた鼻筋。薄いが滑らかな花のような脣。

どれもが女性を形容するような物なのに彼はしつかりと男の顔をしていた。

自分の主人の顔に寸の間、見惚れていた事にインダラは口元に笑みを浮かべる。

「バサラ様、お氣づきになられましたか。お会いするのは、三年ぶ

りですよ。バサラ様に仮死の呪符を付けて頂いていたおかげで、こうしてお会いする事ができました」

「……インダラ？ そうか、頭がひつついたようだな。良かつたな」

晴れやかに笑うその顔は、自分の体が半分無い事など気付いていないかのようで。 しかしその笑顔も、インダラに抱かれている自分を見下ろしている女の姿に気づくと、横を向いて小さく毒づく。

「何でハイラが来るんだ？ くそつ」

しかし、仕方ないと引きつった笑みを浮かべての方を向く。

「ハイラ姉さま、助けていただいてありがとうございます」

「バサラ、あなたが死ぬのはわたしも嫌だもの。わたしは綺麗な物が大好きなんだから。久しぶりに見たけど、あなたはやっぱ綺麗な男ね。いいわよ、この貸しはあなたの体が元に戻つたら返してもらうから」

唇を舐めながら、ハイラは睨んでいるとしか思えない流し目をバサラに寄こす。

「今度こそ、あなたの寝所に呼びなさいよ、バサラ」

一瞬の沈黙の後、バサラは観念したようにうなづく。

「……わかりました。じゃあさつそく行動をおこしましょ。貴方の僕に乗つてサイトスへ行きましょうか、姉さま」

「あら、このままベオークに帰らないの？」

「ええ、姉さま好みの体を捜しに行きましょう」

バサラの返事に気を良くしてハイラは自分の僕を呼ぶと、体に触れて呪文を唱える。

『变成、变転、变容、我的命により辺幅、变化せよ』

僕の体はかさかさと皮膚が捲くれ上がり、それは無数の鱗になる。体は長くなり、それに耐え切れなくなつたのか手をついて膝をつく体勢になつた後、伸びていく尻尾。口は大きく裂けて前に長く突き出していく。 その口には鋭い牙が生えていた。

それにバサラを抱えたインダラとハイラが跨る。

「サイトスへ行け」

最早人では無いおおきな咆哮で、命に応えた一頭の龍。それは、今は廃屋になつていた古い大きな廟の壁を破ると、空に舞い上がり、サイトスに向けて飛び去つてく。

三年前、クロードが倒したはずのイーヴァルアイの兄、バサラ。彼はやはり生きていた。

サイトスに着いたダリウスは、父親らと別れて王城に入る。傍らには術によつて操られている使い魔が化けているマーガレットを連れて。

本当は、城下の貴族の城にでも居たかつたのだが王の係累では仕方ない。普通なら城下に置かれる事こそ、怒つてしかるべきなのだから。

同じ州を統治していると言つても、モンド州は特別なのだ。王の姻戚関係はサイトスの城内にある、小富が当座の住まいとして用意されていた。

そして、ダリウスにとつて今の王コーラルは叔父にあたる。

その上、妻は前国王の姉である。さればどうあっても城下に居を移すなど言えようはずもない。

「父上、それでは」」お別れしますがくれぐれも自重なさつてくださいね

「そんな事はわかつてある」

ハーコートの言葉になおもくれぐれもと重ねてダリウスは父親を見る。思いもよらず、自分の父親が向こう見ずな事を最近知ったダリウスだった。

別に借りて用意させていた商館にアリストローザとハーコート、ダニアンが落ち着いている。

「いつ、クライブ様の所へ行くつもりだ」

「左様ですね。お疲れでないなら今晚にでも」

ダニアンはハーコートに応えながらアリストローザを見る。

「夜でも地下宮からの出口はお分かりになりますか」

「たぶん。そこまでならね。そこからは分からぬわよ」

「ええ、充分ですよ。夜が更けないと人目につくといけませんからね。それまで体をお休めください」

結局寝られるはずも無く、部屋をうろついていたアリストローザは戸を叩く音がまだ数も叩かないうちに戸を開ける。

「ああ、びっくりした。あれから扉に貼りついていたんじゃないでしちゃうね」

「気が気じゃ無くて貼りついていたのと同じみうだつたわ。ハーロート様は？」

「下でお待ちです」

アリストローザは男装し、ハーコートも黒っぽい飾りの無い目立たない格好になつていて。「では参りましょうか」

サイトスの城壁からわずかに外れた灌木がまばらに生えている雑木林。ぱきぱきと踏み込むたびに音が鳴り、口から声が漏れそうになる。

傘がかかつたようにぼやけて見える月は満月に近い。冷たい色で人間のする事を見ているような夜更け。

「たぶん、ここだわ」

あのときは日中だつた。しかもこんなに草木がぼつぼつと生えていなかつた。心もとない言い方になる。

「これではないか。金属の板がある」

ハーコートがアリストローザの立つている所から十歩ほど右の場所を指さす。

「ああ、たぶんそうですね。これでしちゃう」

魔道師はしゃがみこんでそれに触れる。

「アリストローザ様こちらに」

魔道師の側に彼女もしゃがみ込む。レーン文字を唱えながらアリストローザの額に触れると静かに目を閉じる。

それからいくらもしないうちに彼は手を離した。

「分かつたの？」

「ええ、たぶん」

印を組ながら魔道師は金属板の模様を動かす。それは最後のパチリとかみ合う音と共にぎしりと動く。

「あたしが先に降りますからついて来てください」

四角い穴を覗くと暗くてまるで井戸の底のよう。先に何の躊躇いも無く降りていく魔道師の後を遅れないよう続ぐ。後ろを気にしながらハーコートも穴に降り、小さい足場を気にしつつ進む。ぼんやりとしか見えないのは、暗闇の中で光るのはダニアンの持つ灯りだけだからだ。

前にある灯りだけを頼りに右へ左へと歩くつむじが主城ならどこにあるのかも分からなくなっていた。

「たぶん、ここでしょう。新しい足跡がいくつもあります。で、開けますか」

「開けてくれ」

ハーコートの言葉に魔道師は印を組んで鍵に触れる。ばしりという光を伴つた音とともに鍵は外れる。それを下に丁寧に置くと牢屋の戸を開けた。

なだれ込むようにわれ先にと入るアリストローザとハーコートの前に一人の青年が寝台の上に寝かされていた。

酷くやつれているその顔は、アリストローザの知つてゐる顔と同じ。しかし、アリストローザの記憶の中の顔とは少しづつ違う。顔の輪郭が、首から肩にかかる線が。記憶よりも太く骨ばつてゐる。髪は髪の色は同じ。外で輝いて冷涼な光を投げかけていたその月に似た髪色。目は、目はどうなのだろう。彼の瞳と同じなのだろうか。振り起こしたかった。駆け寄つて、その目が開くのを見たい。そんな乱暴な欲求をすんでのところで理性が抑える。

「この香りは……いけませんね。呪香の影響を受けていると思われ

ます」

魔道師が袖で口元を押さえながら後ろに向く。

「早く出ないとあたしたちもやられますよ」

「わたしがお連れしよう」

ハーコートがあつさりと青年を担ぐ。

牢獄の部屋を出るが廊下には誰もいない。これはどうじうことか？ 中にいる者が動かないと楽観しているためか。反対側からの襲撃など考えていないという事か。

いざれにしても今はありがたく逃げさせてもらひおつ。

「さ、早く」

ダニーアンが灯りを持って来た道を引き返していくのを一人も追つた。 梯子のところでハーコートはクライブを背負う。 その背中を押さえながらアリスローザも続く。 一足先に上に上がったダニーアンは自分の真上にかかつた大きな影と音に驚いて天を仰ぐ。

「あ、あれは龍？」

「こゝ、西域では見られないはずの龍という生き物。 確かハオタイなど東域に住むという魔獸。 めったに姿を現さないはずがどうしてこのレイモンドールにいるのか。

低空で飛行するその魔獸はあつといつ間に主城の方へと姿を消した。

「どうしたの？」

下からのアリスローザの声で我に返つたダニーアンがハーコートに手を貸す。

「急ぎましょ。 商家まで魔方陣で飛びます。 このまま担いでいて誰かに見られると困りますから」

そう言つと魔道師は地面に魔方陣を描いていく。 「のとじる、何回も描いたお陰か、すらすらと手は淀みなく動いていく。 しかし、あんな複雑な模様を数回描いただけで頭に入つていいこの男は、もしかしたら物凄く厄介な人物なのかも知れない。

アリスローザは黙々と仕事を進める魔道師を踏みするように眺

めた。しかし、見たところでこの中年の魔道師の考える事などいつかがうことなどできはしないのだが。

「おいでください。中に入つたら目を閉じて」

全員の目が閉じられたのを確認して魔道師は懐から小さい羊皮紙を取り出す。今自分が出て来た穴へ印を組んで紙を落とす。それは小さい鳴き声を出すと二十日鼠の形を取つて走り去つた。ダニアンは何も言わず、金属の板を動かして穴を塞ぐと魔方陣に向かう。

彼らの去つた後に残つた魔方陣。風が消し去るまでに誰かが来る可能性を魔道師は考えていなかつたのだろうか。

それとも？

ダリウス達がいる小宮の各部屋にある小さなバルコニー。そこ
に立つウイリアムの頭を占めていたのは、アリストローザの事。
あいつは成功したろうか。 おれが一緒に居てやりたい、そ
んな事ばかり考えてしまつ。

自分の思いを打ち明けて、口付けたあの日。

それに答えてくれただろう、彼女の。 アリストローザの言葉。

そして唇の感触。

どんなに、嬉しかつたか。

どれほど離したくなかったか。 おれの存在のすべてだと思つた
あの日。

これからの一人の事しか、考えられない……今は。

その自分の思いの中に埋没していた、ウイリアムにかけられる声。

「やあ、お茶を一杯もらえないかな。 のどが渴いてさあ」
いきなり一人だと思つていた部屋の中からの声。 驚いてウイリ
アムが振り返る。

そこには、東方の顔を持つた男が大事そうに大きな物を抱えて立
つていた。

それは、そのままやり過(こ)せないほどの違和感を抱かせる物。
男は自分と同じくらいの男を抱いていた、が、彼には、あるは
ずの物が無い。

体の半分。 腹部から下の部位がまったくないのだ。 剣ですつ
ぱり着ている物ごと斬られたかのようだ。 しかも、やつきの呑氣
な声はこの男のもの。

「驚かしましたか、すみませんね。 主人がどうしてもあなたが良い
つて言うんでね」

穏やかに言つ、男を抱えた者の言葉。しかし、ウイリアムには意味などさっぱり分からぬ。おれが良いつて、どういう事だ？

「何だ？ 部屋を間違えたのなら……」

「間違えようはずは無いよ、ウイル」

自分の愛称を呼ばれた事にウイリアムの口は開けたままになる。

何でおれをウイルと呼ぶのだ、この男は。

そこで、うつむいていた抱かれている男が顔を上げた。その顔を見た、ウイリアムは驚愕のために床に座り込む。その顔は紛れも無いおれの、おれの大事な。

「……トラシユ」

「そりだよ、会いたかったよウイル。わたしを助けてくれ」
そんなはずは無い。だが、この顔は、この声は、ウイルといつ名前を呼ぶのは、おれのトラシユじやないのか。

麻痺したように、体に力が入らないウイリアムの目から一筋流れしていく涙。

「それは何の涙？ わたしがむざむざ殺されるのを知りもしなかつた後悔の涙。それとも地獄から舞い戻ったのを喜んでくれる涙かな」
トラシユの声で紡がれる言葉の残酷さにウイリアムはうなだれる。
それを楽しそうに見るトラシユは堪えきれずに笑う。

「ああ、だから一度痛い目に会つた人間をからかうのは止められないと」
「うう、どうだ、インダラ、わたしの言つた通りだろ」

「本当にあなた様も遊びが過ぎる。ご自分の状況を考えてくださいよ。笑い事じやないですよ。体が半分無いんですから。お茶なんて飲めるわけが無いでしょ」

小言を言つ男はウイリアムのことなど頭から消し去つていいよう

で。

「おまえはトラシユじやない。一体誰なんだ」

「ふーん、分からぬ？ なら、これでどうかな」

田の前で男は印を組む。体の境界がぼやけて滲む。ようやくはつきりしてきた先に見えたのは。

顔に隙間が無いくらいにある皺。垂れた瞼の下にあるやぶ睨みの田。長く伸びて絡んだように床に垂れる髪。

「導師…… わお」

「そつそつ、おまえの飼い主はわたしに良く懐いて可愛かったな。だから最後は体を使わせてもらつたよ。ああ、これは言葉のあやだけど。体の見た田と記憶、いただいたのはね」

「やりと笑つた顔がまたもや戻つて 今度の顔は。

「イーヴァルアイ？」

その名前を聞いてウイリアムを見る田が細くなる。

「ははーん、わたしとイーヴァルアイを見間違えた? イーヴァル

アイはわたしの妹だよ」

「妹? あいつは男だつたはずだ」

くくつという笑い声。

「そうだな、あなたの飼い主はイーヴァルアイを男として好きだつたんだつけ? そりや悪かつたな、勘違いで」

そこまで言つてまた、声を上げてその男は笑つた。

「教えてあげるよ。三年前のある時の事を」

父親に招待するようこと命じられていた。その事とは別にトラシユはモンド州州公の次男、ユリウスが我がボルチモア州に来るのを楽しみにしていた。あと、少しでここに来るはずとの二、三日そわそわと落ち着かなかつた。それが、さつき戻つて来た間諜に出していた兵の報告の内容に唖然としていた。

トラシユは持つていた安酒の入つた杯を取り落とす。音を立てて転がる杯に見向きもしないで従者の胸倉を掴む。

「ユリウスの乗つた馬車が襲われたというのは本当なのか」

「は、はい。しかし、ユリウス様もクロード様もご無事だと報告が従者がトラシユの剣幕に驚いておろおろと話す。

「たつた今、別の者からユリウス様一行が無事にプリムスのサンディエンスホテルにお着きになつたと報告がありました」

は、と安堵の息を吐いてトラシユは従者の服を離す。

「では、明日の朝わたしがお迎えに行く」

「ええ？」

トラシユは急に機嫌を直してテーブルの上の瓶を見やつた。昔の悪い癖だ。こんな不味い酒を飲んでしまうのは。

その晩、仕事を終えて自分の居室に帰つて来たトラシユはバルコニーに面している掃き出しの窓が開いているのに気づく。使用者が空気を入れ換えた後、閉め忘れたのだろうかと窓辺に行くと。カーテン越しに人影が見えた。

「曲者か、姿を見せる」

壁に飾つてある剣を素早く取り上げて構える。そしてじりじりとゆっくり近づいて、カーテンを思いつきり引く。が、そこにいたのは。

「ユリウス？」

そこにいたのは、見間違ひなどでは無い。亞麻色の長い髪を結

わざに背中に流して深緑の服を着た……彼。しかし、そんな事が?止まつてしまつたトラシユにその人影は近づいて流れるような仕草で彼の手を取つた。

「あなたにお会いしたくてこの夜分、馬を飛ばして参りました。ご不快ですか」

「不快など思つはずがない。が、どうやつてここに入り込んだんだ? 従者の誰もそんな事は言つてなかつた」

おかしいと、こんな事があるはずがないのは知つてゐる。そして、ユリウスがこんな態度を取るはずが無い事も、知つてゐるはず。それなのにここにいるのはやっぱりユリウスとしか思えない。

「トラシユ様、わたしを好ましいとお思いになつてゐるんでしょう?」

握つた手を離して、上にすべらせるとユリウスはトラシユの両頬を挟み込むように持ち自分のほうへ引いた。

「ユリウス?」

これは自分が望んでいた事だが。本当にそつなのか。自分の唇を貪つてゐるのは、モンド州公子のユリウスなのか。トラシユは、頭の芯が痺れて何も考えられなくなりそつた自分を叱咤して何とかユリウスの体を離す。

「何のつもりで、こんな事をするんです?」

「何の? あなたが望んでいる事をしてあげたのに。これ以上の事も望んでいるみたいだけど それは、無理。だってユリウスはわたくしの物だからね」

にやりと笑つた顔にヒヤリとしてトラシユは、ユリウスを突き飛ばすと床に投げられていた剣を拾つ。

「妖しか。成敗してやる」

「成敗? あはは面白いなあ。ねえ、トラシユ、あんたはいつ見ても楽しかつたよ。純真で正義感があつて」

すでにユリウスの言葉遣いではない。 声でもない。 印を組む

その男は姿を変える。

年寄りのローブ姿。床に着くほど長い髪。

「導師様？」

驚くトラシユに導師はからからと笑いながら言つ。

「これが最後の教えじゃ、トラシユ。これが一番言いたい事だつたかもしだ。人はどんなに善行を積もうと誰もが幸せになれるわけじゃない。いつ、関わりの無い悪意が襲うか分からん。しかし、それが人の世。つまり」

導師は一飛びでトラシユの真横に並ぶと、首に片手を回して引き寄せる。

「おまえはババを引いたんだよ。楽しかったよ、そしてさよなら」逃げようとする前にトラシユの胸には波打つてある長剣が深々と刺さつていた。

剣を引き抜くと、崩れ落ちる男の体を足で避けて老人は反対側の窓辺を見る。

「インダラ、もういいぞ。この男を捨てて来い」

はい、と姿を現した男が軽々と床の死体を担ぐ。

「だけど、口付けるのはやりすぎですよ、バサラ様」

「だつて、記憶をいただきかなきやあ。それに死ぬ前くらい何か良い事あつてもいいかなあとさ」

「あ、とわざとつくため息。

「正体ばらした時点で良い事じや無くなつてるじゃないですか。言

い訳は止めてください。演出効果を狙つたんですね」

「分かつていてるなら、聞くなよ。凄い絶望的な顔をしていたよ。信じていた者に裏切られるつて悲しいものだよな」

老人は、おおげさに手を広げて見せる。

「あなたにそんな経験がありましたかね？ 逆なら腐るほど見ましたけど」

「インダラ、口が過ぎるよ。だつてサンテラなんてわたしを裏切つ

てカルラに寝返つたじゃないか」

はいはい、と宥めるようにインダラは男の死体を担いで窓辺に行

く。

「確かに。でもサンテラが裏切る事なんかお見通しだつたでしょ？ カルラ様に兄上を殺させて教典を盗ませた後、カルラ様」と回収するおつもりだつたくせに。カルラ様に経典の事を教えたのもバサラ様、あなただつてことぐらい分かりますよ」

「そりなんだよ」

そりなんだけどねえ、と術を解いて元の姿に戻つた男、バサラが不服そうに眉を寄せた。

「こんなに遠くへ行くとはね。ついでに結界まで張つりやつて。兄上殺害の件で強請つていう事きかすつもりだつたのに。上手くいかないもんだよ。わたしはついてない」

「本当に貴方様は困つた方ですよ。放つておくとどんな非道な事をしでかすか分かつたもんじやないんですから」

「それ、褒めてるの？」

「厭あきれてるんです」

バサラの僕はそのまま窓の下に飛び降りて行つた。

「と、いう事があつたんだよ。ウイル」
 バサラは、楽しい昔話を聞かせたかのように笑顔で語り終える。
 「黙れ！ ウイルなんて呼ぶな。一体どういつつもりで導師に化けたりしたんだつ」

ウイリアムはバスター・ソードを取り上げると侵入者に向けて構えをとつた。

「まあね、ドミニクを扇動してユリウスを捕まえて。あ、話しに出てきたカルラとは、ユリウスの事だよ。あいつはわたしの妹だ。魔道師でベオーク自治国の者。イーヴァルアイとか、ユリウスとか色々偽名を使ってたが。よしんばこの国のレイモンドールの屋台骨を搖るがせたら……なんて思つたんだけど。ドミニクもトラシュも、あの親子は本当に夢見がちで騙されやすくて最高だつたな」

あの導師を見た時に感じた違和感の正体はこれだつたのか。絶望的な感情に支配される。そして、ふつふつと湧き上がる怒り。

あー楽しかつたと笑う男に向けてウイリアムが剣で斬りかかる。しかし、主人を抱きかかえていた僕がいつの間にか片手に持つた剣で弾く。

「もう、挑発しちゃダメじゃないですか。わたしだつて、さつき生き返つたばかりで力なんて出せませんよ」

そう言いながら長椅子に主人をそつと抱き下ろすと剣を一、二度大きく振つてウイリアムを見た。

「じゃ、疲れるんでさつと済ませますよ。大丈夫、下半身には傷一つつけませんから」

言つた時には素早く踏み込まれてウイリアムは顔の手前でやつと剣を合わせた。

思い切り剣」と撥ね飛ばすと、以外にあつさりと後方へ飛ぶ。

そこへ一気に踏み込んで剣を突く。胸元に刺さつたと思ったが。それを予測していたように、ひらりと剣をかわした男は少しその場で小さく飛ぶと勢い良く走つて壁を蹴る。そしてその反動でぐるりと大きく宙を舞う。気が付いた時にはウイリアムの真後ろで背中に剣を突きつけていた。

「だから、疲れるのいやなんですってば」

軽口に似合わず、本当に疲れているのだろう。荒い息をしていた。ウイリアムは勝機を確信して薄笑いを浮かべる男の膝あたりの足を思い切り後ろ蹴りする。うめき声と共にインダラは壁際まで転がつて行く。やっと壁際で跳ね返されるように止まり、首を振つて上半身を起こす。

そのまま剣を突きこもつか、それとも体制を立て直そうかと考えていたウイリアムを男は見逃さない。

『夜陰、下弦、闇路を通り彼の者行く手を阻め』

印を組みつつ、呪文を唱える。

「何、休んでるんですか？ この場合、接近戦じゃないとあなたに勝ち目はありませんよ。だつてわたしは魔道師なんですからね」

「な、何？」

「何をつて、術ですよ。わたしは主人と違つて無駄な事には興味ありませんからね。体を頂きますよ」

黒い糸状の物が体中に絡み付いて、ウイリアムは身動き一つ出来なくなつて倒れる。

「ハイラ様、おいでください。ここでやつてしまいましょう」

男の声に応えるように長椅子に現れる人影。それは大きく、長椅子を一人で占領するほど。

「お気をつけください。バサラ様がいらっしゃるんですから」

インダラがきつい調子で言うのにその人物は笑いながら応える。

「分かってるわよ。わたしだつて自分の夫になる人を潰したりしないわ」

言いながら自分の膝にバサラの体をのせる。それに、バサラは

盛大に顔をしかめたがハイラの機嫌には何の影響も無い。

「ここで待つててね。バサラ」

低い音程でそう言うと、ハイラが立ち上がりバサラを椅子に寝かせる。そして床の空いている空間に魔方陣を描いていく。それは、さながら絵画のように複雑で美しい模様だった。

「インダラ、もう少しかかるわ。邪魔が入らないように結界を張りなさい」

「承知しました」

男は扉に呪符を貼る。その上から指で範字を書いていく。それは書いた後から煙を出すと黒く変色して扉は一枚の壁になつた。

「終わりました。男は殺します？ ハイラ様」

「そうね、暴れられても嫌だから。この魔方陣に運んだら殺しない。もつたいないけど、上半身も無駄になるわね」

顔だけこちらに向けてハイラはがっかりしたとつぶやく。

「こんなに育つてちや、美味しくないもの。食べるんなら子どもの泣き声は最高の味つけだわ」

「その意見とあなたの食癖には賛同しかねます。そういうえば、昔、わたしもサンテラもあなたの食用になる所だったんですね」

「そうだったかしら？ そんな昔の事、忘れなさい。もう食べたいなんて言わないわ」

ハイラに肩をすくめてみせて、インダラがウイリアムを抱えて魔方陣の真ん中に置く。

「まだ、殺してはだめだよ、インダラ」

そこへ今まで大人しくしていたバサラが声を上げた。

「また、何か企んでるんですか」

「いや、聞きたい事があつてさ」

「聞きたい事、ですか？」

「そう、とインダラに応える男。

「クロードの行方。今、どこにいるか聞いてよ」

「はい、と返事を返してインダラはウイリアムを抱き起しす。それは、大事なものを扱っているかのように優しかった。

「ウイリアム、声を出して『じらんなさい。声帯まで傷ついてないといいんですけど。喉の髪は取つてあげますからね』

首にきつく巻かれた髪をほどくとゲホゲホとせきを繰り返してウイリアムの顔色が戻つてくる。

「何をするつもりか知らないが、おれは何も言わないからな」

横に向いた顔をインダラが顎に手をかけて戻す。

「残念です。じゃあ仕方ないので術でしゃべつてもうりますよ」

素早く組まれる印。

『我に寄りて力を貸せんとせよ、捕縛、落手、剥縛、おまえの口蓋の主は私だ』

「クロード様の居場所を知っていますか、ウイリアム？」

穏やかに聞く男にウイリアムは逆らつことが出来ない。勝手に口が動くのをただ、驚いているだけだ。今まで直に魔道師と戦つた事が無い。その事に気付いて愕然とした。

おれは、コーラルを倒そうとしていたはず。なのにこれは。

「クロード様は一年前、国を出られました。行き先などは知りません。国の主をお持ちになつたらしいですが、それが何かは知りません」

歯を食いしばる事も出来ずに口が動くのに涙が滲む。

「うしいですよ、バサラ様」

振り返る男にその主人は楽しそうにうなづく。

「姉さま、ベオークにクロードはもう来ていました?」

バサラの問いにハイラは、いえとだけ返す。彼女にとつてクロードなど興味の範囲外らしい。しかし、そつかとつぶやくバサラはうれしそうに綺麗な笑顔を見せた。

「クロードの事だ。ベオークに来るつもりだろ？。二年前か、急がなくてはな。やっぱり早く体を引っ付けてベオークに戻ろ？。せつかく来るのにおもてなしをしなくちゃ」

「では、もうよろしいですか」

「ああ」

解、と男は術を解くとウイリアムをそつと寝かせる。この体は主人の体になる、優しく扱う理由はそれだけ。

振り上げた剣は先ほどの大振りな剣ではない。細い纖細な両刃の剣。その切つ先がウイリアムの胸に刺さる寸前、元扉だったところが大きく叩かれる。

「ウイリアム、どうした？ ウイリアム？」

それは、さつきの物音に気づいたダリウスのもの。「ダリウス様！ 来てはいけません。おれは、一緒にには行けなくなりました。彼女に、アリストローザに愛していると……」

ああ、何もかもおれは中途半端で。やはり不出来な奴だったか。愛した人を一人とも守る事が出来なかつた。おれは。

途切れた声。ダリウスの手に力が籠る。

「ウイリアム？ どうした？ 返事を、返事をしろ！」

一体どうなつてているのか、見当もつかない。

「扉を打ち破れ、早く」

ダリウスの命に従者が何人も体をぶつけるが扉はびくともしない。大きな音はするがガタリとも動かないのだ。まるで分厚い壁に体当たりしているような感触。

「ウイリアム、何があつた？」

返される事の無い問い。

流れる時間。

そこへステファンが走つてくる。

「どうしました、ダリウス様？」

「中でウイリアムが危険な目に合っているかもしない。だが、扉が開かないのだ」

ダリウスの言葉にステファンが階段を指す。

「どこへ？」

「上の階へ行きます。窓側から下に降りて部屋に入ります」

「そうか、とダリウスもステファンの後を追つて走り出した。

「ダリウス様、危険です。わたしにもお任せを」

ダリウスは従者の声に応えず、バルコニーに両手でぶら下がる。足を振り子のように大きく振つて弾みをつけた体が手を離れた拍子に下のバルコニーに飛び込む。それを追うようにステファンも続く。

足を軽く捻つてしまつて、小さく声を出してしまつたのを後悔しながら視線を部屋に移したダリウスの目前に広がつた光景。

「ウイ……リアム」

そこには、おびただしい血痕。

その血の海の中にある見知つた男。

しかし、それにはあるべき物が無い 腹から下の部位が消えていた。

「どうしました？ ダリウス様。中に何が……」

後ろから覗き込んだステファンがぐつと息を飲んだ。

「魔道師が来たんだな。くそつ」

ステファンの声にダリウスは初めて部屋の様子を見る余裕が出来る。そこら中、物が倒されているのはここで戦つたのか。そしてウイリアムの体の下に広がる魔方陣。

「ウイリアム、おまえどうして」

膝をついたステファンが見開いたままのウイリアムの臉を閉じる。胸にある小さい傷は確實に心臓を貫いていた。

「苦しまなかつたろうな、ウイリアム。ぼくが仇を取つてやる。魔道師を、コーラルを許さない」

外からはどうしても開かなかつた扉が内側からは嘘のよつにあつてなく開いた。 ウィリアムの亡骸を清めて別の部屋の寝台に寝かせる。 そのまま置いて置くことなどできはしないだろうが。

「アリスローザに伝えなくっちゃな」

ぼつりとステファンが言つ。 こんなに簡単に、残酷なやり方で人を殺してしまつ。 魔道師に、その存在に怒りを感じて振るえが止まらない。

その血を継いでいる自分にも、また。

無事クライブを救出したアリストローザ達は、ダニアンの術で宿にしている商館に戻る。

今だ彼は意識の無い青い顔をしているが、呪香の影響から抜けたためか微かに血の色が戻つてきている。

「意識が戻つたら、この薬湯を飲ませてください」

ダニアンが黒い液体を杯にたっぷりと入れて部屋に入つて来た。傍らについていたハーコートとアリストローザがその得体の知れない液体の匂いに眉を顰める。

「何？ 気味が悪いわ」

「何を言つてるんです。あたしの見たところ、呪香以外に魔薬を飲まされていた兆候があります。その、解毒剤ですよ」

「何が入つてるの？」

アリストローザの問いに魔道師は片眉を上げた。

「世の中、知らないほうがいい物もありますよ。アリストローザ様」「どういうことだ、ダニアン。クライブ様のお体に障りがあるのか」ハーコートの言葉に魔道師は仕方無く応える。

「体に悪いかと聞かれれば、あまり良いとは思いませんが。体に魔薬がある方が悪いとあたしは思いますよ。しかし、この材料については詮索しない方が貴方様のためです。聞いただけで吐きそうになる事請け合いですから」

魔道師はそれだけ言つと頬みますねと部屋を出て行つた。

それから一刻ほど経つた頃、クライブの顔が苦痛に歪んで声が上がる。

「嫌だ。クロード、行くな」

その名前にアリストローザは、はつとしてクライブに駆け寄る。宙に伸ばされる腕。 捜して彷徨つその腕を彼女は思わず握つて降ろす。

ほつとした顔になつたクライブは、うつすらと目を開ける。

「クロード、帰ってきたのか」

その青い、湖の底のような瞳は クロードと同じ。
しかし、その瞳の中にあるのは戸惑いと喪失の色。

「クロード……じゃない。誰？」

「クライブ様、わたしは元ボルチモア州の州姫でアリスローザと言
います」

「アリス……ローザ？」

反応が薄いクライブに横からハーロートが声をかける。

「クライブ様、お気づきになられましたか」

わずかに顔を横に向けたクライブの顔に笑みが浮かぶ。

「ハーロート公」

「良くご無事で。わたしはもう、一度とお側を離れません。こんな
危険な目に合わせません」

力強く言ひハーロートの言葉にクライブは目を閉じる。

「すまない、ハーロート公。わたしは 逃げていた。政務から、
そして、あなたからも」

「クライブ様」

うつ伏せになつて泣き始めたクライブにハーロートはかける言葉
も無く。

こんなにもクライブ様をわたし達は追い込んでしまつっていた
のか。 こんな若い肩に全てを押し付けていたのだろうか。
黙りこむハーロートを押しのけるように伸ばされる手。

「クライブ様」

呼びかけられて顔を斜めに上げたクライブの頬にアリスローザの
平手が飛ぶ。

「な、何をする？」

叩かれた経験が無いクライブは心底驚いて体を起こす。

「あなたがご自分の事ばかり、可哀相だと泣いているからです。本
当に可哀相なのはこの国の国民だわ。あなたは国王なのに、考えて

いるのは自分の事ばかりなの？」

「アリストローザ、無礼だぞ」

遠慮の無い彼女にハーコートが厳しくしたしなめるが。

「いいえ、クライブ様にはもう少し、王としての気概を持つていたなくては。自分の肩に重い物がのつてている？ そんなの当たり前よ、苦しくて、しんどくて当たり前なのよ。あなたは王なんだから。国のために国民のために考えて苦しんで。だから、わたし達は王を尊敬するのよ。王に夢を見るのよ。王のために命を投げ出そうとするのよ」

立ち上がり大聲を張り上げるアリストローザをクライブはただ、見ていた。

今までこんなに頭から叱責された事など無かつた。初めはその事に驚いていたが、次第に頭がはつきりしてくると男装の女性の言葉が身に染みてくる。

「そうだな、わたしは甘えていたんだ。自分の若さに。経験の無さに。だけど」

ぐらりとする体を慌ててハーコートが支える。

「クライブ様まだお休みください」

「アリストローザ、薬湯をお持ちしなさい」

ハーコートの言葉に言い足りない様子のアリストローザも渋々、薬湯を取つてくると寝台に戻る。

「体に残っている、魔薬を排する解毒剤です」

ハーコートの説明に大人しく杯を持つていき、顔をしかめながらもクライブは飲み干す。

ああ、この人は素直な人なんだ。こんな些細な事からもそんな事が分かる。あんな酷い色と匂いのする物をあつさりと。誰かがしつかりとついていなくてはならない、そう思わせるクライブに愛おしさと危うさを感じる。

しかし、他の者にはこんな姿を見せてはならない。王は内面の葛藤など臣下に悟られてはならないのだ。毅然として超然。そうでなければ、誰もついていかない。

レイモンドールの王はかつて、神のように入で無いとさえ思われていた。魔道の加護を受けて歳を取らない。魔道師が実権を握つていよつと他の者には揺らぎの無い施政を行う者として君臨出来ていたのだ。

今はそんな後ろ盾も無く、國が混乱している。大変な時に王位を継いだものだが、ここは腹を据えてもらわないといけない。飲み干した杯をアリストローザに差し出してクライブは、ハーコートにまた寝台に寝かされて目を閉じた。

それからどれくらい眠つたのだろうか。

その眠りは今までの浅い淀んだものでは無く、夢も見ないほどの深い眠り。顔を傾けると椅子に腰掛けてうとうとしている若者の姿が目に入る。黄みの強い豪華な金髪。少し上を向いている鼻。薄い桃色の唇は少し開いて。

そうだ、この若者は女性だつた。明るい晴れた空のような瞳の。しかし、口から出てきたのは厳しい言葉だつたが。だが、この者の言つことは正しい。わたしは、今まで甘やかされ、自分も甘えていた。王座を望み、王座を継いだ、その瞬間から自分は変わらなくてはならなかつたはず。

クロードの事を愛していると同時に憎み、嫉み、全てをクロードのせいにして内側に閉じこもつていた。そのことが、少しつきりと分かつたような気がして。

もう一度、目の前の女性を見つめた。その、視線に気づいたようになります。

「あら、目を覚まされていたんですか。申し訳ありません、何か召

し上がりますか？」

「いや、さつきの薬のせいで胃が痛む。何も要らない。それより、さつき、ボルチモアとか言っていたが。あのボルチモアの事か」

クライブの問いに目の前の女性はうなずいて答える。

「ええ、そうです。反逆罪で死刑になつたのは、わたしの父です。わたしも捕らえられたのですがクロードに助けられて、スノーフォーク家にお預けの身になつてました」

「クロード？」

またもうなずく女性にクライブはただの知り合いではない、と思う。

クロードの名前をいうときの彼女は、本人は意識していないだろうが、浮かべている表情はとても優しい。またも嫉妬の感情に支配されそうになつて、クライブは話を逸らす。

「そうか、君はそれで何で今ここにいるのだ。どうして女の身でりながら、そのような格好をしている？」

「それは」

そこまで言って、アリストローザはさつと佇まいを直す。

「クライブ様、わたし申し訳ないことをいたしました。高貴な御身に手をかけるなんて」

「いや、いいのだ。誰もあんな風にわたしを怒つてくれる者はいなかつた。実はとても嬉しかつた。あの後、何を言つつもりだつた？」
にこりと笑うクライブに、アリストローザも苦笑いで応えるしかない。あんな風に王に手を擧げるものなど、いるわけが無い。

「あのときは、頭に血が上つてしまつて……クライブ様の心の内など考えもしないで、好き勝手な事を言つてしまつました。でも、クライブ様。言つた事は良くお考えになつて欲しいのです。良い暮らしが出来る、人々が畏敬の念で貴方様を見る眼差しには大きな責任が背後にあります。空威張りでも、何でも王は偉そうにしておられないと国民は不安です。偉そうに臣下に命を下す。その内容が國のためなら。民のためなら。それに不満を持つものなど取るに足りま

せん

アリスローザは思わず、クライブの手を握る。

「ハーコート様の話をお聞きになつてください。厳しい声をお聞きください。甘言を持つて取り入ろうとする者こそ排するべき者です」「王は誰にも頼れない」と、言う事か

「クライブ様、厳しい事を言う者こそ、貴方様の事を考えている者です。まずはハーコート公を信頼し、彼の勧める人選にまかせてみてはどうですか？」

「そう……だな」

そう、言いながらも自分の手を握つているアリスローザの手からクライブは視線を外すことが出来ない。

君はどうなのか。どんな理由でここにいるのか。わたしを支えてはくれないのか。

会つたばかりなのにもう、好意を抱いているクライブだったが。それは、こんなに気安く他人の女性に触れられた事など無かつたからか。

クロードとどんな関係だったのか。

気になる事はなかなか彼の口からは出ていかなかつた。

「わたしは、クライブ様に期待しているんです。魔道師から実権を取り戻したレイモンドール國の王としての貴方様に。そのためにわたくしたちは、ここに来たのですから」

言えなかつた事にあつさりと答えが帰つてきた事にクライブは笑みを浮かべる。この女性は誰かと似ていてる誰か、いやクロードにだ。

自分の気持ちを臆することなく、口にする。そんな相手に会つのは、本当に久しぶりだったのだ。自分の懐に何をまとうことなく入つて来る言葉。

王になつてから、いや、生まれてからクロードに会つまで無かつたこと。そして、また。

「アリスローザ、君はわたしを支えてくれるのか」

「クライブ様、勿論……」

やつと口にした言葉に対する、答えは大きく開けられた扉の音に消されて。

「何だ？」

「アリストローザ、ちょっと」

大きく扉を開けた割には、顔を出したハーネーは急に声をひそめて彼女を手招く。

「申し訳ありません、少し失礼します」

立ち上がった彼女を引き留めたい思いについ捕らわれて、クライブは代わりに両手を強く握る。

この気持ちは何だ？ クロードの関係している者だから、こだわっているのか。

あたりまえだが、一いちを見るにも無く閉められた戸をクライブはしばらく所在無く見つめていた。

アリスローザが出ると、廊下にはハーモートが難しい顔で立っていた。その横にいたのは。

「ダニアン？ どうしてここに？」

「ここでは話せない。わたしの部屋に来て欲しい」

硬い表情のハーモートと伏目がちな魔道師を交互に見ながら嫌な予感をアリスローザは感じていた。

「一体、どうしました？」

恐る恐る聞く、アリスローザにハーモートは低く応える。

「ウイリアムが亡くなつた」

「誰が……亡くなつたと、ウイリアムって聞こえたのですけど」
口に出している声が自分の声だとは思えない。

目の前で痛ましそうな顔をしているのはなぜ？

何で、ダニアンは顔を逸らしているの？

誰が……亡くなつたって言つた？

恐ろしいほど、自分の心臓の音が大きい。 どうして？ なぜ？
それだけが頭の中をぐるぐると回つて。

「アリスローザ様、魔道師の仕業だと思われますが。我らが部屋に

入つた時には、ウイリアムは絶命しておりました」

「どうして、その時いなかつたのに魔道師の仕業だとわかるのよ」
つい、ダニアンに向かつていらいらと声を荒げてしまう。

「ウイリアムは魔方陣の中に寝かされておりましたので。犯人は外
国の、ハオタイの魔道師だと思われます。魔方陣が東方の特徴的な
様式でして、しかもレーン文字は使われておりませんから」
ハオタイの魔道師がなぜ、ここにいるの？ そんな事より。

「なぜ、ウイリアムが殺されたの？」

「推測するしかございませんが。体の一部が無くなつておりますの
で、下半身を奪われた可能性があります」

「ダニアン、お願ひ。ウイリアムの所に連れて行って、縋るように手を伸ばしたアリストローザを避けて、魔道師は目を伏せる。

「お止めになつた方がよろしいです。ウイリアムは魔術の結界を張つた中で荼毘にふする所存でござります。彼の体は呪がかけられておりますので、そのまま埋葬は出来ません」

「小さいながら、きつぱりとアリストローザの願いを拒否する魔道師。「良いから、わたしを連れて行きなさい！」ダニアン、早く」魔道師の胸倉を掴んでアリストローザが右手を大きく振り上げる。しかし、その手をハーコートが素早く押さえて止めた。

「魔道師にあたつても仕方ないだろ？、アリストローザ。ダニアンは知らせに来ただけだ」

「分かっています！ だけど、会いたいんです。お願ひです」

ハーコートは、問うようにダニアンを見る。

「お一人とも、あれをご覧になつてないから」

魔道師は息を吐く。

「いいですよ。それなら魔方陣でここから参りましょ。だが、いいですか、彼は。ウイリアムを荼毘にふすることは譲れませんからね」

うなづく一人の目の前に魔方陣を描いていく手際の良さ。この魔道師はその手で残虐に人を殺した事があるのだろうか。今までと違う目線で彼を見ているアリストローザだった。

ひんやりとした、薄暗い廊下の一角に出たアリストローザは確かにうように魔道師を見る。

「ここなの？」

「さようでござります」

躊躇ためらい勝ちに扉を開ける。最初に見えたのは奥の大きな寝台。

そこに佇む若い男の姿。

「アリストローザ、何でここに」

非難めいた眼差しを受けて、魔道師がぶつくせと言つ。

「どうしてもお会いになると毎のを押さえなんであたしには出来ませんよ」

「ステファン、わたし……」

「アリスローザ、君には見せたくなかつた」

そう、言いながらもステファンは寝台から外れてアリスローザの手を取つた。

「さあ、最後のお別れを」

来ると駄々をこねたのは自分のはずなのに、足がすくんで前に出ない。本当にわたしは、ウイリアムを見たいのか。確認したいのか。何を? 何をつて? ……。

押し出されるよつににして寝台の前に立つたアリスローザの顔の映つたのは。

血の気が全く無い透き通るよつなウイリアムの顔。いつもあなたに血色が良かつたのに。

いつも笑つたり、怒つたり、忙しそうに動いていた口元は微かに歪んで。

いつも乱れていた、レンガ色の髪は今は綺麗に梳かしつけられている。

そして、掛け布の上で組まれてゐる長い指。じつじつした武骨な大きな手。

その指がわたしの髪に差し入れられて あの、少し厚めの唇がわたしに触れて。

今までの事が急に溢れるよつに思い出されてアリスローザは口を覆つ。

わたし、彼を 。

その後はもう、言葉にならない。すがり付いて泣き出した彼女

の底はじめから上まらないなかつた。

「悪いがアリストローザ、事はまだ終わっていない。ここで一人きりにしてやりたいがそれも出来ない」

ハーコートが肩に手を置いたのを期にアリストローザは立ち上がる。ここで悲観にくれていても誰も彼女を非難しないだろうが。いや、いるのだ。彼が、ウイリアムが怒るに決まっていた。

何をやっているんだと。

何のためにここまで来たのだと。今度は見誤ることなくやりとげようと、言つてくれた彼が……怒るに決まっている。

泣くのは事が成就してからでいい。歯を食いしばつてアリストローザは歩き出す。

傍らのステファンをえ、何も声をかけられなかつた。

「ありがとう、ダニアン。帰るわ、クライブ様をお待たせしてゐるし黙つて印を組む魔道師の側にハーコートとアリストローザが寄る。戻つて来たアリストローザは、憔悴しきつていてクライブは何があつたのかと聞きたかつた。しかし、それを口にした途端、場の雰囲気が変わるので? という思いから言葉にできない。

「アリストローザ、あの」

やつと声をかける。どうしましたと寝台に寄つて来た彼女の手におずおずと触れる。

「君に何かあつたのか? とても……悲しそうだ」

はつとした顔でアリストローザはクライブを見る。いつもやつて、人の顔色を見ながらこの方は今まで生きてきたのだろうか。この國の王だというのに。誰が一國の王位継承者がこんなに心優しい、まるで子どものよつな者だと思つてゐるだろうか。

「申し訳ありません。お気遣いはどうか……」

不覚にも流れる涙に彼女自身が驚く。

「ねえ、アリストローザ。君がわたしを支えてくれるところのなら、

わたしも君の力になりたい。わたしなど何の力にもなりはしないだろうが。せめて、もし、悲しいのならがまんしないでくれ。泣いていいから」「

子どものように抱き寄せられてアリストローザは、堰を切ったようにクライブの胸に顔をうずめて大声で泣いた。

さつき、あれほど泣いたというのに流れる涙は自分の血のようだつた。いっぽ、体中の血が流れ出でなければいいのに。彼女の恋は成就する前にまたも消え去つた。

三ザンほど後、感情を全て出して泣いたせいか、ずきずきと頭が痛む。収まつた涙と、王に抱きついていた自分の行為に後悔しながらアリストローザは顔を上げる。

「クライブ様、わたし……」

言葉は、口を押さえられて続かない。

「申し訳ございません、とか。『ご無礼をお許しを、とか。そんな言葉は聞きたくない』

クライブは強く言つてアリストローザを離す。

「そんな事を聞きたいために胸を貸したわけじゃない」

傷ついた顔のクライブにアリストローザは、衣装箱からシャツを取り出す。

「では、着替えていただけます？ 涙でぐしそうですから」

「ああ」

にこりと笑つてクライブはシャツを受け取つた。

サイトスの王城では、マルトが地下宮の警備長からクライブが居ないとの報告を受けていた。

「まさか、このようになるとまでは、ずっと寝たきりでしたのに。あの場所へは一箇所しか出入り口がないはずですが」

二十四時間隙の無いように、あの場所に行く門を見張らしていたのにと警備長は首を捻る。

「内部の者が関わっているのかも知れんな」

「内部の者、ですか」

たじろいで青黒くなつた顔が、今度は白くなつていく警備長を横目で見ながらマルトは淡々と言つた。

「鍵は壊されていたのではないのだろう? 出入り口も厳重に見張つていた。そんな所から、歩けないクライブ様を連れ出したといつならそうとしか考えられない。では、ないか」

「さ、さようだ」

「関わっていた者全員、手段を選ばず、話を聞くべきだな」「手段を……選ばず、ですか」

そう言つたが? と冷たい目を向けられて、警備長は慌てて礼を取ると部屋を出て行く。それを見送つたマルトは上着のポケットをさぐる。中から小さな鳴き声。

そして、見える白い小さな姿。

「ふん、ダニアーンめ。小さかしい奴。どうにつけりだ」「手の中にはねずみを閉じ込めて少し力を入れると、ねずみは小さく声を上げてくたりと大人しくなつた。

あいつも、このねずみのようにしてやる。マルトは苦々しく思つた。ダニアーンが送つたねずみによつてクライブの居所はすでにつかんでいたのだ。しかし、マルトの苛立ちは収まらない。自分が超えられない力を持つた冴えない魔道師。そのために警備の者たちの拷問を命じたのだ。彼らは、ダニアーンの代わりだ。せいぜい苦しむがいい。

そして、ダニアーンを知らぬふりをして捕まえて殺してやる。ガ

リオール様に認められなかつたのはあいつのせい、なのだから。

明日、いや、いつそ即位式の前日に捕らえてやろうか。王への反逆を企てたとして、即位式の場へ引き出すことにしよう。にんまりと笑いながらマルトはもう一度手の中を見下ろした。

小宮の裏庭で薄い紫の煙が長く尾を引くように昇つっていく。

魔

道師が敷いた結界の中。

魔方陣の上にある、黒い塊り。それは、ぐずぐずと崩れて小さい塵ちりのようになる。

紫の煙に混じって上っていき 後は何も残らなかつた。

「すみましたよ」

魔道師の声に、一人の男が何も無い、魔方陣を見つめ、空を見上げた。

「行つてしまつたな」

「ここに、僕のここにあいつは、ウイリアムはいますよ」

胸を押さえるステファンにハーコートもそつだな、と自分の胸を

押さえる。

痛いほど青空。目にしみるほど だ。

最後まで何人残つていられるのか。一人を失つただけでこんなにもつらく悲しい。

人の命の儂や。失うつらさを改めて思い知る一人だった。

一日経つほどにクライブの体は健康を取り戻していく。何より本来、体が弱いわけでもなかつたのだ。薬と呪香の影響から抜ければ、後は滋養のあるもので力をつければいいだけ。この所、寝てばかりいたせいで体が重いと感じたクライブはハーコート相手に剣を打ち合つていたが。

「ハーコート公、あなたは一体いくつなんですか？ 息もきらきらにさつきから、わたしの方が押されている」

額の汗を拭いながらクライブが不平まじりに言つ。

「ははは。それはクライブ様が病み上がりだからですよ。少し、休みましょう」

綿布をアリストローザから渡されて一人が休んでいると、アリストローザがハーコートの置いた剣を握つて一、三度剣を試すように振つた。

「アリストローザ？」

「クライブ様、一本勝負いたしましょう」

言うが早いか、側に置いていた剣を放つてよこす。慌てて受け取つたクライブだが、

「止めよう、危ないぞ」

そのクライブの声に被さるよう振り出された剣の太刀筋の鋭さに、ぎょっとしながら剣を合わせる。

「お気遣い無く。わたし、少しは使えますのよ」

アリストローザは、合わせた剣を力一杯押し込んだ後にぱつと離れて横に走りこんで斜め下から切り上げるように剣を振る。

重い金属のぶつかる音と、それを肩越しに止めるクライブの口から漏れる声。

「くそつ」

先ほどのハーコートのようすにしつと力で押していく剣では無い。

どこからくるのか。

どう、打つてくるのかが読みにくい。 身軽な体を生かしたすばやい攻撃。

そのため、さつきから防戦一方になつてゐる。

「力の無い者でもやり方があります。何にでもやり方は一つではありますせん」

まつすぐ突いてきた、アリストローザの剣を思いきり上から叩くとあつさりアリストローザは手を離した。

大きな音と共に落とされる剣。 それを拾つと元の場所に戻す。

「そうだな、何にでも……しかし、何でそんなに強いのだ？」

呆れたように言つクライブにアリストローザは笑いながら応える。

「わたしの三年前の罪状はもう、お話したと思ひますけど」

そうだった。 この者はボルチモアでレジスタンス活動を主導していたのだった。

「その、罪状は忘れたほつがいいのではないかと思つていたけど」

そう言つてアリストローザを見ると、彼女は笑つて見返して来る。しかし、その笑い顔はどことなくぎこちない。 分かっていたが、

クライブは気付かないふりをする。

何があつたのかを。 勿論、聞きたかつたが。

そこへ 。

大勢の足音が響いて、玄関の扉が乱暴に開けられた。

「王陛下に弓を向けようとする嫌疑により、おまえ達は拘束される」「何を無礼な！」

クライブや、ハーコートの顔を知つてゐるような身分の者がいため、何を言つても通じない。 ハーコートがアリストローザの落とした剣を拾つて構え、クライブは予備の剣をアリストローザに投げる。

剣を受け取つた彼女も走り寄ると、三人は背中合わせに剣を構え

て立つ。

「これで、誰が一番か分かるな」

クライブの声を合図に二人は足を踏み出した。

大勢がどつと屋敷になだれ込み、短槍を繰り出してくる。押さえ込んでしまおうと考えているのだろうが、屋外ならともかく室内ではその人数が仇になつていてる。

待ち構えるように、クラライブとハーコート、アリストローザが次々と槍を振りまわすことの出来ない兵士たちに斬りかかって倒していく。次々と倒れる兵士によってなおも捕縛など困難になつていてる。累々と重なる兵士たちの悲鳴と新たに入つて来る者の威嚇の大声。その中で休むことなく敵を切り結んでいく三人。

『縛せよ!』

そこへ平たい声が響き、時が止まつたよつてそこに居た全員の動きが止まる。

目だけしか動かせない、アリストローザの前に歩いていく一人の男。
「よくやつた、ダニーアン」
玄関からまた一人。

「マルト様」

マルトに浅く礼を取るのは 仲間だと思つていていた魔道師。

「おまえ達、早くこの者どもを捕縛しろ」

連れている兵士は中級か、下級の者ばかりでたいしたことでは無いように装つているが、マルトがわざわざ出張つているだけでもこの捕縛がいかに大事かを表していた。

『解!』

印を組んで術を解いた途端に拘束されたアリストローザが囁み付くように叫ぶ。

「ここにいるのは、クラライブ様と宰相のハーコート様よ。何を考えているのよ」

「何を言つているのだ、この者は?」

マルトはちらりと冷たい視線を送る。

「クライブ様なら主城で大事に静養されているし、ハーラート様ならボルチモア州で非業の死を遂げられたはずではないか」

マルトの口に上る笑みを見て自分たちはこのまま、身分を伏せられて処刑されるとアリストローザは確信した。

後ろ手に縛られた三人は、引きずられるように歩かされる。

まだ、何とか手はあるはず。ダリウス様にこの事を知らせないと。

そこまで考えてアリストローザは愕然とする。自分たちの計画の鍵はある魔道師が握っているのだ。これで終わりなのか。

締め付けられるような思いで後ろを振り返ると、ダニアンは無表情にこちらを見ていた。

いつから裏切っていたのか。

やはり、魔道師など信用できない 今更そう分かつても遅い。

「ごめんなさい、ウイリアム」

彼女の頬に流れるのは悔し涙。人選を誤った自分の不甲斐なさへの涙だった。

「おまえも来るのは、ダニアン」

マルトの高圧的な言葉に中年の魔道師はゆっくりと首を振る。

「いえ、あたしは小富に行きます」

「何?」

むつとした顔のマルトに向けてダニアンは澄まして言う。

「あたしがモンド州公になられるダリウス様にお会いしに行かないと、お困りになるのはそちらでしょう? あたしがお膳立てしたんですから。あたしが行かないとダリウス様は普通に新王へのご挨拶に伺うだけ……ですけど。いいのですか」

すぐにでも反逆罪の罪を被せて捕らえようとしていたマルトも、それを聞いてしまつと手出しできない。

まさか、それも見越していた?

マルトのきつい視線を平然と見返したダニアンは、前に見た時よりしおぼくれてはいなかった。それは、自分の見方が変わったせ

いかもしれない。

「では、手筈通りにお願いしますよ、ダリウス様」
主城の中、魔道師から羊皮紙の巻物を受け取ったダリウスが慎重にそれを礼装の懷に隠す。彼と別れたダニアンは、ステファンと共に歩き出した。

大勢の貴族が玉座の間に集まっている。左右に分かれて控えている貴族たちの間に敷かれている見事なゴブラン織りの絨毯。長い玉座への絨毯を進んでいくのは、モンド州の新しい州公になったダリウス。新王への挨拶と自分の州公就任の挨拶。

各州を統べる貴族の中でもハーコート家は特別な扱いになる。王の係累として、候爵、では無く公爵という地位的には王家の次の地位になる。

挨拶も臣下の中で一番初めという榮誉を貰えられていた。
内心の緊張を顔に出さないよう苦労しながらも、ダリウスはやや早足になることを押さえられなかつた。

玉座の置かれている壇上は、一番近くに寄つたとしてもかなりの距離があるが。周りには側づいているマルトしかいない。王を弑ししようとするなら、やはりこの時をおいてはない。

指定された場所にひざまづいてダリウスは口上を述べ始める。

「この度、父の後継となり、モンド州の自治の任を拝命することになりました、ダリウス・ザクト・ヴァン・ハーコートでござります。コーラル国王陛下、ご就任お喜び申し上げます。魔道の光たる陛下の英々たる栄光の時が続きますように。臣下として心よりお仕え申し上げたく存知ます」

ついで、懷から出す、巻物。そこへ、かかる声。

「それは、何かな？ ハーコート公爵」

「」、これは口上を書いた……」

「そうでは無いでしよう、公。それを見せていただきましょ」

マルトが楽しそうに壇上から降りて來た。

知られている?

巻物を持ったまま、ダリウスはその場から動けずにいた。

その手から巻物を奪つて広げるマルトの顔色が変わる。

これは物質移転の魔方陣。だが、自分にも分からないほど

の複雑な物。 またしても湧き上がる嫉妬の感情。

「これは、ただの書きつけではありませんよね」

振り返つてコーラルに合図すると、コーラルが玉座から立ち上がる。

「何をするつもりなのだ。祝いの品ではあるまい?」

「ハーネート公、あなたを王に対する逆臣の疑いにより拘束させていただきます」

マルトが手を打つた途端、なだれ込む兵士たち。 明らかに待機させていたものだろう。

そこへ、縛られたステファンが連れてこられる。

「この者が控えの間に潜んでおりました」

「ステファン、おまえ一人か」

ダリウスの声に男はああ、と応える。

「あいつは……はげは裏切った」

ステファンの言葉にダリウスはがっくりとうな睡れた。 そういう事か。

「おまえ」

「一ラル他、まわりの人間全ての目がステファンに注がれている。瓜一つの顔。まさかという思い。しかしながら誰も、その考え方を口にできない。

「ここにいる、ステファンは、捜されていた、陛下のお子様です」

その時、開いている扉から入つて来た魔道師が淡々と言つ。

「母親は、ボルチモア州の姫、リディア・ミゼル・ヴァン・ドミーク様でいらっしゃいます」

「ダニアン、おまえ余計な事を」

殴りかかるうとするステファンは、兵士に押さえ込まれる。そこでへしゃがみ込む魔道師。

「いざればばれますよ。この際、父上と存分にお話をされますように。ステファン様」

睨み付けたステファンの懷に滑り込む短剣。はっと顔を上げる魔道師はすでに背中を向けていた。

「おまえがそうだったのか。捜していたぞ、ステファンというのか」親しげに呼ぶ一ラルにステファンは精一杯の笑顔を向けた。

「ぼくも会いたかったですよ……父上」

「ステファン様、こちらへ」

マルトが慌てて拘束していた、兵士を下がらせてステファンを部屋から連れだす。

「お祝いの口上が終わるまで、こちらに待機していくくださいませ」

ざわついた玉座の間にやつと静けさが戻った頃、何も無かつたよう貴族の祝いの口上が続けられる。

だが、流石に祝賀の宴は明日に延ばされる事になった。代わりに主城を離れた小宮の前庭に引き出されたのは。

クライブとハーロート。そしてアリスローザとダリウス。モンド州の州兵も武器類を没収されて一箇所に集められている。そこに現れた、コーラルとマルト。その斜め後ろにいたのは、

コーラルにそつくりな彼の後継者。

「おまえたちはここで処刑してやる。余の目前で死ねるのを光榮と思うのだな」

「余? ハーロート、おまえは勘違いしている。クライブ様は良い王になられる。長い目で見て差し上げるべきだ」

「何を言っているのかね、兄上」

コーラルは呆れたようにハーロートを見る。

「余がクライブの成長を待ちきれずに王の座を望んだと? まったく、甘いな、甘すぎる。だから一介の魔道師なんかに騙されるのだ。別にだれが王になろうと関係ない。余が引きずり降ろすだけだからな」

嬉々としてしゃべるコーラルの背後から短剣を持ったステファンが飛び込むように駆け寄る。

「コーラル! おまえ、どこまで腐つてやがる」

「矢を!」

叫ぶマルトに応えて構えていた兵の一人が矢を放ち、ステファンの横腹に刺さる。がたりと落とした短剣を握んだマルトが背中から切りつける。

「やめろ、マルト」

コーラルが止めたが、マルトの手は止まらない。何度も赤い鮮血があたりに散る。

「この者はコーラル様を殺そうとしたのですよ」

「ステファンは……余の子どもだぞ、マルト」

「もう、助からないかもしませんね」

冷たく血のマルトにコーラルは、急いで倒れている息子を助け起こす。

「誰か、医者だ！　ステファンを運べ」
体から流れているのは、自分の血だろうか。　どんどん冷えていく体。

誰か、助けてくれ。

何をこんなに慌てているのかが、コーラルには自分でも分からなかつた。

しかし、分かっているのはステファンをこのまま死なせてはいけない、ということ。

利用価値がある、そうだ。　この男には　。

それだけの事　　のはず。

青い顔で運ばれる自分の息子を見送りながらコーラルは両手の振るえが止まらなかつた。

死んでしまつたら。　自分の息子が。　そんなばかな。

「ははあ、じうなつちやこましたか。思つよつにほいかないものですよ」

一部始終を見ていた魔道師が残念そうにしづやく。

そしてダニーアンは頭を上げると、じぱりと窓を見ていた。

「来ていただけたらいんですがね」
ダニアンが、もう少し待つて事態がどう動くかを見極めて立ち去
ろうと考えていた丁度その時。

「手が掛かるな、クライブ」

あまりにも懐かしい声にアリストローザは即座に顔を上げる。見
上げた空に浮かぶ二つの物体。

一つは、暗赤色の動物。地上にいるものとはまるで大きさが違
うが、姿は狼だ。しかし、その狼の背で羽ばたいているのは大き
な翼。そして背に跨っているのは少年か、少女か。いずれにし
てもまだ、十四、五歳くらいか。茶色の何の変哲も無い上着にび
つたりとした乗馬ズボン姿、膝までのブーツを履いている。

「下に降りますか」

そう、言つたのは狼に乗つた少年の横にぴつたりと付けた様にい
る、黒いドラゴンに似た動物に跨つた青年。^{またが}黒い丈の長い上着に
細めのズボン、少年同様のブーツ姿。

「先におまえだけ行つてくれ。おれはやることがある」

「わかりました」

少年は従者らしい男の返事にうなずくと、空高く狼を向かわせる。
手綱を持つているわけでもないのにその狼は彼の意のままに動く
ようだつた。

彼が体をぐつと回した拍子に長い髪が流れるように大きく揺れて
広がる。銀色に近い金色の髪が陽の光を受けて銀の粒子をふりま
いたように輝く。

主人が離れたのを確認して従者の男は自分が乗つてこるドラゴン

似の物に命じる。

「サウンティトウーダ、降りよ」

サウンティトウーダと呼ばれた生き物は無言のまま、静かに地面に降り立つ。

その大きな異形の物に恐れをなして、兵士はわらわらと逃げていく。

「クライブ様、お久しづりでござります」

その異形の物からひらりと降りた男が、兵士に置いていかれたクライブに顔を向けると普通に挨拶をして彼の縄に手をかける。

『解』

その声で縄ははらりとその場に落ちる。 あとの者の縄はサウンティトウーダが器用に長い口を開けて牙で切つていく。

「ラドビアス、来てくれたのか」

はい、と笑顔を向ける長身瘦躯の男はがらりとその表情を変える。反対側に陣取っている魔道師を見る冷めた目。

「これは、どういうことだ？ コーラル。 それと 誰だったか。

そう、マルトと言つたか」

「つるさい！ 余はレイモンドールの王となつたのだ。 国を捨てて、出て行つたくせに今さら何を言つてる」

コーラルの言葉にラドビアスと呼ばれた男は、笑いをかみ殺すよう口に手を当ててうつむく。

「何がおかしい。 余は正当なレイモンドール王の血筋なのだ。 魔道によつて安寧あんねいを誇つていた頃のように余が導くつもりだ」

「その言い方、全然さまになつてないな。 おやめなさい、おまえに王は務まらない。 自分の身の丈を知る事もできないとは哀れなことだ、コーラル」

「ぶ、無礼者！」

あまりの怒りに口をわなわなと振るわせて印を組もうとしたコーラルに向けてラドビアスが懐から出した短剣を投げる。

「つづり

「コーラルの右手首に目標を過たず、ざくつと突き刺さる短剣。

「だからお止めなさいと言つていいんですよ。おまえが術でわたしに何か出来るなどと思つていてる事からが間違いなんです。おまえとわたしでは魔道師としての格が違いますから。だから術なんて使う気も起きない」

「コーラル様、大丈夫ですか」

マルトが走りよつてコーラルの手首から短剣を慎重に引き抜くと、遠巻きにしている兵に命を出す。

「矢を放て！ 国王陛下に反するものを捕らえて殺すのだ」

その声に弓矢を持った兵が前に出て、ラドビアスと背中合わせに立つクライブに狙いを定める。

放てという声に矢が雨のように彼に降り注ぎ、アリストローザから悲鳴が上がる。

「止めて！」

その声に答えたものか矢は彼らの体の一歩手前で止まり、燃え尽きていく。

マルトが引きついた顔でラドビアスを見ると、彼は印を組んでにっこりと笑つていた。

「何度言えばいいんですか。言つてわからない子にはお仕置きですよ

よ

次の瞬間にはマルトの目の前にラドビアスが飛び込んでいる。他者の目が追いつくより早く、いつの間にか持つていた短剣で深く真横に切り裂かれる彼の首。

血を噴出して倒れる男を放してラドビアスは瞬きする事も忘れている、コーラルの方へ向く。

「おまえもお仕置きが必要かな」

腰くだけになつて後ずさるのを上着の裾を踏んで止める。

それに小さくそつといふ声。が、次に出るのは命乞いの言葉。

「お助けください。ラドビアス様、どうかお慈悲を」

そこへ、畠に狼を飛ばしたまま、戻つて来た少年が軽業師の「」と
畠の前に飛び降りると自分の従者に文句を言つ。

「何だ、楽しそうだな。おれのいない間に一人で楽しむなんてする
いぞ、ラドビアス」

「何を仰います。一人にしたのはクロード様じゃありませんか。い
い所は取つてありますから。どうぞ、」自由になさこませ

「ふーん」

值踏みするように地面に這いつぶつしているコーラルを眺めてい
る少年にアリストローザは寒氣を感じた　この冷酷な眼つきの少
年があの、クロードだといつの？

「ぜんぜん手^ごこたえなさそうだけじ

軽くため息をつくと「コーラルの胸倉をつかんで自分に顔を向けさせる少年。コーラルは大人しくしていたが、相手がラドビアスでは無くなつたことで隙を捜す。たかだか一、三年魔術を学んだ者が自分に適うはずは無いのだから。

ラドビアスが目を離したらこの生意気な子どもの心臓を潰してくれる。そう、考えている事に気がついていないのかクロードは呑気な声を上げる。

「これからベオーク自治国に行かなきやならないのにこれじゃあ心配でならないな。だから心配事を三つほど潰させてもらひ。まずは一つ

少年は右手に嵌めていた指輪を剣に変える。

「顔を上げろ、コーラル」

「なつ

自分に手をかけている少年の体を振り払おうとするが遙かに体格が違うにも係わらず、びくともしない。それならと印を素早く組もうとするがその手元に蹴りが入る。

体一つ分飛ばされたコーラルは手をさすりながら、後ろに下がりつつ印を組んで呪を唱える。

『ティワズ イサ ウルズ』

鋭い氷の長剣が現れて「コーラルの手の中に納まる。にまことに上がる口^口元。ちりりと目をラドビアスに向けるが動く気配は無い。

あつと言つ間の出来事に反応できていないのか。
ならこれでわたしの勝ちだ。

「ばか者。余に偉そうな口を聞いたことをあの世で嘆くがいい」
笑いながら踏み込んで剣を突き込んだ。

「あの世つてどこだ」

ところが氷の剣は高い金属の衝撃音とともに弾かれる。

「そんなまくらな剣で何を斬るつもりなんだ、コーラル？　まあ、すこしは抵抗してくれないと面白くないといえばそつなんだけど」

弾いた剣の残像が残るような素早い間合いで反対にコーラルの喉元に突き入れられる長剣。

足を取られるように必死でかわしてコーラルは片手で印を切つて剣を一本にすると、その一本をクロード目掛けて投げつける。鋭い弧を描いて飛ぶ剣をクロードは左手で受け止める。逆にその剣先を地面につけて轡きするように歩いてコーラルに近づく。

地面に引かれていく一本の線。

わざとなのかその歩みは不自然なほどゆるやかで。

少年の顔に浮かぶのは楽しそうな笑み。牧草地で犬とでも戯れているように明るい笑顔。

「逃げてもいいよ、コーラル。十まで数えてあげる。おれが鬼でおまえが逃げる、でいいよ」

コーラルはさっきまでの余裕を無くして慌ててクロードに背中を向けると兵士たちの中へと走りこんで行く。

そうだ、クロードの持っているのは護法神の剣なのだ。あなどつてはいけない。

「おまえ達、あの罪人を殺せ。矢でも槍でもなんでもいい」
大声で出す命令に兵が槍を構える。

「ハ、九……ねえ、コーラルもう逃げないの？　そんなんじゃおれ、すぐ追いつくじゃうよ」

「クロード様」

咎めるようなラドビアスにクロードは片目を瞑つてみせる。

「おれのやつたいようにやらしてくれるんじゃ無かったの、ラドビアス？」

そうでした、とため息交じりに吐き出される言葉。

「さーどこかな？　今だいぶ待つてたけど。あれっ逃げてないじゃん、残念」

左手に持った剣を地面につけたままコーラルに向けて走り出すクロードに向けて何十本もの槍が突き出される。

ほつとして顔を上げるコーラルの目の前にいるのは、

「ひょつとして死んだと思った？」

「ク、クロード？」

少年の背後に倒れているのは槍を手にした兵士たち。一様に腹がざつくりと切り裂かれて内臓をはみ出させて倒れている。

「今度は何をする？ 追いかけっこもかくれんぼもおまえが中途半端だから面白くないんだけど。他に何がしたい？」

息一つ乱していない少年の爽やかな笑顔を慄然と見るコーラル。一年前に顔を会わしていたクロードはどこへ行つたのか。ここにいるのはまったく別の人間としか思えなかつた。いや、人間ではない。人を一瞬に切り裂いて、楽しそうに血の一滴も浴びずに笑うなど。

人間であるはずが無い。

「お、お助けを。あなたの忠実なる僕になります。お助けください」

今や、泣きながら声を上げる男にクロードの笑顔が曇る。

「え？ 何か言つたか。よく聞こえないなあ。まさか降参したつていうのか」

うなずく「一ラルに露骨に不機嫌そうな顔をみせた少年。

「悪い、今の聞かなかつた事にしてくれない？」

「クロード！」

アリストローザはこのまま見ていられなかつた。コーラルは命を差し出すべきだと。いざとなつたら自分が命を奪うと思っていたのに。

「の恐ろしさは一体なんなのだ。

恐怖を感じているのは、自分が好きだと思っていた方の少年。そしてこの蛮行を今すぐに止めさせたいと。『一ラルを殺させたくない』と思つているのだ。

「止めて、クロード。『一ラルの処遇は裁判で決められるわ。だから」

「いやだ」

その子どもっぽい言ひ草にアリストローザは驚いて立ちすくむ。見た目は十四歳でも十七歳のはず。なのに今の答えは何？「せつかく海を越えてはるばるやつてきたのにこれで終わりなんて嫌だ。こいつはおれが殺る」

「クロード」

「つるわい、黙つて」

アリストローザに冷たく言つと腰を抜かしている男に近づく。

「『わや』『わや』周りがうるさいからさつわと済ますよ

「お助けを、おた……」

クロードが命乞いをする『一ラルの口に躊躇いも無く剣を突きたてる。あがががと声にならない音とびくりと大きく体を一瞬反り返して、『一ラルは地面に縫いとめられた。細かく痙攣している男を一瞥してクロードは剣を引き抜く。

「竜印は無くなつても上位の魔道師といつものほしごといな。ラドビアス、後を頼む」

「はい」

返事を返したラドビアスが手にした剣で心臓を一突きして留めを刺す。それを見ることも無くクロードが左手に持つていた剣を放り投げる。

『滅』

氷の剣は蒸氣を上げて消えていく。

彼は利き腕すら使つていなかつた。 唸然とする群集の真ん中、
クライブの所へ歩いて行く。

「クロード、助けに来てくれたんだな。やはり君はわたしの弟……」
再会の暖かい挨拶がくるとばかり思つていたクライブは冷たく自分を見上げるクロードに言葉を失つて「ぐくりと喉を鳴らした。

一年の月日はクライブとクロード、双子である二人の外見を大きく変えていた。似ていないので無い。美しいシルバーブロンドの髪も藍色の瞳も同じなのにまるで違う。大人の体になつている少年のままか。それだけでは無い、大きな違い。それはクロードの纏う^{まと}気配なのか 長く伸ばしたさらりと流れる髪。華奢な体、どこか中性的に見えるそれは以前の彼の師と同じもの。

「一つ目の心配」

手に持つたままの剣をクロードはクライブの首にぴたりと突きつける。

「クロード、一体？」

「おまえ、魔道師の支配しない国の王になるんじゃなかつたのか？
おれがいなくなつた途端に趣^{ゆき}換^かえするとは感心しないな。 そんなんに王が嫌ならおれに譲^{ゆず}つてしまふか？」

「君がそう望むのなら、そうすればいい。君にはその権利はある」
顔を逸らすクライブの頬に思いがけず、クロードの拳がとんで口から血が飛び、地面上に赤い染みを作つた。

「ふん、放り出すというのか。だつたらおれが貰つてもいいが、おれは臆病者だからな。おまえにいつ、寝首をかかれるかが心配で寝不足になる。だから、おれが王になるんならおまえには死んでもらう」

「ク、クロードまさか本気か」

「当然だ」

クロードはクライブの胸倉を掴んだまま一ヤリと唇の右端を吊り

上げた。

「おまえのことを罪人扱いしたのを怒っているのか、クロード？

だったら謝る。兄弟じゃないか。君が必要だと今でも思つてゐる」

クライブの目に涙が光る。

「泣いてんのか まつたく。そつこいつがおれを苛立たせるつてわかつてゐる？ お兄様」

クロードが横を向いてべつと唾を吐いた。

「で、おれに王位を譲るんだつたよな。じゃあ遠慮なくもらつてやるから、死んでくれ」

クロードが大きく剣を振りかぶる。

「もう、止めて！」

叫びながらクライブの体を庇つよつて身を投げ出したのはアリスローザだつた。

「クロード、どうしたつて言つの？ あなた、王位なんて望んでいなかつたはずでしょ。躊躇いも無く自分の兄を殺そうとするなんて、どうかしてゐるわ」

「また邪魔する気？ アリスローザ。しかし、どうかしてゐ、つていつのは解せないなあ」

面白くないように剣を指輪に戻してクロードは手に嵌めながらクライブにかぶせるよつてしながら、あらを見上げるアリスローザにため息をつく。

「王位を簡単に投げ出すような王におまえたちは忠誠を誓えるのか？ 知らなかつた。誰かに頼つてばかりいるような奴はまた、同じ轍を踏むとは考へないのか。王の側に侍らうとする者が善人ばかりとは限らないだろうに。レイモンドール國の皆さんはお人好しで困るな」

ばしつと大きな音がしてクライブは大きく目を見張る。その音は立ち上がつたアリスローザがクロードの頬を張つたものだつた。

「いい加減にしてよ。あなたがどう言おうと、レイモンドールの王はクライブなのよ。あなたが出て行つてしまつてから、クライブは

そりやあ真摯にがんばっていたのよ。あんなに荒れた国を立て直すのは大変だったはずだわ。簡単に放つて投げ出したのは、あなたの方じゃないの！」

彼女の手形がついた頬をクロードは、痛えなあとゆっくり擦りながらクライブに向く。

「で、どうする？ おれはどうちでもいいけど

「わたしは　この国を導いていきたい。でも、やはり一人では出来ない」

クライブの言葉にアリストローザがクライブの足元にしゃがむ。

「わたしがあります。ハーコート公もいるではありませんか。陛下のためを思う者は陛下が気付いておられないだけで、まだまだあります」

「おまえはわたしについてくれると誓つのか。アリストローザ、クロードでは無く、わたしに」

「今まで本当に迷つておりましたが、本人に会つてわかりました。わたしが思い続けていたのはわたしの心の中で作り上げていたクロードだったのです。わたしが一緒にいるべきなのは陛下だと思います」

「そうだ、一年前にわたしたちの進む道ははつきりと分かれていたのだ。それを認めたくなかった。あのままのクロードだと、自分だと思つていたかつただけだ。」

「ありがとう、アリストローザ」

クライブは求めていた光を見つけたように膝をつく。そしてアリストローザを引き寄せしつかりと抱きしめた。

「そうだ、わたしはレイモンドールの王だ。自分が決めたことだ。誰に決められたのでも無く自分が決めたこと」

誇らしかった自分。あの戴冠式の自分を思い出して、クライブ

は決して投げ出したりしないこと心に誓つ。

「おれは振られたってことかな、ラドビアス?」「そのようですよ、クロード様」

クロードはその様子を見て、そうかと頭をかきながら一人に近づく。

「じゃあ一つ田は無しつて」と、三つ田だな

そう言いながら、アリストローザの胸元に手を伸ばすとペンダントを引きちぎって奪う。

「これは返してもいいよ

「クロード?」

「おれはここに帰つてくる理由を作つて置きたかった。でも、それはもう必要ないし、君にも必要ないみたいだからな」

アリストローザはモンド州のイーヴァルアイの城で見つけた手紙の事を思いだす。

「クロード、イーヴァルアイはあなたに手紙を残していたのよ。兄として、ゴリウスとしてそのペンダントを送ると書いてあつたわ」「知つてゐる

ペンダントに優しく触れながらクロードはアリストローザを見た。

「一度忘却術をかけに行つた時、あそこへ戻つたからな。でも、あれが無くたつておれはゴリウスを兄として愛しているし、彼の気持ちも知つていたよ。だから、このペンダントに他とは違う力があるだろうといふことも……使つたんだろう?」

今のクロードは自分の見知つてゐるクロードだわ。

「だから、貸してくれたの? クロード

クロードはそれには応えず、後ろに控えていた従者を呼ぶ。

「ラドビアス、おまえの心残りも回収したし。

出発だ

「そうですね

「クロード!」

引き留めるように叫ぶクライブにクロードが背中を向けたまま言葉を返す。

「もうしばりくは戻らない。だからしつかり自分の国の手綱を握つておけよ。じゃ、行くよ。それとおまえのとこのダーランつて魔道師に言つておけ。何様か知らないがおれをもう呼びつけたりするなよ。それにおれは、王様なんてごめんだって」

剣で地面を突いて弾みを付けるとクロードは空高く飛び上がり、待たしていたアウントウエンに跨る。またが

「帰つてこい、おまえを待つているよ。盤石な国にして。だから、帰つて来い、クロード」

クライブの声に是とも否とも言えぬ笑顔で応じた少年は小さく魔獣に命を下す。その後に従者の乗つた魔獣も空に舞い上がり、主人に続く。

「おれの存在自体がもう、この国には脅威だな。力のありすぎる魔道師など、この国には要らない。おれは　　一人きりだ」
「わたしがありますよ。どこまでもご一緒にいたします、クロード様」
「そうだったな。おれにはラドビアスがいるか。どこまでも一緒にいこい」

クロードの言葉にラドビアスは嬉しそうに微笑む。

わたしこそ、クロードを離したくないと思っているのだ。

一人で生きていけないのは寧ろ、自分。そして自分は、はるかにクロードより長生きしてしまう。そんな事は阻止しなくてはならない。己を殺して主人に仕えていると見せかけて、いつでも自分は自己愛に支配されている。

ラドビアスは前を行く自分の主人を見ながらため息をつく。

一方クロードは黙りこくつて前方に視線を向けていた。

さつき自分の事を殊更、非人間に見せようとしたのは思いを断ち切らうと考えたからだ。アリストローザの気持ち、いや俺の

方が。向こうが引導を渡してくれないと自分からは出来ない。

おれは不甲斐ない奴なんだ。今も自分が仕向けたくなつてやつて自分を見る皆の顔に恐怖の色を見つけて傷ついているのだから。

しかし、こうやつて退路を断たないとおれはここに居たくなつてしまつ。見知つてゐる国で、知つてゐる人々の中に囮まれてぬくと生きていきたくなる。

でも、それは許されない。おれはユリウスを殺したんだから。「クロード様？」

氣遣わし気なラドビアスの声にクロードは後ろを振り返る。そして、顔を向けた先の目の前に広がる景色を見た。

その途端、二年前も同じようにこうやつて祖国を見たと思い出す。あの時はすぐにでもベオークに行けると、あつといつ間に全てを終わらせて戻つてくると思っていた。だが実際は大陸に渡つて魔術の勉強と剣術、体術の修業に費やされていた。

ベオーク自治国は自分が思つてゐるより遙かに遠かつたのだ。さよなら、クライブ。さよなら アリスローザ。

おれ、君のことが好きだつたんだ。でも一年ぶりに会つて君は大人に……大人的女性になつていて。おれは変わらない。前ままだ。釣り合わないよな。君にはクライブがいい。

おれは 子どもなんだから。このまま歳を取らない人外の者だ。

おれの心を引きとめていたもの全てに今、別れを告げよう。

クロードは、両頬を涙が伝うのをそのままに姿勢を前方に戻すとアウントウエンに命じる。

「行け！」

空を見上げるクライブとアリストローザの視線の先から一つの異形の物は瞬く間にその姿を消した。

「帰つてくるかしら」

「クロードは帰つてくれるさ。でも……今はわたしを見て欲しいんだけど」

あまりに無防備なクライブの言葉にアリストローザは噴出す。

「お、おかしいかな？ でも、やつと笑つてくれたな、アリストローザ」

「……陛下」

遠慮がちに笑うクライブにアリストローザは胸が詰まった。

こんなにも気を使わせていたのか。悲しみに自分は我を忘れていた。浸つていたかったのかもしない。ウイリアムとの甘い思い出に。しかしそんな事は自分の胸の内だけに仕舞つておかなくては。主君に心配をかけるわけにはいかない。

「陛下、ではそいたしますわ。いつもわたしやハーコート様が口うるをく見張つて差し上げます」

にっこり笑うアリストローザにクライブの手が彼女の背中に回わる。それに応えるアリストローザの笑顔。

やはり一年前とは違うのだ クライブを支えていくと決心したのだから。アリストローザはクロードに心の中で別れを告げた。

コーラル王とマルトが外国から来た恐ろしい魔道師二人組みに殺されたという事は、事の真相はさておきそのまま國中に伝わることになる。

それは人々が魔道師を恐れる理由ともなったが、逆にクライブが王に返り咲くことに対する好意的な目で迎えられるという恩恵もあつた。

「ステファン。これからも君にはサイトスでやつてもらいたいことがある。残つてくれないか」

王の執務室に呼ばれ、かけられたクライブの言葉にステファンが笑う。

「アリスローザには聞かないんだ？ まあ国が落ち着くまでならいですけど。まだ、体が本調子ではないし」

ステファンは勿体をつけるようにゆっくり歩きながら視線を送る。「この城内にある蔵書室にいつでも出入りできるんなら」

「ステファン……君がコーラルの子どもだつたなんて。つらい思いをさせてしまつたな」

クライブの言葉にステファンは目を僅かに逸らせる。

つかの間の沈黙。

「だから？ 僕はあの人の子どもかもしけないけど、だからってそれに縛られてはいないです。僕は血の絆だけで物の道理を見誤るまねなどしない」

ステファンの精一杯の強がりを今は、そのまま受け入れてあげたいとクライブは思う。

「解かつた。いつでも閲覧できるように手配するよ。それと アリストローザにはわたしの側にずっと居てもらいたいと思つてているんだ」

「勿論ですわ、陛下。今度は道を誤らないようにべつたりとお付きしていきますからね」

そこへかかる声。

「いい加減にあたしを無視しないでください。 あたしがここに居るのを忘れているんじゃないでしようね」

その場にいた全員の視線を集めたのは頭の薄い中年の魔道師。

「ダニアン、忘れたわけじゃないんだけど。だつてあなたの遭遇はもう決まっているんだもの」

「へつ？」

「じゃあ、ボルチモアの廟へ帰つていいんですね。じゃ、失礼申し上げ……」

「違うわよ」

アリストローザの声にそそくせと部屋を出て行くアリストの魔道師の足が止まる。

「コーラルが死んで、他の高位の魔道師も捕らえられて一体誰がサイトスの祭祀庁の長になるつていうのよ」

「だ、誰って まさかあたしになれと仰つてるんじゃないでしょうね」

「その、まさかよ。クロードがサイトスの主城の魔道師庁があつた場所をそつくり壊していつたんだから。その後始末も頼むわ。魔道師の不始末はあなたの責任よ」

「だ、誰が！ 約束が違つじやないですか。冗談じやないですよ、結局ペンドントだつて貰えなかつたじやなかつたですか」

しかし、ダニアンの精一杯の抵抗もここまでだつた。

「よく言つぜ。ぼく達を仲たがいさせ、ダリウス様を謀つて裏切つたくせに。ぼくらを反対させて相討ちにさせる気だつたんだろう、このはげ」

ステファンが思い出させるよつて言つ。

「それは 鍵と契約されたクロード様を王としたかつたからで。でもおかげで助かつたんだからいいでしょ。もう、あたしを放つておいてください」

ダニアンの懇願に被さるクライブの言葉。

「わたしからも頼む、ダニアン」

「へ、陛下……わ、わかりました」

ああ、やつぱりこの娘と関わり合つと口クなめに会わないのだ。ダニアンはしょぼくれた体をさらにがつくりと落とした。

それから更に一年の月日が流れで。

クライブも宰相補佐となつたアリストローザ、内務大臣になつたステファン。残つてゐる高位の官吏全員、息つく暇も無いほど多忙な日々を送つていた。

正式な場所ではいつも顔を会わせてはいるがなかなか他の場所で話すこともできない。

アリストローザはハーロート公に目を通してもらひつ案件の書類を抱えて宰相の部屋に行くが、そこにはハーロートはいなかつた。

おかしいわねえ、急ぎだからとハーロート様が言つてらしたのに。

「ハーロート様はどちら?」

「国王陛下の執務室だと思いますが」

官吏に礼を言つてアリストローザは国王の執務室へ急ぐ。

「陛下、ドミニク様がお見えですが」

「ああ、アリストローザか。入れてくれ」

お邪魔致しますと入つて来たアリストローザは部屋を見渡してがつくりと肩を落とす。

「どうした?」

「あ、すみません陛下。ハーロート様がどこへ行かれたのかご存知ありませんよね」

一国の王に人の居場所を聞く非礼も彼女には許されているようだつた。

「じきにここに来るだろ? ここで少し休んでいったらいい。君は働きすぎだよ」

「それは陛下も同じでしょ?」

「じゃあ、わたしも少し休むよ」

クライブは笑いながら言つと中にいた官吏たちにも休憩を言い渡して部屋から追い出してしまった。

「君は今の地位に満足しているのか」

急に聞かれてアリスローザは本意を計るよつにクライブを見る。宰相補佐とは正式な官位では無い。暫定的にアリスローザが動き易いようにつけているだけだ。そして、それは彼女と離れたくないクライブの意向も影響している。

「わたしなんかにこんな高い地位をお与え下さいましたこと、本当にありがたいと……クライブ様？ どういう意味です？」

周りに誰もいなくなつた事を幸いに口調がいきなり砕ける。

「意味つて、そのまんまの意味だよ。君が忙しく働いてくれるのはとても嬉しい。うれしいが、このところ少しもこんな風に会えないのがつらいんだ。君はどうなのか、教えて欲しい」

ああ、この人は本当に純粹で素直な人なのだ。それが危うさにもつながるのだろうが。

「クライブ様、わたしだつて寂しいに決まつてます。でもあと少しすればこんな忙しさともお別れですよ、きっと」

母親のように肩に手を置くとクライブは眩しいほどの笑顔になつた。そして。

「いつ、言おうかと考えていたんだが。今、言つことにした」

一転して真面目な顔になる。

肩に置いた手を降ろされて、その後。

アリスローザの足元にクライブが膝をついて片手を取る。

「クライブ様！ 何を？」

驚くアリスローザにクライブは続ける。

「そのまま……アリスローザ、私と結婚して欲しい。君との国を作つていきたい。君を愛しているんだ。ずっといつまでも一緒に生きていくたい」

暫くまったく時間が動かないかと思うくらいの沈黙。

「アリスローザ？ 嫌なら、そう、言ってくれたらいい。勅命でも

何でもないのだから」「

クライブが心配そうに顔を上げる。

いつか、こんな日が来るのかと驕り(おも)でもなく彼女は思っていた。

それは隠そともしないクライブの態度、表情、言葉から。

そして　自分はどうなのかと。

彼女を振り回す、気になつて仕方がなかつた人。　そしていつも置いていかれた。

または、包み込んでくれた優しくて頼りになる年上の人。　この頃やつと涙なしで思い出すことができるようになつた彼。

クライブは一人とは違つ。

当たり前の事だが。

激しく燃えるような、とか心が揺さぶられるような……そういう事でなく。

わたしは彼を支えてあげたい。　政務だけでなく　心からそう

思う気持ち。

それも愛情では無いのか。

「陸……いえ、クライブ様。わたし嬉しいわ。ありがとう、でもまた氣の弱い事を言つてると手が出るかもよ。わたしは王妃なんて柄では無いもの」

アリストローザの返事に広がるクライブの笑顔。

「遠慮なく出してくれていい。そういうところも全部好きなんだから」「

手を引つ張つてアリストローザがクライブを立ち上がらせた。

「ここではいいけど、他の人の前で私が尻に敷いつちやつてることをバラしてはダメですよ、クライブ様」

「了解した」

二人の笑い声が部屋の外に聞こえてきて廊下にいた人影も口元に笑みを浮かべる。

「いいご趣味ですね、ハーコート公爵様」

「何を言つてゐる。何とかしないと一生あのままだと脅かしたのはお

まえではないか、ステファン」「
二人は顔を見合わせてニヤリと笑つた。

次の新年が明けた後春の吉日。

王クライブは明るい金髪にスカイブルーの瞳の、美しい女性を王妃として迎えた。

その妃は王より一歳年上で、影で王を叱咤激励して尻に敷いてい
ると言ひ噂が あつた。

65・後春の吉田（後春や）

あと、もう少しこなりました。引き続きよろしく
お願いします。

「その後レイモンドール国は三十年ほど続き、滅びましたが。結局魔道師から権力を取り戻し、立派な施政を行った王も大国に攻め込まれては成すすべもありませんでした。昔、昔。まだ魔道師が本当に魔術が使って、ドラゴンがいた、そんな頃のお話ですよ。こんなおどぎ話が参考になりましたでしょうか？」

微かに空が白み始めていた。目の前の男から話を聞きだしてから夢中になつて知らぬうちに朝を迎えてしまつたらしく。

「ひからこそ、一晩中喋らせてしまい、疲れたんじゃありませんか。大変興味深い話でした。レイモンドールの黎明期れいめいきからの話など、どの文献にあたつてもはつきりしなかつたもので」

あまりの興奮に学生風の若者は身を乗り出して唾をとばしていた。

一晩中しゃべっていたはずの男は疲れた様子も無く、立ち上がる。「お休みになられますか。それともお茶を差し上げましょつか」

「それではお茶を」

若者は眠気などまつたく感じていなかつた。

イストニア連邦国、ダイニーズ州。

昔、この島国は一つの王国だった。それも魔術で結界を張つていたという。今は魔術の文献も遺跡の一つも残つてはいない。夏の長期休暇はその真偽を確かめる旅になつた。昔の地図によるとこの険しい山脈のどこかにレイモンドール国の魔道教を統べる主廟があつたらしい。

それを彼は、去年死んでしまつた父親から聞いたのだ。

「おまえはレイモンドール王朝の血を継いでいるんだよ」

まさか、とその時は笑い飛ばしたのだ。この狭いキッチンに毛が生えたようなダイニングで朝食を囲みながら父親は寂しそうに笑

つていた。

その時はそれで話は終わり、彼も忘れていた。

思い出したのは父親が肺炎をこじらせてあっけなく死んだ、一週間後のこと。

父親の遺品を片付けていたカルーディは美しい螺鈿細工の小箱を見つけた。

「母さんの遺品かな」

まだ小さい頃に亡くなっていた母親の物だろうかと持ち上げて見ると、底に鍵がついている。

父さんらしい。こんなところに鍵があつたんじゃあ、防犯の意味なんてないのだが。この調子で銀行の通帳やカードに暗証番号を書いたりしていたのだった。

ふつと笑いが込み上げて、鍵をその箱に差し入れると、カチリとはまる音とともに蓋が開く。

「綺麗だな。まさか 本物？」

中には絹の台座にすえられた指輪が一つ。竜を模つた恐ろしいほどの細かい細工。両方の目にはそれぞれ赤と青の石が輝き、まわりは透明な石が散りばめられている。胴体は燻し銀のようだが。もし、これが本物だつたら大変な金額なんじやないのか。カルーディは唾を飲み込んで暫くその箱を眺めていた。

それから、気になつて眠れない日が続く。昔、滅亡した王朝レイモンドール。

それからは大学をそつちのけでレイモンドール国の事を調べていた。

そしてこの夏。

一人用のテントと必要最低限の装備。一週間分の食料を大型のリュックに詰めて彼がこの山脈に足を踏み入れてもう十日以上。

軽く考えていた自分を呪いながら、手がかりも無く下山するルートを捜してさらに迷う。

携帯電話も圈外の表示のまま。

そして、昨日の晩。テントなど役に立たないほどの雷雨にたまりかねて当て所なく歩いた先に見えた一筋の光。

それを頼りに真っ暗な中、石造りらしい戸を叩いていると中から若い男が顔を出した。

「すみません、この雨で困ります。一晩家に入れても構いませんか」

「それはお困りですね。いいですよ。どうぞ、一応ちらり」と家の主は田を引く背の高い痩せた男だが、物腰が柔らかく穏やかな顔をしている。

薄い黒のニットのセーターにカーキ色のチノパンツ。こんなと

ころに住んでいる変わり者には見えないが。

「先にお湯を使ってください。風邪をひきますよ。この先にバスルームがあります。替えの服は良かつたら私のをお使いください。棚に置いておきますよ」

人の世話をしなれているのか、次々としゃべりながらも用事をこなしていく。

カルーディは結局、用心をしながらも男の世話になり、食事までご馳走になった。今は男の大きすぎる夜着に着替えて、リビングらしい暖炉のある広間に置いてあるソファーアに毛布を被つてすわっていた。

「この島に渡つてすぐに、大陸との気候の違いに驚く。狭い海峡をはさんだだけのこの地がなぜこんなに冷涼なのか。その問いかね青年はああと応じる。

「外海のダルム海。そこからの冷たい風はこの島の南北に走る山脈にぶつかって和らぎ、大陸には影響を与えていません。そのせいで

しゃ「」

「なるほど。ところで、昔レイモンドール王国が魔術によって国境に結界を敷いていたという話を知っていますか」

急に魔術などと言に出したら、変なやつだと警戒されるかもと思ひながらも、カルーティは聞かずにはいられなかつた。何かヒントを。レイモンドールにつながる何か。

ところが男は、カルーティの心配をよそに何としゃべりともなく、世間話の続きを答えるように話し出す。

「魔術で結界ですか。あれは外海のダルム海沖に埋まつていた大量のメタンハイドレートが原因という説だつたのではありますか。それにしても、レイモンドール王国。その名前を聞くのも久しぶりですね。それを調べにこんな山奥にいらしたんですか。では、せつかくですから古い話を聞かせいたしましょ。ところであなたのお名前は？」

「お世話になつていたのに駄乗らなかつたとはすみません。ぼくはカルーティ・バンドールと言つます」

「そうですか。あなたの髪と田を見てもしゃ、と思つましたが……」「もしや？」

「ええ、今ここで使われている言葉の発音はイストニアのものです
が、昔は違いましたから。あなたの名前はレイモンドール王朝では
こう、読みます」

男は宙に指で字を書きながら言つ。

「クロードと」

そう言つて話出した男の話に、いつしか引き込まれていったの
だ。

朝日が昇りきると自分が思つた以上に古い建物にいることが分か
つてきた。

壁も石積みで部屋は驚くほど天井が高い。 床も黒曜石と大理石
が模様を組むようにはめ込まれている。 縦に長く切つてある窓か
ら朝日が長い光を部屋の奥まで通している大きな部屋。 天井にも
壁に刻まれているのは何かの模様なのか、釘で引っかけて描いたよ
うな文字。 そして床の模様は円の中に複雑に外国の言葉や記号が
描き込まれている。

「ここは、一体どこなんですか？ 魔道教に関する物は何一つとして
残つてないはずですよね？」

見回したカルーディは、お茶の用意をして盆に載せて入つて來た
男に問う。

「いいえ、残つていますよ魔道教は」

驚くカルーディに、にっこりと男は笑いかける。

「イストニアをはじめ、この大陸で信仰されているイールアイ教で
すが、さきほどのレイモンドール王朝の読み方ではイーヴァルアイ

と読みます。そして教祖の名前ですが

「ドノアン……って、もしかしてそれじゃあ、話に出てきた、ダニアンって魔道師のことじやあ」

「ええ、彼は百二十歳まで生きましたからねえ。そういう、お祈りの最後に言う言葉の意味を知っていますか？」

噴出しそうな男を前にカルーディは厳かに答える。

「エオー ウルズ ハガル」

「意味は？」

「神の祝福あれ、そうでしょう？」

男は笑いながらカルーディを見た。

「古代レーン文字では、とつとと逃げろ、です

「何でそんな……」

引きつるカルーディに、ヒツヒツと笑う男はそれに答えかけたが、
微かな物音にそれも中断する。

「あ、お戻りになりました。少し、失礼します」

お茶のポットもそのままに、男は嬉しそうにそのまま部屋を出て行く。

勝手にお茶を飲んでもいいのかと聞こえに、彼はまだ名乗つてもいなきことに気づいた。

そうっと部屋を出てホールにつながる階段から下をうかがうが、朝の光もここまで届かないのか薄暗くて入り口に立っているのが誰なのかまではわからない。

しんとした中に聞こえるのは階段を軽快に降りていく足音。

耳をすませばホールで反響して聞こえてくる声。

「お帰りなさいませ。お疲れでしょ」

「ああ、サウンティトウーダに無理をさせてしまった。汚れてしまつたから外で待たしてある。水を多めにやつて休ませてやれ」

「はい」

体を手すりから乗り出すよつと見ると階下のホールで何かが光つた。

髪が光に反射したのだと分かったのは暫くしてから。

カルーディは自分が何の中に足を踏み入れたのか、分かっていかつた。

それは、後戻りの出来ない魔術の結界の中。

何百年もの消えない夢の中……かもしない。

そして彼の物語がはじまるのかも。

完

67・覚めない夢（後書き）

最後までお読みくださいました事、感謝します。

一応これでレイモンドール王国の話は終わりです。

旅立つたクロードの結末は外伝として出すつもりです。

ありがとうございました。

1・レイモンドール綺譚

2・レイモンドール綺譚（転成の章）・・この小説です。

3・外伝 レイモンドール綺譚（創成の章）・・レイモンドール国
ができた頃の話です。

4・外伝 クロード冒険譚・・時期としては、本編の1と2の間の
話です。

（一話、一話独立した話になります。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0252e/>

レイモンドール綺譚（転成の章）

2010年10月8日13時37分発行